

南城論

2020～2022

私は、南城市発足以前の2004年からこの地で生活しているが、地域にかかわる多様なことに関わってきた。そして、地域を歩き、多様な方々とお付き合いしてきた。その中で、2010年代半ば以降、南城市史作成にかかわり、2022年に公刊された「南城の民俗」の執筆に参加してきた。「南城の民俗」は、71の全集落について書こうという壮大な当初計画だったが、思うに任せず、道半ばの段階にある。私が直接関わった総論編の「市民の語りで描く南城の多彩な集落（シマ）の歴史」も、本格的な南城集落論への準備作業的性格を多分にもつものである。

そこで、2022年段階の南城集落論と、本格的な南城集落論の間をつなぐものとして、たくさんの小論を、ブログに書き続けた。この小論を本冊子に集約して、今後の作業につなげようと思う。

本格的作業を私自身ができるかどうかは、年齢上のこともあり、成否は相半ばするが、いずれにしても、若い方々が何らかの形にしてくださることを祈念している。そのためにも、読まれた方々からのコメントを期待するものだ。

2023年2月

目次

※ 項目冒頭の年月日は、ブログ掲載日

- 2018年05月10日 南城市教育委員会「南城市の御嶽」2018年を読む1
- 2018年05月15日 南城市教育委員会「南城市の御嶽」2018年刊を読む2 さらなる探求への期待
- 2018年05月22日 南城市教育委員会「南城市の御嶽」2018年刊を読む3 歴史的検討
- 2019年03月03日 若いころの私と地域とのつきあい 私の地域研究史1
- 2019年03月10日 沖縄にこだわる 私の地域研究史2
- 2019年03月18日 地域調査の多様なアプローチ 私の地域研究史3
- 2019年03月25日 南城学？ 私の地域研究史4
- 2019年07月10日 南城についての長文を書き始める準備 南城論1
- 2019年07月15日 町村史 字誌 どんなことを考えたいか 南城論2
- 2019年07月21日 (続) どんなことを考えたいか 南城論3
- 2019年07月25日 住民が作る南城、行政が作る南城 南城論4
- 2019年07月30日 自然条件地理条件と暮らしとのかかわり 南城論5
- 2019年08月03日 自然条件と産業との連関 南城論6
- 2019年08月08日 自然条件 海岸・港・漁業 南城論7
- 2019年08月14日 自然条件 空の利用と軍事基地 南城論8
- 2019年08月19日 自然災害と集落の立地 南城論9
- 2019年08月22日 集落の歴史 15世紀以前 16～19世紀 南城論10
- 2019年08月27日 集落の歴史 20世紀の激変 南城論11
- 2019年09月01日 集落の歴史 20世紀後半以降の長期にわたって継続する激変 時期区分 南城論12
- 2019年09月05日 集落の歴史 時期区分の続き 南城論13
- 2019年09月10日 集落の歴史 食の自給 人口規模 南城論14
- 2019年09月15日 集落の歴史 土農分離 南城論15
- 2019年09月23日 新興団地誕生の意味 南城論16
- 2019年09月30日 集落の性格変化 南城論17
- 2019年10月09日 縁・つながりの基盤 南城論18
- 2019年10月20日 縁・つながりを豊かにする集落 南城論19
- 2019年10月28日 最近の大変化を時期区分する Fの時期の設定 南城論20
- 2019年11月04日 (続) 最近の大変化 Fの時期の設定 南城論21
- 2019年11月14日 Fの次の時期区分 南城論22
- 2019年11月23日 Dの時期(戦中・戦後)の意味 南城論23 (最終回)
- 2020年04月01日 南城市史「民俗」編の私の担当原稿の完了
- 2020年11月15日 拙稿「南城市の民俗総論(タイトル未定)」校正に3年!?かかるので、発刊を無期延期したい!?
- 2022年03月20日 南城市史「南城の民俗」「大里のちてーばなし」発刊

- 2022年04月19日 『南城市の民俗』の発刊
- 2021年02月27日 南城論成立の基盤 行政上の南城市成立からスタートして 南城論へ1
- 2021年03月03日 現時点で、南城を歴史的存在として論じることは可能か 南城論へ2
- 2021年03月07日 南城地域で調べたい考えたいこと 約千年前の大量の移住者たち 南城論へ3
- 2021年03月11日 言語 交易 南城論へ4
- 2021年03月16日 集落とグスク 南城論へ5
- 2021年03月21日 水田稲作と地域差 南城論へ6
- 2021年03月25日 移住者の出自 南城論へ7
- 2021年03月30日 古村の成立 南城論へ8
- 2021年06月21日 聞き取りと文献資料 南城集落論への旅A 1
- 2021年06月26日 ステレオタイプなとらえ方 南城集落論への旅A 2
- 2021年07月02日 集落激変前の姿を「古き原型」とみなす傾向 南城集落論への旅A 3
- 2021年07月07日 集落（シマ）アイデンティティ 南城集落論への旅A 4
- 2021年07月12日 集落の同質性と異質排除 南城集落論への旅A 5
- 2021年07月18日 「上」からの統治下の集落 原勝負 南城集落論への旅A 6
- 2021年07月23日 集落内の階層分化 多様な職業 南城集落論への旅A 7
- 2021年07月29日 思い違いの「自然村」イメージ 南城集落論への旅B1
- 2021年08月03日 思い違いの「自然村」イメージ（続） 支配・統治と集落 南城集落論への旅B2
- 2021年08月09日 「上」からの統治と集落住民の自治とのせめぎあい 南城集落論への旅B3
- 2021年08月15日 「集落」イメージをチェックする 南城集落論への旅B4
- 2021年08月21日 集落の移動と人間の移動 南城集落論への旅B5
- 2021年08月26日 貝塚時代の集落 南城集落論への旅B6
- 2021年08月31日 大量移住と農業開始のなかでの集落 南城集落論への旅B7
- 2021年09月06日 農業・交易の本格化のなかでの集落 「外」「上」からの集落統治の開始 南城集落論への旅B8
- 2021年09月12日 移住者たちが持ち込んだ穀類 南城集落論への旅C1
- 2021年09月19日 外来者と集落 南城集落論への旅C2
- 2021年09月25日 太陰暦の前の暦 南城集落論への旅C3
- 2021年10月01日 マキ 南城集落論への旅C4
- 2021年10月07日 マキとトン（殿）、神アサギ 南城集落論への旅C5
- 2021年10月13日 拝所と集落祭祀 御嶽 南城集落論への旅C6
- 2021年10月19日 王府の収入 貿易と集落からの収奪 南城集落論への旅C7
- 2021年10月25日 家と家内（チネー） 南城集落論への旅C8
- 2021年10月31日 （続）家と家内（チネー） 南城集落論への旅C9
- 2021年11月13日 家と墓 ハラ、ヒキ 南城集落論への旅C10

- 2021年11月30日 グスク時代の農業社会化をめぐる問題 安里進『グスク・共同体・村』 南城論への旅D1
- 2021年12月05日 グスク時代の集落間つながり 南城論への旅D2
- 2021年12月10日 (続) グスク時代の集落間つながり 南城論への旅D3
- 2021年12月15日 地域共同体 南城論への旅D4
- 2021年12月20日 (続) 地域共同体 南城論への旅D5
- 2021年12月25日 按司 海外交易従事者 南城論への旅D6
- 2021年12月30日 寨官 王-按司体制 南城論への旅D7
- 2022年01月04日 古琉球集落から近世的集落へ 南城論への旅D8
- 2022年01月09日 稲福の上御願遺跡 南城論への旅D9
- 2022年01月13日 稲福集落の歴史変化 南城論への旅D10
- 2022年01月18日 糸数 安座真 船越など 南城論への旅D11
- 2022年01月23日 糸数 大城 南城論への旅D12
- 2022年01月28日 近世集落形成以前 南城論への旅E1
- 2022年02月02日 集落移動 南城論への旅E2
- 2022年02月07日 薩摩=王府統治体制下での集落 南城論への旅E3
- 2022年02月12日 薩摩=王府統治体制下での集落移動 南城論への旅E4
- 2022年02月17日 集落統治のための知恵 マキ用語 細谷昂『日本の農村』 南城論への旅E5
- 2022年02月22日 若者組と青年団、小学校 南城論への旅E6
- 2022年02月28日 東南アジア集落と沖縄集落 南城論への旅E7
- 2022年03月07日 耕地と位牌 南城論への旅E8
- 2022年03月12日 近世沖縄集落と薩摩集落 南城論への旅E9
- 2022年03月18日 近世末期集落における階層分化 南城論への旅E10
- 2022年03月24日 近世から明治期にかけての集落における階層分化 南城論への旅E11
- 2022年03月30日 親族関係におけるタテとヨコ 南城論への旅E12
- 2022年04月25日 「市民の語り」で描く南城の多彩な集落(シマ)の歴史 南城論への旅F1
- 2022年05月01日 集落史研究 字誌 南城論への旅F2
- 2022年05月07日 20世紀後半の生活変化をいかに分析するか 南城論への旅F3
- 2022年05月13日 集落の内からの流れと、集落の上からの流れ 南城論への旅F4
- 2022年05月19日 集落役員の選出方法の変化 南城論への旅F5
- 2022年05月25日 市町村と集落 南城論への旅F6
- 2022年05月31日 集落と市町村行政 南城論への旅F7
- 2022年06月06日 自然災害についての調査研究と叙述(前) 南城論への旅F8
- 2022年06月12日 自然災害についての調査研究と叙述(後) 南城論への旅F9
- 2022年06月18日 時代区分 南城論への旅F10
- 2022年06月24日 「近代化」というテーマ 「外」ないしは「上」から統治する側からの眼 南城論への旅F11

- 2022年06月30日 「近代化」というテーマ 内側からの眼、住民自身の眼 南城論への旅F12
- 2022年07月07日 「近代化」をめぐる多様な論点 合理化 科学 門中化 南城論への旅F13
- 2022年07月12日 風俗改良運動 資本主義の浸透 個人化と共同体の弱まり 学校 南城論への旅F14
- 2022年07月18日 西洋医学 沖縄アイデンティティ 南城論への旅F15
- 2022年07月24日 近代化の後 南城論への旅F16
- 2022年07月30日 玉城毅著書 屋取集落には農民層も多い 親慶原 新川 南城論への旅F17
- 2022年08月05日 屋取集落 富農の生成 南城論への旅F18
- 2022年08月11日 <きょうだい> 玉城論 南城論への旅F19
- 2022年08月17日 集落の多様性 民俗学以外の多様なアプローチ 南城論への旅F20
- 2022年08月23日 人の移動と人口増減 南城論への旅F21
- 2022年08月29日 少子高齢化 社会移動 移住者 南城論への旅F22
- 2022年09月04日 集落と生産 南城論への旅F23
- 2022年09月10日 農業と集落との分離と再結合 商工業の模索 南城論への旅F24
- 2022年09月16日 産業・雇用と集落 起業体験の蓄積 南城論への旅F25
- 2022年09月22日 都市化 共同体とコミュニティ 南城論への旅F26
- 2022年09月28日 集落の変容 集落起こし 人口変化と将来計画 南城論への旅F27
-
- 2022年10月04日 生活 衣食 南城論への旅G1
- 2022年10月10日 水道 生活支援 南城論への旅G2
- 2022年10月16日 家族 産育 南城論への旅G3
- 2022年10月22日 保育園 幼稚園 小学校 南城論への旅G4
- 2022年10月28日 集落の自治組織と集落運営 南城論への旅G5
- 2022年11月03日 年齢別組織 南城論への旅G6
- 2022年11月09日 年齢別組織の苦難と今後(1) サークル活動 南城論への旅G7
- 2022年11月15日 年齢別組織の苦難と今後(2) 南城論への旅G8
- 2022年11月21日 集落の福祉機能 集落祭祀 南城論への旅G9
- 2022年11月27日 集落祭祀と統治者とのかかわり 南城論への旅G10
- 2022年12月03日 集落行事の減少傾向と今後 南城論への旅G11
- 2022年12月09日 集落芸能 南城論への旅G12
- 2022年12月15日 スポーツ・運動会 災害対応・秩序維持 南城論への旅G13
- 2022年12月21日 移住者の増大と集落 南城論への旅G14
-
- 2022年12月26日 個別集落史の執筆は大変だった 各論編 南城論への旅H1
- 2023年01月01日 沖縄戦と集落 南城論への旅H2
- 2023年01月07日 集落変化の歴史的ポイント 集落による違い 南城論への旅H3
- 2023年01月12日 集落内の共通性共有性 南城論への旅H4
- 2023年01月17日 集落史制作 南城論への旅H5
- 2023年01月23日 19世紀以前の生活レベルでの集落史叙述 南城論への旅H6 最終回

2018年05月10日

南城市教育委員会「南城市の御嶽」2018年を読む1

「南城市内にある拝所」で、「2011～2012年」に「字・区によって祭祀が過去行われていた、もしくは現在行われている拝所を対象として調査を行った」「1037ヶ所」についての報告書だ。大判で546ページにわたる大部なものだ。

私は、2014年12月から2015年5月にかけて市内全域の散策を数十回にわけてした。そこで、出会った拝所も多く、本書に登場する拝所の場所はおおよそつかめるのだが、全拝所1037ヶ所のうちきちんと思い起こせるのは、わずかしかない。膨大な拝所だから仕方がないだろう。

読みながら、発見し考えたことをアットランダムにコメントしていこう。

1) 象徴的なものとして「御嶽」というタイトルがついているが、拝所は多種多様だ。カー（井泉）・石獅子・墓などを含んでいる。石獅子のように、字・区によって拝所になっているところもあればそうでないところもある。基準は、字・区で拝んでいるかどうかにあるようだ。

2) 字・区で拝んでいるところ以外では、門中・ハラで拝むところ、家族・個人で拝むところ、さらには、ユタとのつながりで拝むところなどもあろう。なかには、拝所としては同じでありながら、字・区で拝むところとは別のところを拝むものがある。私が新原行事の濱川御嶽拝みに同行したとき、コンクリート製のものの右隣りの場で拝むのに気づいた。コンクリート製は、字・区とはかかわりのないグループが設置したようだ。ある時、ユタの一行が濱川御嶽で拝みをするのに出会ったことがある。そのように、同じ拝所でも異なる拝みがあるようだ。そのことにかかわる記述がある拝所も出てくる。

3) 墓なども、字・区で拝んでいるが、家族・個人・門中などでは今では拝みがされていない『古墓』も本書には登場してくる。

4) こうしたことは、拝所をめぐる歴史性が反映していそう。按司墓などもその例だろう。

その字の元の場所である古島の拝所が中心に描かれている字・区もある。稲福は、上稲福と呼ばれるかつての集落の拝所中心に記述されている。



5) 近世後半ないしは末期以降成立した屋取集落などでは、拝所の数は少ない。字・区による祭祀よりは親族集団による祭祀の比重が高いことがうかがわれる。

6) ここ数十年足らずのうち成立した新興団地などの拝所は記述されていない。拝所が存在しない、ないしは字・区の行事にはなっていないだろう。

7) 沖縄戦の犠牲者にかかわるものも、各地に存在しているが、本書では対象として記述されていない。また、戦前建てられた「忠魂碑」「戦没者碑」の類も記述されていない。

本書は、今後の集落（シマ）祭祀の研究の展開において、貴重な資料を提供するだろう。この分野を専門とする研究者の検討を期待したい。

私は専門外だが、今、同じ南城市史の「民俗編」の作成にかかわっている。その作業には、本書の成果が大きな示唆を与える。とくに、集落ごとに「民俗」を明らかにしていくという方針の作業の上で、集落祭祀の分野には、決定的に有効な材料を提供している。昨年発刊された「グスク」編を合わせれば、この分野の7～8割がたが完了しているところもある人も出てくるほどだろう。無論、「民俗」編としてまとめるうえでは、それなりの掘り下げが必要となる。

2018年05月15日

南城市教育委員会「南城市の御嶽」2018年刊を読む2 さらに探求への期待

前回述べたことをもとに、さらなる掘り下げに期待したいことをいくつか並べておこう。専門外の私なので、もっぱら、その分野で追求なさっている方々への期待となる。

- 1) 立地。自然条件と歴史条件がからむが、立地にみられる共通性というか、法則性。
- 2) 本書は、集落（シマ）祭祀に焦点をあてているが、ハラ・門中祭祀や個人祭祀（信仰）とのかかわりはどうであろうか。
- 3) 御嶽・殿・カー（井泉）・土帝君・古墓・石獅子などの種別ごとの特性と相互連関
- 4) 伝承と歴史
- 5) 集落創設・分割・移動・消滅とのかかわり 元島・古島 ウトゥーシ（遥拝所）が設置される構造 災害とのかかわり
- 6) 地域特性 例 佐敷地域を中心に土帝君が存在するが、その歴史的背景。そして、集落ごとにそのバリエーションを生み出しているようだが、それについての検討。
- 7) 集落祭祀をとりおこなう人々の継承と変化
男性神人が存在する集落とそうでない集落
- 8) ユタ・サンジンソウなどと拝所との関係
- 9) 観音堂が、南城市外を含めていくつかみられる。そこにおける共通性や構造の検討。仏教信仰・仏教祭祀とのかかわりも含めて。
拝所との関わりで、農業と漁業との差異 海難遭遇者にかかわる祭祀 鍛冶などその他の生業とのかかわり
- 10) カーを拝所としている集落が多い。カーについては集落ごとの濃淡差が本書には見られるが、実際はどうだろうか。
- 11) 屋取集落における拝所の特性。その成立継承の歴史的検討。門中・家族祭祀とのかかわり。
- 12) 1970年代以降スタートした集落（団地）は、本書では対象から外しているが、その集落での拝所成立の有無の検討 公民館に火の神を設置するところの有無
- 13) ニライカナイ、オボツカグラ 稲作起源 祖先崇拜 水 火 防災 など諸種信仰とのかかわり

なお、本書は巻末に「用語解説」を掲載している。専門外の読者にとっては、大変ありがたい。

2018年05月22日

南城市教育委員会「南城市の御嶽」2018年刊を読む3 歴史的検討

歴史について、私が思いつくことを少しだけ触れておきたい。

1) 15世紀以降については、多少明らかになっているが、14世紀以前となると、ほとんどわからないところが多い。アマミキヨなどの伝承、あるいは古謡にもとづくものなどが有力な材料となるが、確定的なことはつかみにくい。その時期は、最近考古学研究もすすんでいるが、それでも有効材料を得にくい分野だ。

そのため、アマミキヨなどの伝説と、「三山統一」にむけた過程にまつわる按司や集落成立にかかわる伝説、古謡やおもろなどに表れたものを手掛かりにしつつ、その間を埋めるものをいかにつなぐかという推理(想像)に頼るところが大きい。それらには、稲の由来伝説のように、同じようなものが各地で出てきて、「沖縄で最初」の地が複数登場したりする。たとえば、久高とか百名とかにはそうした性格にかかわるものが出てくる。

2) 第一尚氏にかかわるものと、第二尚氏にかかわるものが複雑に絡む伝説・痕跡には注目したいところが多い。広くは知られていないだけになおさらそうだ。さらに第一尚氏中途における「親族間」による王位継承争いが事態を複雑化させている。

これらの事態が、その後の祭祀をめぐる複雑さを作る一因となっている。たとえば、久高は、第一尚氏とつながりが深い大里家と、第二尚氏とのつながりの深い久高家、さらにそれら以前の集落形成維持とのかかわりのある家などと、事態が複雑だ。斎場御嶽にしても、王家とのかかわりが生まれる以前の祭祀について聞いたことがある。

また、富里、當山、佐敷などは、第一尚氏とのかかわりが深く、その後の第二尚氏による統治とのからみもあって、歴史的変容の視点を欠くわけにはいかない。

3) ノロが深くかかわる拝所は、第二尚氏以降の中央統制と深くかかわる。いくつかの集落を「担当」するノロが一般的だが、そのことと集落祭祀とのかかわり。戦後、ノロが不在になる例が続出するが、そのことが拝所・祭祀をどう変化させたのか。戦前における當山のノロがキリスト教信仰へと転換するなかで生じた祭祀をめぐる変動も注目すべき一つだろう。

4) 18世紀中途に王家が始め、その後、士族、さらには士族外にも広まった清明祭は、集落単位の祭祀には顔を出さないことが多いが、それらをめぐる検討が必要だろう。

第二尚氏、特に尚真統治以降の集落祭祀再編成以降、集落祭祀は、各地に共通する定型めいたものが作り出されたようだが、それらのその後の歴史的変化。

5) 戦前の日本政府統治下における集落祭祀の統制、とくに国家神道とのかかわりにおける変容の進行ないしは変容の阻止の動向はいかがだったろうか。

以上触れたように、第二尚王朝統治、日本政府統治など、祭祀統治に深くかかわったものが集落祭祀に強い規制力をもった。それに対して、集落自身はどう対応したのか。たとえば、拝所のなかに、当時の統治者が推進した、集落にと

って外来のものが取り込まれている（ないしは、取り込まされている）ことをどう見るのか。たとえば、御嶽に設置された鳥居。

今後の検討研究に期待しよう。

2019年03月03日

若いころの私と地域とのつきあい 私の地域研究史 1

4年前から南城市史「民俗」編の調査委員になり、南城の人々の暮らし（民俗）や歴史を調べる活動をしている。それ以前にも10年余り、南城市文化センターシュガーホールの運営審議会、さらに南城市観光振興審議会をはじめとする観光文化行政の委員会など南城市行政にかかわってきた。

不思議なことに、これらは私のもともとの専門分野である教育関連ではない。こうして10年以上にわたり南城市という一つの地域にかかわる専門外分野の仕事をしていると、なぜかかかわっているのか、不思議に思われることがある。

いずれも依頼を受けて引き受けたのであって、私から立候補したわけではない。でも、引き受けてもよいなと思ったことは確かだ。そこで改めて私が特定地域にかかわってきた自分史を専門分野であるなしを問わずに書き連ねてみようと思う。そして、私なりのかかわり方の特徴についても考えてみたい。

まず意図的にかかわったのではなく、生まれたという運命にもとづいて生育した地域のことである。出生から小学生時代までの12年間は、現在は岐阜市に合併されているが、当時は人口数千の農村であった。集落以外は、見渡す限り水田だった。しかし、繊維産業が栄えるにつれて、地域が激変していく。繊維景気から高度経済成長に移るころ、建設の進む名古屋へと土砂を輸送するトラックが、一日数千台もいきかうところとなった。

小学生時代は、近所の子も達誰もが思うように、家業をつぐものだと思い込んでいたが、高度経済成長に入るなかで、事態は変わる。高校大学進学・都会就職という流れへと大きく切り替わった。私も、名古屋の中学高校に通学し、大学は東京に行くことになった。中学高校大学時代は、居住地域とのかかわりは、祭り・行事などに限られ、ゼロに近かった。

「地域」というものに会うのは、大学3年生の時、学科メンバーとともに、岐阜県恵那の調査に出かけた時が最初だ。当時、所属学科は2学年合わせて10人足らずの小さなものだったが、研究室の共同テーマとして、教育とかかわらせた地域調査・地域教育研究を進めていた。その指導者のお一人は、つい最近100才でお亡くなりになった太田堯先生だ。

その地域も、高度経済成長のなかで、急激な地域変貌がすすみ、教師たちは「地肌の教育」というキャッチフレーズで、地域に根差す教育を追求していた。私は、結局、そのことを卒業論文にした。ということで、その地域に滞在して、地域調査を行った。行政データ・歴史資料・聞き取りに加えて、子ども達とも直接かかわる活動を展開した。農業センサスなど行政資料に眼を通し、農業の激変を目の当たりにした記憶が残っている。

これが現在に連なる地域調査の最初の体験だった。

2019年03月10日

沖縄にこだわる 私の地域研究史2

大学院では、「生活指導」を専攻し、研究は地域とのかかわりが薄かった。しかし指導教官から、地方の教員養成大学に就職して、地域にかかわる研究・仕事をする楽しさを繰り返し聞いた。そのころ、沖縄出身の恵美子と出会い、沖縄就職の話がもちあがった。話しても信じられないほどのドラマを経て、沖縄大学・琉球大学に就職し、沖縄じゅうを駆け巡る生活を1972～1990年に送った。

沖縄にきたのは、日本「復帰」直前だったが、その時以来、沖縄と日本をめぐって、民族・エスニック・地域といったことにかかわって、沖縄の、そして私自身のアイデンティティを考え続けてきた。それについては、「魅せる沖縄——私の沖縄論」（2018年高文研刊）で、これまでの思考をまとめあげた。

そして、沖縄教育界との深いつきあいをすすめていく。そこでは、日本を標準とする強固な思考のなかで、「沖縄は遅れている」という異口同音の発言にしばしば出会う。地元沖縄にはよい所が全くないかのようだった。それにしても、強烈な沖縄愛に満ちているから出てくる発言でもあった。そこで、私は、沖縄にある実践の事実をもとにして、実践の改善を強調し続けた。そのあたりは、「沖縄教育の反省と提案」（1983年明治図書刊）で多くのことを書いた。さらに、「沖縄県の教育史」（1991年思文閣）で書き綴った。

1990年から2004年までは、愛知生活を送ったが、沖縄とは対照的に、地元の愛知についての語り合いがとても少ないことが印象的だった。

さらに2004年から沖縄生活を再開する。玉城生活早々から「玉城ユンタク」というのを毎月開催して、いろいろな方々と語り合い、南城市スタート後もしばらく「南城ユンタク」を続けた。そのなかで、再び沖縄について考え始めた。教育については、「沖縄おこし 人生おこしの教育」（2011年アクアコーラル企画）を発刊し、沖縄おこしとかかわらせて沖縄教育を考えた。

こうした私個人の経過を踏まえて、現在取り組み中の南城市の「民俗」調査、つまり各集落を舞台に展開される人々の暮らしの聞き取りを中心にして調べる活動に入った。

2019年03月18日

地域調査の多様なアプローチ 私の地域研究史3

南城市の集落ごとの「民俗（暮らし）」の調査は、特定の専門分野に限定してすすめるわけにはいかない。次のような諸問題を関連する分野の視点をもちつつすすめることになる。

いくつかの検討アプローチと主な関連研究分野

- | | |
|--------------|-----------------|
| 1) 農業生産 商工業 | 経済学 経済史 |
| 2) 地域統治 | 歴史学 行政学 |
| 3) 消費生活 生活改善 | 民俗学 人類学 民族学 家政学 |

- | | |
|---------------|---------------------|
| 4) 教育 | 教育学 |
| 5) 文化・言語 | 言語学 文化史 芸術芸能史 |
| 6) 宗教・信仰 | 宗教学 民俗学 |
| 7) 人のつながり | コミュニティとアソシエーション 社会学 |
| 8) 自然・地理 | 気象学 地質学 地理学 生態学 |
| 9) 軍事 | 軍事学 地政学 |
| 10) 集落配置 家屋建築 | 建築学 |
| 11) 人口 生殖 | 人口学 |

調査活動に携わる人には、本業としての研究者もいるが、そうとは限らない方もいる。それらの方々が、関連しそうな研究分野を参照しながら調査を進める。その際の留意点をいくつかあげよう。

- 1) 一つの研究分野に絞るよりも、諸分野の研究を学際的に参照しながらすすめる。
- 2) 米軍は、自らの沖縄統治方針を練り上げるために、地域研究的要素を多分に持っていた文化人類学・民族学研究をおおいに活用した。それに対して、米軍統治とは対照的な住民の視点からの研究が求められる。
- 3) これまでの市町村史に掲載された民俗関連の調査の多くは、19世紀末から20世紀初めを対象にすることが多かったので、結果として1900年前後（つまり明治後期）の像が浮かび上がってきた。もう少し言うと、明治後期の土地整理や風俗改良運動以前の姿といえるものが多そうだ。
- 4) 2010年代後半の現在、ヒアリングを中心にした調査をするとすると、20世紀半ば以降、さかのぼれるとしても昭和10年代のことが対象となる。
- 5) 20世紀に入る頃以前と、20世紀半ば以降との間には、劇的といえるほどの変化がある。いくつかあげると、
 - 明治後期の土地整理や風俗改良運動期以降の変化
 - 沖縄戦と米軍統治に伴う変化
 - 農業主体の集落から「勤め人」主体の集落への変動 商品経済中心への変化
 - 生産だけでなく、生活における集落の共同性のありようの変化。とくに、共同性が劇的に低下し、集落住民の全員参加というよりも任意参加イメージが増大している。

2019年03月25日

南城学？ 私の地域研究史4

前回述べたことをおさえながら、私も調査活動をしてきた。そしてその準備として南城市に限らず沖縄全般の集落について、このブログでいろいろと書いてきた。参照していただきたい。

「沖縄の集落」(2015年12月～2016年5月) 『浅野誠 南城2013～2017』に収録

「第二次沖縄の集落」(2016年9月～2017年3月) 『浅野誠 沖縄論シリーズ6 産業経済 政治 生活 集落 自然・環境 芸能 2010～2018年』に収録

いずれも、本HPに掲載

私の元々の専攻分野は教育学である。今回の調査に引き付けて言うと、日本教育史である。だが、ここ20～30年は、しばしばその範囲を飛び越してきた。とりわけ、今回の南城における集落の民俗（暮らし）の調査研究では、多彩な世界に飛び出していくことになった。教育学にかかわることは、全体の10%にも満たない。

今回の調査研究の特質は、専門分野の視点よりも、「南城」と対象が限定されていること、いいかえると焦点化されていることにある。地域研究にはそうした例が多い。とくに沖縄研究はそうした研究史を豊かに蓄積している点に特質が見いだせよう。それを『沖縄学』と表現することもある。

沖縄学という表現にならって言うと、今回の調査研究は『南城学』といってもよいだろう。「学」とまでいなくても「論」「史」とはいえよう。『南城論』『南城史』である。そのなかの「集落学」「集落論」「集落史」なのである。

そうした仕事の前例としては、佐喜真興英「シマの話」などがある。100～150年前の話だが。そうしたものを参照するが、ここ100年以内を対象とするとすると、参照できるものは、それほど多くない。とくに南城での今回の調査は、聞き取りを中心に組み立てるので、どうしても、ここ数十年間のことに絞られがちだ。

また、南城市内71の全集落を対象にしている。数百年以上の長い歴史をもつシマ、300～100年前に、首里などから移住してきた土族が中心となって作った屋取集落、ここ50年以内に作られた新興団地など、実に多様な集落で構成されている。

それだけに難しさを伴う。ということで、現在は第一次作業が進行中というところだ。全集落が完成するにはかなりの年数がかかるだろう。私自身も、最後まで付き合いたいとおもうが、年齢的にどこまでできるだろうか。

2019年07月10日

南城についての長文を書き始める準備 南城論1

昨年末から取り掛かり始め、来年まで続きそうな大きな仕事として、南城市史民俗編のなかの「総論（仮称）」の執筆作業がある。各論編のなかの担当個所の執筆は、昨年終えた。

この民俗編の作業は、4年以上前にスタートして、残り2年ほどで第一ステップを完成させるという長く大きな仕事である。南城市教育委員会文化課市史係が担当部署であり、多くの職員、嘱託、調査員による共同作業だ。私は、その中の調査委員会委員長を、2015年から務めている。

この作業の特徴は、南城市にある71の字をすべて対象にし、字毎の調査記述を中心に据えていることがある。そして、各字の何百人にも上る市民からの直接の聞き取り作業を中心にしていることも大きな特徴である。

これらの作業は、いろいろとなされてきた各地の市町村史のなかでは、初体験に近いといえるほどのものだ。作業量の多さもかかわって、かなり長期にわたって継続調査が必要となるので、まずは現段階で執筆が現実にはできそうな字から順次活字化していくことになりそうだ。だから、第一ステップというわけだ。その後、さらに年数をかけて全字の記述が完成することが期待されている。

その難しさは、字の多様性に由来する面もある。数百年以上の歴史をもつ字、150～250年ほどの歴史を持つ字、15～50年の歴史という新しい字（自治会）までと多様なのだ。

私なりの南城論は、このブログのなかで、いろいろと書いてきた。それらを集約編集して、このホームページ「浅野誠・浅野恵美子の世界」に収録してきた。それらを一覧表にしておこう。

- シリーズ南城物語
1. 南城の聖地・名所
 2. 南城の芸能・工芸・芸術
 3. 南城のカフェ・レストラン・宿泊施設・ガーデン
 4. 南城で暮らす シマの暮らし
 5. 南城を盛り上げる

——以上、2012年6月編集発行

南城 南城論・観光・尚巴志マスタープラン・シュガーホール・集落・市史・学童保育・保育園

——2018年2月編集発行

南城を歩き、景観を楽しむ ——2018年3月編集発行

今回、「南城論」連載を始めるのは、初めに記した「総論（仮称）」執筆を始める前に、いろいろと考えたいことを書き並べて、読者の皆さんから知恵を集めたいからだ。だから、このブログのコメント欄、あるいはオーナーへのメッセージなどの形でコメントいただければ幸いだ。

2019年07月15日

町村史 字誌 どんなことを考えたいか 南城論2

前回書いたが、この市史「民俗」編の作業は、「聞き取り」を中心に進められている。と同時に、これまでに活字化された印刷物も参照する。たとえば、旧4町村が編集発行した町村史がある。集落単位で書かれているわけではないが、各集落における人々の暮らしを概観するうえで有用だ。

集落ごとに見る場合に最も有用なのは、各集落が編集発行した字誌である。また、字誌に準ずるものとして、公民館建築記念誌がある。それらには、有用な情報があるし、とくに聞き取り記録で有用なものが多い。それらには、発刊年によるが、明治後半から大正・昭和戦前期生まれの人の聞き取りも含まれている。今回の「民俗」編での聞き取りは、主として、昭和戦前期戦後期生まれの方々を中心に、大正期以前生まれの方が少ないので、なおさら有用である。

しかし、すべての字ではなく、限られた字による刊行となっている点が残念である。

では、次回から述べていくことのいくつかを並べていこう。

・南城という地域のつくられ方

住民自身が作る面と、統治・行政側から作る面とのからみあい 地域外からの声や動きもからむ

・地域というまとまりの単位

集落（シマ） 旧町村（間切） 南城市（島尻郡） 沖縄県（群島政府・・・）

・集落（シマ）のアイデンティティ その形成と変化 集落間関係

・知念半島という自然条件と人々の暮らし

・集落の分類 「古村」「屋取村」「新興住宅地」

・集落（シマ）の成立・統合・分化・変化・消滅をめぐる多様なありようを見る。

・集落（シマ）の歴史変動の激しい時

18世紀 シマ（ムラ）分け、シマ（ムラ）建て、シマ（ムラ）の移動、屋取の広がり

1900~1910年頃 土地整理 行政組織の変化 徴兵 移民 金銭経済の浸透 芸能祭祀の変化、就学の一般化 習俗の統制

1945~1950 沖縄戦 生活・生命・集落（シマ）の存亡危機と復興

1960年代 離農 「勤め人」の広がりと一般化 進学・就職をめぐる若者の変化 マスメディア

1972年以降 激動の連続 人生における集落の比重の低下

・集落（シマ）をめぐる人の移動

結婚相手は集落内か集落外か 集落外勤務の一般化（仕事と生活の分離） 集落を超える居住地移動の増大 土地購入・住宅建設 アパート・マンション・団地生活

・移民 出稼ぎもふくめて

・集落（シマ）の人口増減

・集落内人口構成の変化 近年における少子高齢化

・集落（シマ）における人間関係（縁 つながり）の多様さ・変化

地縁 血縁 組織縁 社縁（結社縁） 学校縁 友情縁 商売縁

2019年07月21日

（続）どんなことを考えたいか 南城論3

・集落統治

・住の変化 集落内配置 住宅素材 建築とシマ（ユイマール、カヤの切り出し）

・集落における生産 農業 農業からの転業の動向 生産物の変化（稲・甘藷・甘蔗・野菜・畜産）

・農業外への転職と集落 農業共同体の弱まり

・集落における製造業・商業

・道路

・通信

・医療福祉

・災害・治安

・子ども 産育・教育

・集落組織

・公民館 村屋

・女性組織 婦人会 集落におけるジェンダー

・青年組織

・老人会

・その他の集落内部組織 サークル

・集落祭祀

・芸能・娯楽・スポーツ

・集落のこれから

以上のように集落（シマ）をめぐる多様な面を考えていくことになる。

これらは、多くの書籍や博物館展示などで描かれた、かつての集落「民俗」（農業生産を軸とする生産・生活習慣・用具、集落祭祀）イメージとは大きく異なる。機械・自動車・電気製品・テレビなどに代表される生産生活が日常生活ではごく普通のものになった1960年代以降に生まれた人々が、いまや人口の過半を占めるようになってきている。彼らにとっては、かつての集落イメージは「昔の事」となっている。

そうした点では、以前のものから現在の集落生活への変容について書くことが、一つの軸になる。

と同時に、ここ50年余りの大変化のレベルとは、さらに異なる変化が、ITやAIに象徴されるように進行しつつある。そのなかで、集落変容はどのように進んでいくのだろうか。

2019年07月25日

住民が作る南城、行政が作る南城 南城論4

南城市は「平成の大合併」といわれる4町村合併で、2006年に作られた「行政単位」である。それ以前は、相互に隣接する町村（佐敷が村から町になった1980年以前は4村、19世紀までは4間切）という関係であり、ひとくくりにして語られることは稀だった。※「行政単位」という言葉を使ったが、行政という言葉は、比較的新しいので、近世以前と近代以降とをあわせて表現するなら、統治という言葉の方が妥当だろう。

ひとくくりにして語るのが難しいといっても、隣接しているために、ひとくくりにして語れないことはない。そのひとまとまりを示す言葉としては、「知念半島」「知念地区」、「島尻東部地域」「本島南部東部地域」、あるいは「東四間切（あがりゆまじり）」などが使われた。「南城」という言葉は、古くからある言葉ではなく、合併時に作られたものだ。

それにしても、南城市だけでなく、4町村も各々が統治単位であった。長い歴史のなかでは、統治の都合で、間切や村のなかの集落（シマ）が、隣の間切に移されたり、分離されたりすることもあった。18世紀には、目取真・大城・稲福を玉城間切から大里間切へ、新里・小谷・津波古を大里から佐敷に移すなど、いくつもの例が見られる。「平成の大合併」の際にも、隣接する与那原町、南風原町、東風平村、具志頭村とからんで別の組み合わせで準備が進められたこともあった。

だが、これらの地域を指す言葉の使用は、統治するためだけに限定されるわけではない。住民自身が地域を作る面があり、統治側から作る面とのからみあいが存在した。さらには、その地域外の人まなざしや働きかけがからむ場合もある。

戦後、大里村から与那原が独立したのは、住民自身の要求と、行政側のからみとのなかで進行したことだ。

また、住所表記と字（区、自治会）とがずれているところがある。旧大里村での、高平（高宮城と平川）や仲間（仲程と当間）などがそうである。また、旧佐敷町・旧玉城村・旧知念村の境界をまたがってつくられたつきしろもそうである。そこで、つきしろのように、住所表示が、「南城市つきしろ」と変更される例が出てきた。

そうした単位が、一つのまとまりとして成長成熟していく過程で、まとまりを示す住所表示を生み出していく好例といえよう。住所表示に限らず、その地域の住民としてのアイデンティティを育む例が生まれてきている。市町村の植物

動物などを選定し、市町村を示す図案・歌・「ゆるきゃら」をつくるのもそうだ。南城市は、「なんじい」「ハートのまち」を売り出している。対照的に、旧4町村のそうした類は消滅しつつあり、歴史の記録として残るだけとなり、現実には使用されなくなっていく。

ところで、地域というまとまりの単位には、いくつものレベルがある。

- 1) 集落 (シマ)
- 2) 旧町村 (間切)
- 3) 南城市 (島尻郡)
- 4) 沖縄県 (群島政府・・)

ここでは、1) 2) 3)、とくに1) に焦点をあてていくことになる。2) の単位は、合併後徐々に薄らいでいく。にもかかわらず、人々の意識・生活の中で強い存在である。いまなお3) より強い位置を占めることもある。とくに2) の時期に生育した世代にとっては、そうである。

4) は強力な単位であるが、ここでは直接の対象ではない。

※なお、4) については、浅野誠『魅せる沖縄』高文研2018年刊を参照されたい。

2019年07月30日

自然条件地理条件と暮らしとのかかわり 南城論5

知念半島のほぼ全域は南城市内にあるといってもよいだろう。また、「知念半島プラスアルファ」として南城市があるといってもよいかもしれない。ただ市域内にあつて知念半島内にある地域とそうでない地域との境界はどこなのか、はっきりしない。大里地域のどこまでを知念半島域と見るか、雄樋川周辺は知念半島に含まれるかどうか、といったように。このあたりについてご意見を寄せていただくとありがたい。

それにしても、「ハートのかたち」というキャッチフレーズが使われるように、一つのまとまりといえるかもしれないこの地域には、各地域に共通する自然条件があると同時に、差異に富む自然条件もある。そしてそのことが各集落に共通する暮らしを生み出すと同時に、集落ごとに違いのある特有の暮らしを生み出してきた。

気象の異同

まず、気候・地形などの自然条件から見ると、前回述べた旧町村といった単位による区分とは異なって、中城湾沿いの知念半島北部、中央丘陵部、太平洋沿いの知念半島南部、そして西部平坦地、さらに久高島の五つに分けて考えることができる。

気象がその典型であり、天気予報などでは、糸数にある観測装置のデータをもとに語られることが多いが、実際には地域による差異が大きい。たとえば、風向・雨量などは、地域ごとに大きな違いが見られる。丘陵北側の佐敷で雨がふっているのに、丘陵を超えて南部の玉城に下りると、雨が降っていないといった例は多い。中央丘陵部では濃霧がしばしば立ち込め、激しい湿気に悩まされてきたが、他地域はかなり事情が異なる。

台風襲来の際の風向風力などは違いが大きく、台風災害も異なる。丘陵上部にある糸数の観測地点とは、随分異なると感じる地域は多い。

地質地形の異同

石灰岩とクチャ（島尻層）を中心とする地質がほぼ全域を占める。その地質が多く湧水を生み出している。また、急傾斜地が至る所にあり、地すべり危険地域に指定されている所も多い。1959年には、がけ崩れのため、新里の一部をなしていた桃原地区の住民は各地への移転を余儀なくされ、馬天御嶽も場所を移動した。

傾斜地集落では、傾斜の方向によって、北向きと南向きといったように、家屋配置の差異が出てくる。

東部では、降水は地下水になるものと、地表を小水路となって海に出るものに分かれる。そのため、地域住民以外にも名前が知られるほどの川はない。

たとえば、親慶原の畑地を流れる川（水路というべきか）は、親慶原三叉路近くで、地下に潜りゴルフ場地下をとおって、志喜屋に至り、海へと注ぐ。その豊富な水を使って、志喜屋周辺では、クレソン栽培などが行われてきた。この流れ全体を、どう呼べばいいのだろうか。

西部では、平坦地が広く見られ、また、他市町を通過して海にまで至ることもあって、地域住民以外にも知られる川が存在する。雄樋川、報得川、饒波川、宮平川などがそうである。

2019年08月03日

自然条件と産業との連関 南城論6

前回述べた自然条件が、南城地域共通の産業を生み出してきたと同時に、集落ごとの違いも生み出してきた。産業という、歴史的には農業が高い比重を占める時代が長かった。

自然条件、特に土質・傾斜の有無・水利条件の違いなどが、農業の違いを生み出してきた。代表的には、田と畑の違いである。今では、田はきわめて限定的だが、稲作重視の時代には、水田が可能な限り広げられた。たとえば、船越の雄樋川沿いの低地を水田化することが近世期後半に進められた。当時、こうした新たな開拓地は仕明地と呼ばれ、個人所有も可能であった。船越での土地開拓を主導した人々は、島尻一帯でも抜きん出た富農となっていった。

1960年代に甘蔗作が中心となり、稲作がさびれていくと、船越の水田は、エンサイ・タイモへと転作するが、連作障害で長く続かなかった。その後、畑地へと転換する。船越だけでなく、どの地域でも1960年代から水田は劇的に減少し、現在では稲作開始伝承のある受水走水近くのように、残すことを特別に意図した所のみに限られている。

南城市一帯の農地は、クチャが風化し土壌化したジャーガル、ないしは赤土の一種である島尻マーヅであるが、いずれもアルカリ性土壌である。そのため、パイナップルのように酸性を好む作物の栽培は難しい。

現在では、農地のほとんどが畑であるが、他に畜舎や牧草地が見られる。と同時に、耕作放棄地の多さが、農業関係者の頭を悩ませている。

畑地には、以前は甘蔗・甘藷・大豆・雑穀などが中心、わけても甘蔗が圧倒的面積を占めていたが、現在では、多様な野菜、さらに花卉や観葉植物なども加わって、栽培作物の種類は多様になってきた。作物の選択は、自然条件に規定されると同時に、統治者が求めるもの、そして近年では市場が求めるものによって規定されている。

それらは、亜熱帯気候を生かしているものが多い。また、亜熱帯気候を生かしつつも、さらに条件をよくするために、ビニールハウスなどの施設活用が広がっている。

集落ごとの違いは、稲作が盛んな時期では、田と畑の比率の違いとして表れる。田が多いのは、平坦地が多い所、水利の便が良い所であり、船越、中山、佐敷などがその代表的な集落であろう。

作物の違いにも表れるが、後に書くことになる「集落と生産」の個所で詳述しよう。

農業形態や作物選択を規定するもう一つの要因として、どんな農具を使用したのか、ということがある。船越誌編集委員会『玉城村船越誌』玉城村船越公民館2002年刊（同誌編集のリーダーは、沖縄における民俗研究のリーダーの一人で南城市の民俗をめぐってもすぐれた業績を残した湧上元雄である）には、次のような指摘がなされている。

「刀子、鉄斧、鉄へら、穂摘鎌などの外、刀剣、鉄鍬、鉄釘などもあらわれて、各地の高地性集落での農業生産がかたまるとともに、グスクに拠点をおく按司たちも登場する。（中略）低地の肥沃な重粘土質のジャーガル土地帯に集落が現れるには、鉄製農具の鉄鍬、根切鎌などの普及、発達する15、16世紀まで待たねばならなかった。」p29

2019年08月08日

自然条件 海岸・港・漁業 南城論7

これまで陸上の土地利用を中心に述べてきたが、ここで海に視野を広げて考えてみよう。南城市の集落の多くは海岸線に接している。玉城の中山・玉城・百名・仲村渠・垣花、そして知念のすべての集落、さらに佐敷の津波古・新里・佐敷のように、字の土地が知念半島中央の丘陵部から海岸まで、細長く伸びている集落がある。字の生産・生活が、丘から海までと多様なものを含みこんで展開していることを象徴している。

それは、貝塚時代からの陸の産物と海の産物とをあわせて食用にしてきた歴史ともつながっていると推察される。

海とのつながりは、魚・海草などの海産物利用がまずある。広大なイノーが、それを支えてきた。と同時に、貝塚時代にまでさかのぼるかなり早くから、船が入れるイノーの切れ目から水路を経て、海外との交易が海岸で行なわれたと推察される。アマミキヨと呼ばれるようなグループも、ヤブサチの浦原から入ってきて、ヤハラヅカサに上陸し濱川御嶽に泊り、ミントンにまで上っていったという伝承が広く伝えられている。

こうした海外交流・交易となると、外洋を走るためにある程度の大きさの船が必要で、イノーの切れ目から入ってくるにしても、相当程度の水深が必要だろう。そうして造られた港が、丘陵部に形成されていく大型グスク（知念、玉城、糸数、大里など）と結び、按司勢力の海外交流・交易活動で、重要な役目を果たす。また、糸数グスクは、雄樋川を上った船を通して交易活動をしたと伝えられる。

さらに、近世期には、漂着した外国船を一時的にとどめる役割を奥武島が果たした。また、久高男性が、王府の海外交流・交易で、船舶を動かすうえで重要な役目を果たしていたことは注目されていだろう。

漁業活動には長い歴史があるが、集落外との水産物の売買を伴うような漁業活動は、19世紀後半以降に本格化する。そのなかで、南城市内にも、漁港としての役割を果たす所が増えていく。この事については、集落と生産の個所で詳述しよう。

住民が神とつながるといふ面で見ると、ニライカナイ信仰、竜宮信仰などが重要な意味を持ち、そうした信仰の場所として、各地に拝所が設置されている。そして、信仰にまつわる伝承が数多く残っている。

海・海岸の軍事利用という面での検討も必要だろう。19世紀半ば、アメリカのペリー艦隊が沖縄に来た際に、新原一帯を調査していったのも、早い時期の例であろう。20世紀初めには、日本軍が軍事上、中城湾を注目し、佐敷に軍事施設を作ったのも、その例である。沖縄戦では、米軍は玉城・具志頭あたりに上陸すると見せかける陽動作戦を展開するとともに、陸上作戦の展開と並行して艦砲射撃がなされ、南城市域で多くの人々が命を失った。

海岸・海ということでは、この地域の景観の素晴らしさ、そしてマリンレジャー・マリンスポーツが、観光産業として光を浴びるのは、本格的には20世紀後半の事である。

2019年08月14日

自然条件 空の利用と軍事基地 南城論8

次に空に目を向けてみよう。晴れ・曇り・雨といった気象、太陽・月・星といった天体などは、この地に人間が生活し始める以前からの存在である。

ところが、飛行機をはじめとする空飛ぶものが発明されて以降、事情が大きく変化した。飛行機を広く活用したのは軍隊であった。沖縄をめぐっては、沖縄戦がその実戦の場となった。米軍が日本軍を質的にも量的にも圧倒した。日本軍も高射砲などで対抗したが、物量の差は圧倒的だった。南城市域でも、航空機による爆撃を始め、多大な犠牲を生み出した。

戦後の米軍基地建設の中心の一つは、飛行場建設を含む基地の建設と活用であった。一時期、南城市域での航空基地建設も計画準備されたようだ。また、ミサイル基地建設配備は、南城市域でも進められた。そしてそれは、日本の自衛隊に引き継がれている。

関連して述べると、戦後沖縄史は、基地建設と住民とのからみを一つの大きな焦点として進行してきたが、南城市域も例外ではなく、住民収容所・軍政府・民政府の設置、米軍基地建設などが、戦後史の重要な焦点になってきた。また、今なお、嘉手納基地在の米空軍の、沖縄南方海上の訓練区域への往復経路に、南城市域が入っている。

軍事向けだけでなく、那覇空港を離発着する民間航空機の経路は、南城市域上空に設定されており、相当数の航空機が上空を飛行している。また、ヘリコプターでいうと、米軍・自衛隊などの軍事用のもの、警察・海上保安庁のもの、報道機関などのものなど多岐にわたって、飛んでいる。

さらには、景観を楽しむマリンスポーツで使うハンググライダーやドローンなども、数多く飛翔している。また、星空や日の出を楽しむことでも、南城市のいくつかのスポットが注目されている。

別の個所で詳述することになるだろうが、森や丘なども、生活、さらには信仰と重なって重要な位置を占め続けてきた。ウタキやグスクは、その象徴的なものだろう。

2019年08月19日

自然災害と集落の立地 南城論9

大都市とは異なって、自然のなかにあるといえる南城市域は、自然災害への長年にわたる対処の歴史を持っている。地滑り、津波、台風、干ばつなどがそうである。

たとえば、津波古の西方山手のクーリ原（庫利原）一带は昔から山崩れや地すべりがあったといわれ、「今から二百年ほど前の大きな山崩れ」（佐敷町史編集委員会『佐敷町史 2 民俗』佐敷町役場1984年p544）に見舞われたとのことである。

また、新里の一部をなしていた桃原集落は、1959年の地滑りで住民は移動を余儀なくされた。同じ時、馬天御嶽も移動した。

こうした災害への対応体験が、歴史的に蓄積され、住民・集落の知恵となる。その知恵の蓄積が比較的少ないところでは、災害での被害が拡大してしまう。歴史が浅い所はそうなりやすい。

戦後の米軍建築、米軍提供資材による建物が、建築後1～2年で、台風で吹き飛ばされたものが多かったことがあったのも、その例だろう。かつて民政府・軍政府があったところでは、今でも住宅が少ないが、こうしたことがからんでいるのだろうか。知りたいことだ。

沖縄各地に広がっている近年の埋め立て地は、2011年の大災害をきっかけに、防災の取り組みが進められた。とはいえ、今後のための一層の防災の取り組みが求められている。

集落立地をわかりやすく書くなら、海岸近くか、丘の上か、中腹かといった点だ。南城市域でも、最近津波対策としての標高の標識があちこちに設置されている。歴史的に見ても、津波災害の経験から、低地から標高の高い所へ移住した例がある。宮古島や八重山の事例がよく知られているが、南城市域では、あまり聞かない。知りたいことのひとつだ。

それよりは、交易などとの関係で、船つけができる港がある海岸河岸があるかどうか重要であったかもしれない。そして、農業を営むうえで、畑や田がつくりやすいかどうかがある。グスク時代以前では、軍事的要素もあるだろう。

もう一つ大きいのは、生活のための水の便、つまりカーの有無である。カーをめぐるっては、時に水争いを生む。集落間だけでなく、志喜屋と米軍基地との水をめぐっての緊張のように、大きな対立をうむことがある。

近世においては、薩摩・王府が稲作を奨励（強制）したこともあって、田をつくることが重要で、そのために水利条件がよく田を作りやすいところへ集落を移動する例が多い。ただし、農地を広げるために、平坦地は農地にし、傾斜地に人が住むようにしたようだ。薩摩・王府の施策をもとに、シマ立て、シマ分けがすすめられた近世は、そうした集落移動や集落変化が多い時代だ。

そうした施策がなくなった後、平坦地へ住居移動させる集落がでてきた。そうした点にかかわって、佐敷町史は次のように指摘している。

「手登根、外間を除く在来の「ムラ」（中略）、すなわち津波古、小谷、新里、佐敷、屋比久はいずれも傾斜面に立地している（ただし、津波古は明治四十年代に平坦地に移動し、（中略）ヤードゥイは、どれも平坦地にある。そのうち兼久、冨祖崎、仲伊保は海に面し、伊原、桃原（新里）などは旧部落から離れた丘陵のふもとにあるのは、その地が開墾地であることをうかがわせる。）」佐敷町史編集委員会『佐敷町史 2 民俗』佐敷町役場1984年p7

2019年08月22日

集落の歴史 15世紀以前 16～19世紀 南城論10

ほぼ16世紀~19世紀の集落が、農業生産に力を入れて動いていたことは、かなりよくわかっている。だが、それ以前の15世紀まではどうなのかについては、分からない点が多い。10~11世紀ごろから、農業が始まったとされるが、それが集落の生産活動の中で、どのくらいの比重を占めていたのだろうか。それ以前の、海産物の採集を中心とする食糧確保の比重はどれくらいになったのだろうか。貝塚時代の後の食糧確保の問題である。自給自足的な栽培農業の展開、交易による食料確保との関係などは、よくわかっていないようだ。

そして、11~15世紀は、交易が盛んにおこなわれており、交易向けの物産の確保生産はどうなっていただろうか。食糧確保・交易に加えて、戦闘がおきやすい時代のなかで、集落はどうなっていただろうか。集落組織と、按司などの指導者ないしは支配者との関係はどうだろうか。

集落内部の分業はどうなっていたのだろうか。生産・交易・戦闘にかかわる組織はどうなっていたのだろうか。こうした集落のありようをめぐる調査研究は、記述できるほどには進んでいないのが実情というべきだろう。そして、集落内の秩序・信仰祭祀、血縁関係などにも不明なことは多い。

第二尚王朝による中央集権国家形成のなかで、集落への直接の統制整備が始まる15世紀末からは、少しずつわかるようになってきている。そのあたりは、先駆的研究者というべき仲松弥秀の研究成果に頼って検討を進めることが、まずはできよう。

16世紀には、各集落は農業生産に力を入れて動いていくようになった。そのありようは、19世紀末まで続く。それにかかわるキーワードを並べておこう。

地割制 土地の共有 租税としての米 集落で連帯して納税 共同体としての年中行事・祭祀 御嶽・殿 (神アサギ)
間切単位としての村 (シマ) 生産と生活の直結 自給自足 稲・雑穀・大豆・甘藷・甘蔗

この16~19世紀の約400年間の農業生産に力を入れた集落生活が、長い期間であったのか、短い期間であったのか。人々の意識のうえでは、19世紀以前、場合によっては20世紀前半以前はずっと、農業中心で集落が成り立ってきたという感覚だろう。

その前のグスク時代や貝塚時代における、集落イメージが不鮮明なので、比べようがないかもしれない。人の一生と比べれば、数倍から10倍に近い期間なので、考えにくいかもしれない。でも、考えてみたい問題である。

2019年08月27日

集落の歴史 20世紀の激変 南城論11

農業中心生産秩序に変化が生じ始めるのは、20世紀初頭である。それにかかわるキーワードを並べておこう。
商品金銭経済の浸透 移動の自由 土地の個人所有化・売買可能 土地に対応した納税 移民・徴兵・就学の一般化 断髪・ハジチの禁止 モアシビの禁止 青年団・婦人会の組織

沖縄戦とその後の復興は、シマからの住民追い出しから始まってシマの再建(基地化されたところでは、移動先での)までを、まとめて見るなら、ほんの1~2年で沖縄の集落と住民は、前代未聞の体験をしたといえよう。沖縄戦をめぐる調査研究は、大きな蓄積を作りつつあるが、集落追い出しと再建にかかわっては、まだまだ少ない。

農業生産を中心とする集落秩序からの20世紀初めに始まる変化は、沖縄戦を区切りに決定的変化となっていく。まずは、米軍統治との関係がある。米軍が立ち入り禁止にしたために、元の集落に入れずに、その近くに集落をつくった例がある。津波古がその典型例だろう。

現在のゴルフ場、かつてのCIA基地のあたりには、戦前の玉城、仲村渠、垣花などの集落の一部があったが、基地になり、復活することができずに、分散したり、あるいは近辺に新集落を作ったりした。親慶原などは、そうした歴史をもっている。

そして、勤め人になる体験、つまり軍作業が始まる。田畑を失い離農するか、自家消費のための栽培にとどめられる。農業を再開した人々も、その多くが、1960年代以降、離農していく。子どもたちも、中学高校卒業後、農業に携わるのではなく、進学就職する。シマを離れ、シマ外生活を始める。そのシマ外はほとんどが那覇などの都市である、あるいは県外の都市である。

そのなかで、集落内で生産したものを中心にして生活していくことの比率が急激に低下し、生産と生活が分離し、さらに集落内での生産といったものさえ見えなくなっていく。

この地域での集落生活は、都市生活からは距離があり、「田舎」生活と受け止められ、若者には、都市生活のあこがれが生まれてくる。田舎での貧弱な消費生活から抜け出ようとする気持ちがふくらんでいく。

こうして、集落生活も、商品・金銭への依存が増し、家業を継承するものとは見ず、「勤め人」になることが当たり前のようになり、集落にかかわるものの役割が低下していく。どの集落にもみられた年中行事・祭祀も縮小し、青年会や婦人会も、徐々に活動力を低下させはじめる。

2019年09月01日

集落の歴史 20世紀後半以降の長期にわたって継続する激変 時期区分 南城論12

こうして、1960年前後から始まる集落生活の激変状況は、2020年代に入ろうとする今なお続いている。1960年前後と書いたが、それ以前の集落から追い出され、軍作業などの「勤め人」を続けてきた人によっては、戦後復興時期から引き続いている激変だ。だから、60~70年にも及ぶほどの長期の継続的变化は、沖縄史、というよりも人類史上かつてなかったことかもしれない。

集落のなかには、農業中心でやっていた時期がいつまでだったかが鍵になる。離農して「勤め」に出る大人が増加するなかで、それまでの農業中心の集落運営が難しくなる時期がいつごろからか、ということでもある。集落ごとの差異は大きい。早い所では、戦争直後からであり、ゆっくりした所では1980年代にはっきりしてくる。農業用の土地改良がすすむ1980年代と同じだとは歴史の皮肉と言えるかもしれない。

さて、歴史における時期区分をどうするか。これまでは政治上の区分にあわせて、集落での時代区分にしてきた。首里王朝の成立、第二尚王朝開始、薩摩の沖縄支配、明治国家による統治の開始、沖縄戦と米軍支配、日本「復帰」という具合である。

それらが、集落生活に強い影響を与えたことは確かである。だが、集落生活レベルでの変化は、政治変化とは一致しない。無論、政治変化が、集落変化を強いたり、変化の引き金になったりすることはある。国家や自治体など政治変化

と、集落における生活の変化とは、次元が異なるから当然のことだろう。

ここで、私なりの集落生活の時代区分の仮説を紹介しておこう。

A 15世紀後半~16世紀初め 「古村」の確立

マキ・フダ・シマ・ムラなどと呼ばれる集落が、中央集権的性格を帯びた首里王府体制下で「整備」されていく。

※ 現在の南城市には、行政単位としての集落は71あるが、それらには18~19世紀にスタートした「屋取村」、1970年代以降スタートした「新興団地」が含まれている。これらを除いて、18世紀初頭までにすでに存在していた集落を「古村」と呼ぶことにしよう。その「古村」には、Aの時期に整備されたものが多いだろう。

2019年09月05日

集落の歴史 時期区分の続き 南城論13

B 18世紀初め~半ば 蔡温治政とからむが、「古村」の再編が進む。「屋取村」の形成は、早い所では、この時期から始まる。

C 20世紀初頭 近代国家による行政体系と資本主義原理にもとづく集落統治・運営がスタートする。土地整理後の大変化である。「屋取村」の多くが、「古村」と並んで、行政単位として認知されていく。

D 1944~1948年ごろ 戦争体制が集落を覆う。戦争が始まると、住民たちは集落(シマ)から追い出される。戦後になると、収容所生活等を経て、南城市域では、生き残った住民のなかの多くは、元の集落に戻り、集落の復興再建に取り組む。

集落からの追い出しと、住民自身による集落再建という歴史的体験が、数年の間に行われたのである。

E 1960年代以降~現在 激変の継続的進行 このなかに区切りの時期を設定する必要もあろうが、ここでは大きくまとめて、この時期の特質を指摘しておこう。

「生活の近代化・合理化」を掲げる「新生活運動」が進み、生活を便利にしていく。それは、生活場面での商品化の進行であり、大量生産大量消費が進行する。

それ以前までは、住民が共同体として「一体化」していたが、徐々に、共同体による「拘束」から離れ、多様な関係・組織の中で生活するようになる。会社勤めが典型である。それに限らず、生活の全般にわたって、任意の関係、任意の組織の中で、動く比率がたかまっていくなかで、「集落離れ」が進行する。

そして、新たなつながりをつくり、任意の人々が集まって組織をつくるという社会秩序が進展する。そのなかで、都市地域では、集落は人々の生活から消えゆく存在だとさえ見る人々が増えていく。しかし、南城市域では、なお集落が生き続けている。といっても、集落組織に参加しない世帯、かつては全員参加であった婦人会・青年会・老人会への加入率が下がり、休業状態に陥る所も増える。

と同時に、任意参加的性格を含みつつも住民全員を対象とする組織、そして集落をつくることに挑む動きも広がっている。新興住宅地がそうであるし、他の集落にあっても、そうした動きが見られる。

もう一つ注目すべきは、Dの時期までの集落イメージとは異なる新興団地の登場である。とくに高層賃貸集合住宅は、

これまでの集落という用語とは異なる用語が必要になる存在である。

さらに、近年では、高齢者施設の住民を、集落との関係で、どう位置付けるかという問題も出てきている。さらには、公的施設の大規模宿舎の住民、また基地内に住む人々など、いままでにない検討が必要な例もある。

2019年09月10日

集落の歴史 食の自給 人口規模 南城論14

これらのなかで、分析評価がもっとも難しいのは、Eの時期、つまり1960年代から60~70年間続いてきた時期である。できることなら、その途中で時期区分をした方がいいのだが、いつどのように区切るかという難問が存在している。

そこで、A~E全体を通して、時期区分するうえでここまで述べてきたこと以外の視点を提示してみよう。

まず衣食住、とくに食の視点である。まず自給率がある。限りなく100%に近い時期、つまり自給自足の時期として、ABの時期がある。統治者や外部に税などの形で、生産物を供給していた時期でもある。

100%から低下していく時期として、CDがある。

その後は劇的なほどの変化、つまり0%に近づく時期への変化が見られる。自給ではなく、外部から移入されたものを金銭による商品購入で賄う時期になる。Eの時期がそうである。

もう一つの視点として、集落規模がある。A~Dという長い間、100~500人規模に収まっていた。100人以下の場合は、どこか近くの集落の一部に見なされていたが、100人を超すと、独立する例が、CDの時期に見られる。だが、DEの時期には、1000人を超す集落が、いくつも出てくる。なかには、津波古のように3000人規模となり、集落イメージを飛び越してしまっている。

集落イメージとしては、大半の住民が、「ワッターシマ」という気持ちをもっているかどうか、があるが、1000人を超すと、そういう集落感覚を持たない人が増える。そして、自治会費を払わない世帯が増加する。那覇など都市地区では、納入世帯が50%を下回る所が出てくる。

逆に、数十人以下となり、集落を維持できなくなり、さらには無人の集落となる例がでてくる。1960年代の底川がそうである。

現在の南城市集落は、人口で見ると、百数十名から3000名と、大きな幅がある。

2019年09月15日

集落の歴史 土農分離 南城論15

Aの時期以前の集落では、日々の生活での作業遂行・食糧確保生産・交易・戦闘などの諸機能は、それほど分離していず、同一人がいろいろな役割を果たしていたと想像される。集落規模もそれほど大きくはなく、集落リーダーが抜き

んでた統治支配機能を果たす例は多くないだろう。

それが、統一国家形成のなかで、統治勢力とそうでない人々との役割分担、支配者と非支配者との分離が進行するなかで、集落の中でも、役割分担が進行していっただろう。そのことを端的に表現すれば、土農分離の進行である。

その象徴的出来事としては、15世紀末に行われた按司の首里移住であり、集落には、按司代理としての掟が置かれた。南城市内でも、大型グスクの後継者が、引き続き近くに住んでいると限らないことがそれを示している。

そして、薩摩藩—首里王府の政策として、平民の首里那覇への移住が禁止され、土族のみに限って家譜が作成され、家譜をもたないものは、農民扱いであることがはっきりさせられる。こうして、18世紀初めには、現在の南城市域にある集落には、身分としての土族は制度的には居住していない状態に至る。

だから居住者は、ほぼ全員が農民ということになる。例外は、鍛冶職人である。他には、ノロなどの神職があるが、かれらも日常は農業に従事していることが多い。また、久高のように、王府の大型船の船頭を務めるものがいたぐらいだろう。そして、村役人（地方役人 デカタヤクニンと呼ぶ）も、農業生産に従事しながら、農業生産の監督を務めていた。

こうしたなかで、かつて北山の有力者であったものの子孫であるとされる津波古の人々、あるいは、富里・當山に住む第一尚氏系とされる人々、ほかにも既存の地域有力者がいたことだろう。これらの人々は、土族としてではなく農民と扱われるなかで、どう対応していったのだろうか。

18世紀になると、土地を開墾して、自分の農地として、大規模な農業生産をした富農層が生まれてくる。船越の低湿地を田畑にした家が有名となる。王府の財政逼迫のなかで、金銭支払いで土族になれるシステムがあり、それで土族になった人もいるだろう。対照的に、借金を抱え、返済のために富農宅に住み込みで働くイリチリーと呼ばれる人も出てくる。

そしてまた、首里那覇の土族のなかに、生活のために田舎下りして、屋取集落を形成する例が広がっていく。1897年資料によると、知念では土族比率が40.5%とすごく高い比率を占める。なぜそれほど高いのか、このあたりの事情はよくわからない。ご存じのかたがおられれば、教えていただきたい。

この土族と平民との違いと、両者の分離ないしは交流が、19世紀後半から20世紀前半の集落にとって大きな意味をもつようだ。

2019年09月23日

新興団地誕生の意味 南城論16

1970年代以降、嶺井団地、大里グリーンタウン、新開団地、百名団地など、続々と新興団地が誕生していく。それまでの集落とはまるで異なるものの登場である。19世紀における屋取村の誕生も、それまでの「古村」とは異なるありようであったが、それでも農業を中心にしていたので、「古村」と共通性を広く持っていた。しかし、農業者がほとんどいない新興団地は、まるで異なるありようである。

まず、住民間をつなぐものが薄く、団地に住むことでスタートした新しいつながりである。百名団地のように、旧玉城村在住者が入居資格を持つという場合もあるが、大里グリーンタウンのように、たまたま同じ地域の分譲地を購入したというつながりだけである。団地外の多様な地域出身者で構成された「見ず知らず」の人が大半を占めた。

そして、それまでの集落のように農業を中心とする点での共通性があるわけではなく、勤め先も多様な通勤者が中心

の集落であった。

こうして、それまでの集落とはかなり様相が異なるものが続々と誕生してきた。そのなかで、住民たちは、自主的に集落を作り上げていく営みを蓄積し、早期から自治会を立ち上げていくところが多い。

それらは、一軒一軒の世帯を単位にして、集落自治を作り上げていく。古村の場合も、家の集合として集落があるという面があるとしても、逆に、集落があって、その単位として家が生まれるという面が強かった。そうしたありようだから、集落内同士の結婚が1960年代までの大半を占め、親戚関係を結ばれていた集落住民も多かった。そして、子どもたちも、「家の子ども」であると同時に「シマの子ども」であった。

そういう古村の場合も、近年では家の集合としての集落という側面が濃くなってきている。そして、集落内に増加しているアパート・マンション住民のなかに、集落活動に参加しない住民が増加するなかで、どのように対応すべきか、模索を展開している。

30年ぐらい前までは、「古村」をモデルにして、新興団地も自治会づくりを展開したことがあったが、近年では、新興住宅の取り組みを参照しながら、自治会運営を模索する「古村」もでてきているようだ。

また、実家とは異なる地域のアパート・マンションに住みながら、自治会活動は実家のある集落に参加するといった二重の対応をする例も見られる。

集落のありかたが大きく変わり、模索試行の時代に入ってきたのだ。

2019年09月30日

集落の性格変化 南城論17

ある集落に住めば、その集落の組織に加入し、活動に参加するのは、自然であり当然であるという感覚が、沖縄では1970年代頃まではあった。というより、出生前から、集落メンバーであることが運命宿命であり、そうでないことはありえなかった。あるとしたら異常事態だというほどであった。

そして、集落に属することで、多面で益を受けてきた。人生が、まるごと一生にわたって集落と一体化していた。それは宿命型組織であり、全員加入型組織であった。

そこから、抜け出ることが始まったのは、20世紀はじめである。徴兵・移民・出稼ぎ・進学などがあったが、その多くが一時的なもので、出身集落とはなお固く結びついていた。そして、人数でいうと、それほど多くはなかった。

だが、戦後広がる勤め人生活、1960年代から広がる若者の進学・就職、そして、他集落の人と結婚して集落を出る女性たちが大量に出現してくる。1960年代以降の人口移動の激しさがそれを物語っている。成人し始めたベビーブーム世代にとっては、集落から出ていくことが一般的なものとなる。いずれ戻る(Uターン)にしても、いったんは出るというわけである。現在の70歳前後の方々である。

そのなかで、集落は全員加入型というわけにはいなくなる。新興団地だけでなく、「古村」でも、そうした事態が現れる。集落活動も、「昔からやっているものを、やる」ということでは、集まりが減り、諸行事の縮小が余儀なくされる。

逆にやりたいものがやりたいことをやる、という要素が高まる。そうした活動の魅力を高め、集落活動への参加を増やすという流れに転換していかざるを得なくなる。それらの活動が、同じ地域に生活しているという共通性を有利な基盤として展開していく形が広がっていく。

そこに、新しい集落の在り方の基盤があり、それは慣習的なものというよりも、創造するものとしての性格を強めていく。そうしたことの追求・創造の先頭を切ったのは新興団地であった。そして「古村」でも「シマ起こし」という形で新たな創造が広がりつつある。

2019年10月09日

縁・つながりの基盤 南城論18

集落は、いろいろな縁を生かして、つながりを創りながら活発な活動を展開していく時代へと移りつつある。人々のつながりのきっかけには、いろいろとある。縁という言葉を使って並べてみよう。

★ 地縁 同じ地域で生育・生活・活動をするという、地の縁。 集落はなんといっても、これがスタートとなる。だが、それだけでは済まなくなっているのである。

★ 血縁 親子・兄弟から始まって、血のつながりでできる縁。 結婚は、それに含まれるのだろうか。集落内同士のカップルが多かった50年前までは、地縁であるとともに、濃淡は別にして、何らかの血縁がある場合が多かった。それ以降は、地縁のみならず血縁のない人との結婚が広がり、一般化していく。それは、無理をしていうと、出会い縁のようなものである。出会いの縁・きっかけは、地縁血縁から以下に示すものへと変化していく。

多様な組織でできた縁を組織縁と呼ぶことにしよう。組織にも、国家・自治体などの制度によってつくられたものと、人々が自主的に作るものがあり、両者が入り混じっているのが今日の特徴だ。

まず制度縁。今日の日本で代表的なものには、学校縁がある。以前なら軍隊縁があった。全員加入で、加入が義務付けられていたかつての青年会・婦人会もそうした色彩が強いし、地縁的な色彩も見られる。

★学校縁 学校では在学中の学級などの活動単位で生まれる縁だけでなく、卒業後の同窓会・同級会もある。

★会社縁（社縁ともいう） 自主的につくるものの代表的なものとして、数が多いのは、会社である。会社縁・社縁ともいう。農業協同組合などの仕事組織にも、こうした色彩を帯びていることがある。

経営者にとっては自主的かもしれないが、一般社員の場合は、そうとはいえない。そうとはいえないのに、自主的な顔をした活動が要請されることが多いので、ややこしい。会社につくられる労働組合の場合はどうだろうか。〇〇課といった職場組織の同僚でつくる縁もある。

★NPO縁 ボランティア縁 スポーツ・趣味縁 今では、人々は多様な任意組織にかかわっている。はっきりした規則がなくても、会費を定期的に納めて活動に加われば、自主的な任意組織への参加ということだろう。

★出会い縁 行事イベントで出会った人。SNSで「友だち」になった人。「旅は道連れ」で友達になった人。婚活で出会った人。営業で出会った人。保護者会・PTA・子どもの送迎でつながりができた人。「ママ友」が代表的だ。今では実に多様であり、そんな機会が多い。

★友情縁 知人縁 以上のような多様な出会いの中で、特別に友情を温める人とは、言葉通りの「友だち」になり、「親友」になる。そこまでいかなくて、「知人」「旧知の仲」の人も多い。

もう一つ。お店での売買を通したつながり。かつては、それが縁になっていった。しかし、今では縁になることはまれだ。相手の名前さえわからないままだ。むしろ、縁を作らないで、売買できる「便利さ」「わずらわしくないこと」が

好まれる。

それが、縁をつくりやすい個人商店・共同売店と、つくらないスーパーとコンビニとの違いだ。南城市域でも、風前の灯になっている個人商店・共同売店は多い。再び灯が明るくなり、縁を広げる時代はやってくるのだろうか。

2019年10月20日

縁・つながりを豊かにする集落 南城論19

前回述べた縁を、一人の人があわせもっているのが今日ではごくフツウのことになっている。つながりの多様な人が、今日では有利に働くことが多い。

社会増が多くなった近年では、集落内でも初対面の人が増えてきている。南城市でも、自然増減以上に社会増減が目されるようになってきた。その点では、新たな集落住民になった人達がどうするのか、その人たちに旧来の住民たちがどうかかわるのだろうか。

南城市には、自然と歴史の魅力で訪問する人が多いが、それだけでなく、住環境、子育て環境などの暮らしやすさに魅力を感じている人もいるだろう。もしかすると、新たな出会いが期待できそうな人がいるということで、移住してくる人もいるかもしれない。体験民泊など、観光訪問をきっかけに移住してくる人も多い。

那覇などに通勤し、夜は南城市にあるアパート・マンションに帰る人が多くいる。自然の豊かさ・価格の安さ・通勤可能な距離などがきっかけのことが多い。最初のうちは、もともとの集落住民とのつながりは薄い。縁が薄いからだ。だが、地域生活に馴染み、行事イベントなどに関わる中で、縁が出来てくる人が多くなる。とくに子どもが出来ると、縁が劇的に広がる。子ども相互の縁だけでなく、子どもをきっかけに大人相互の縁が広がる。そうしたことを促進するような集落をつくりたいものだ。

近年では、行事イベントも、見るだけではなく参加型が多く、その機会に縁を作りやすくなっている。イベントで行なわれるワークショップ型活動は、その典型である。イベントだけでなく、日常的に人がたまる場が重要だ。お茶を飲み、おしゃべりをする場だ。若い世代にはカフェが好まれる。観光客向けのカフェは多いが、地元住民向けのカフェは作れないものだろうか。公民館カフェが一番手っ取り早い。週一回でいい。昼の部と夜の部があれば、なおいい。夜のおしゃべりが好きな人もいれば、昼のおしゃべりが好きな人がいるからだ。今はないが、しばらく前まであった半島芸術祭 in 南城の会場となった多くの工房での出会いには、そんなことが沢山あった。

2019年10月28日

最近の大変化を時期区分する Fの時期の設定 南城論20

13回目に述べたEの時期の設定は、「1960年代以後」としてきた。ではその次の区切りはいつだろうか。もう、それ以後60年も経過する。区切る必要がある。時間経過からいうと、二つに区切るか三つに区切るか、それほどの期間である。そして、その期間に集落のありようは激変した。構造的変容といってもよいだろう。だからなおさら、区切

る必要がある。

その構造的変容のなかでFの時期の指標になりそうなものを、ややアトランダムに並べて考えてみよう。

A 仕事 生産

- 1) 勤め人が圧倒的比率になる。
- 2) 農業人口が激減する。
- 3) 畑地の土地改良がほぼ終了した。農業用施設の改善の力点がビニールハウスなどの整備に移っていく。
- 4) 道路・下水道など公共工事のラッシュに区切りが見え始める。
- 5) 観光産業従事者の激増に代表される第三次産業の増大という産業構造の激変
- 6) 観光客の激増 2000年齊場御嶽の世界遺産登録
観光者の交通手段の変化 バス→観光タクシー→レンタカーへの変化

B 人口移動

- 7) 那覇などの都市から南城市域への移住の増大。
- 8) Uターン・Iターンの増加
- 9) 人口増の集落と人口維持の集落の二分化傾向
- 10) 子どもの減少と対照的な高齢者の増大。少子高齢時代の到来。高齢者施設で生活する高齢者の増加。
- 11) 子育て世代の移住が、保育所・学童保育の急膨張を生み出す。待機児童問題の発生。
以降は、次回

2019年11月04日

(続) 最近の大変化 Fの時期の設定 南城論21

C 集落変動

- 12) 新興団地の増加。集落全体のなかでの比重増大
- 13) アパート・マンションが多く建設され、そこに住む住民数の増大。かなりの住民が集落活動に参加しない状況が生まれる。
- 14) 公民館整備の区切り。各字の公民館のほぼすべてが、1980年代までに整備された。喜良原と新里の体育館付き公民館が、立派さの象徴といえるかもしれない。
- 15) 字誌・公民館建築記念誌発刊の字の続出。変容の激しさのために、集落の「かつての姿」を記録に残そうという機運が高まる。
- 16) 集落行事・祭祀への参加者の減少 行事・祭祀の継承の困難の表面化
- 17) 青年会・女性会(婦人会)・老人会など地縁組織への参加者減少。組織弱体化のなかで、活動休止状態の集落も見かけられはじめる。
- 18) 全員義務参加の集落活動から、希望者任意参加の活動への変化の進行
- 19) 集落内外のサークル的活動の広がり

D 生活

- 2 0) 自給自足比率の低下。ゼロになる世帯がほとんどになる。
- 2 1) 商品金銭依存生活の高まり。
- 2 2) 買い物先が個人商店からスーパー・コンビニへと移る。「買い物難民」の登場
- 2 3) 市域外での消費の増加。そのなかで「地産地消」が主張され始める。
- 2 4) 電化生活の「完成」状態
- 2 5) 自動車依存生活。公共交通機関利用者の減少。
- 2 6) 学校中心生活の徹底化。家庭教育が学校を支えるものになっていく
- 2 7) 学習塾・おけいこ塾・地域スポーツクラブの広がり
- 2 8) 医療における西洋医学一辺倒傾向の強まり
- 2 9) 長寿と長寿ブレーキの表面化 メタボ現象
- 3 0) 格差・貧困問題の表面化

こうした構造的変容が明瞭に見えてくる1990年代を、Fの開始時期と設定するのではどうだろうか。このあたりについてのご意見をいただけたら嬉しい。

2019年11月14日

Fの次の時期区分 南城論22

では、前回記事で書いたように、1990年代と設定したFの時期の次の時期となるGの時期はいつから始まるのだろうか。2020年代ということになるのだろうか。それとも、2010年代後半の現在なのだろうか。いずれにしても、そこに向けての新しい動向はすでに始まっている。その芽生えめいたものを並べておこう。

- 1) 南城市誕生（旧町村の消滅） 2006年
- 2) 新たな集落づくりへ。町おこしとしての集落起こし
- 3) 観光業を軸に産業構造の変化
- 4) 多様なイベント・取り組みの展開。半島芸術祭 in 南城。オープンガーデン。南城祭。
- 5) 新市役所。新交通網
- 6) 格差・貧困問題の一層の進行と社会問題化
- 7) 保育所・学童保育・高齢者福祉施設などの必要の増大と増設整備の進行。
- 8) 移住やUターンなどによる社会増人口の一層の増大。それへの対処。
- 9) 財政予算確保の厳しさの到来
- 1 0) 縮小経済時代 不安定な景気変動
- 1 1) 少子高齢化の一層の進行

これらの変化を、従来の変化の延長線上でとらえる傾向は強い。しかし、延長線上をはずれた構造的変化として登場

するかもしれない。そのあたりの不明瞭さ、予測不能さが、人々の不安を増大させている。たとえば、仕事の不安、年金の不安が、若い世代に一般化している。そのため、将来構想が描けないという感覚が広がっている。

こうした変動に対して、個人だけでなく、各集落はいかに対応していくのだろうか。

2019年11月23日

Dの時期（戦中・戦後）の意味 南城論23（最終回）

Dの時期は、戦中、戦争直後であるが、戦争体験として多くが語られるようになった。しかし、「集落体験」、とくに集落の移動・一時的消滅、そして集落を守り再建する動きとして、どうとらえるか、意外と語られ論じられることが少ない。戦争の極限状態のなかで、人々の命を守りつつ、集落を守り、再建してきた意味を探り確認していく必要がある。たとえば、次のようなことを考えていきたい。

- 1) 命を守り、食糧を確保し、壕などの「住居」を確保するなどのぎりぎりの活動を、多くの場合、集落単位でしてきたことが示すこと。
- 2) 子ども・高齢者・女性など弱者を、集落で守ることが多かったが、そうした安全と福祉が結びついた活動の意味
- 3) 日本軍による管理統制、米軍による管理統制のなかで、それへの従属・逃避・異議申し立て、そこから生じる対立抗争、さらには、集落内部における対立抗争と調整
- 4) 上からの支援も統制も弱い中で、自主的再建をしてきたことの意味
- 5) これまでの枠組み・慣習にこだわってはいやっていたいなかで、創造的な活動をしてきた。そのなかで、タテ型秩序の弱まり、若年層が奮闘せざるを得なかったことの意味。
- 6) 戦前の枠組み・慣習の継承と断絶
- 7) 命と生活を守ることを基礎にした活動の展開
- 8) 農地を失い離農せざるをえないなかで、仕事を発見創造し、職業移動してきた事の意味

考えたい問題ながら、掘り下げが弱い分野である。今後のさらなる掘り下げに期待したい。

2020年04月01日

南城市史「民俗」編の私の担当原稿の完了

原稿執筆に入って、ほぼ1年間。ようやく完成。21万字を超えてしまった。他の仕事を押しつけて集中した。こうした集中は2～3年前の「魅せる沖縄」執筆以来だ。

南城市の71の集落を総覧しつつ書いた。市史編集室にある字誌や公民館建設記念誌、そして他の20人の調査員による膨大な聞き取り記録をベースにした仕事だ。膨大な記録を生かすために、字数が大量になってしまった。加えて中味の濃い話が面白すぎるのだ。この300年、とくに100年の間に、ドラマティックに変化した集落を多様な分野でとらえようとしたからでもあった。

この後、出版に向けての、担当者による膨大な作業が一年間行われる。活字化されるのは、2022年初めとなろう。

内容の主な点を紹介しておこう。

- 集落史研究 住民が作る南城／集落、行政が作る南城／集落 自然と集落 集落史の時期区分
- 古村確立期までの集落 古村再編期・屋取村開始期 近代村移行期 沖縄戦期 変貌期 新興団地の形成 脱皮模索期
- 集落の分類 住宅配置 集落立地 集落内の住宅間つながり 集落統治と異議申し立て 集落間連携・交流と対立 集落アイデンティティ
- 近代移行期スタート前後 移民・出稼ぎ 沖縄戦期の激しい人口変動 通婚圏の拡大 変貌期における集落外就職増大による人口停滞 各地から集落に移住してくる新しい住民
- 農業戦前 農業戦後 漁業 海運 集落における第二次第三次産業の職業 変貌期・脱皮模索期の激動
- 戦前の生活 戦後の生活 生活向上 交通・通信 医療・衛生・生活支援
- 戦前期の子ども 保育園・幼稚園・学校 学事奨励会・PTA・子ども会
- 集落の自治組織と集落運営 歴史 区長・役員、加入・区費、班・組 公民館 課題への対処、活動の多彩化
- 年齢別組織 集落の人口構成の変化と年齢別組織 婦人会（女性会） 青年組織 高齢者組織 集落の変貌と脱皮模索のなかでの多様な組織
- 集落の諸活動 年間行事 祭祀・年中行事 人生儀礼 葬儀 墓 芸能 娯楽 スポーツ 運動会 災害対応・秩序維持

2020年11月15日

拙稿「南城市の民俗総論（タイトル未定）」校正に3年！？かかるので、発刊を無期延期したい！？

この半月余り、私の心はボトム状態が続く。母の死。猫の30時間行方不明と搜索。この二つに加えて、大きいのは、「南城市の民俗総論（タイトル未定）」をめぐる驚くべき対応だ。

これらが積み重なって、思いが重なり夜も目覚めることが多い。自分でも、ボトムの底が抜けないかと心配になる。

2015年に始まった南城市史は、2022年3月発刊をめざして、最後の詰めの時期になった。当初予定の全70集落余りを書く予定が、結果的に8～10（うち4つが拙稿）となる。余りに少ない。そこで、数百名の市民からの聞き取りを生かすためにも、全体を見渡す総論を私が執筆することになった。そして、2019年から2020年にかけて、全力で執筆をした。聞き取り記録全部に目を通すだけでなく、これまで発刊された字誌記念誌など30冊近くにも目とおし、それらを可能な限り生かす形で執筆した。だから、これからの南城の集落の将来を見据えつつ、これまでの各集落の多くの面について描くものとなった。

当初の原稿は30万字に及ぶもので、分厚くしても一冊には収まらない分量なので、縮小に縮小をかさねた。その過程でできた原稿は、その都度発刊事務局に送り、調整をはかったが、ほとんど無回答だった。そして、3月末に完成した。その時に、一括交付金による原稿料が送付された。それは、これまでの流れのなかでは、原稿完成掲載を意味する

ものだった。

そして、事務局による校正作業に移ったが、11月初めまでの7ヶ月余りは「なしのつぶて」だった。11月初めに担当者来訪の際に、担当者が私的事情と他の業務（市史の後から出てきた業務）で、校正作業はほとんどできなかつたと語られた。その直後に、事務局名義での「お知らせ」文書が届いたが、私が書いた総論は後に回す（事実上の無期延期）と書いてある。

私は直ちに返信した。計画の変更は委員会（委員長浅野誠）で審議決定するもので、委員会を経由せず、しかも事務局の判断とするものではないため、それは無効であり、撤回するよう求めた。その後、いくつものやりとりがあつて（というよりも、ほとんどが私からのメール）、再び話し合いとなり、担当係長課長も含めたものだった。

驚いたことに、校正の遅れの理由が前回と全く変わった。担当者が自らたてた校正方針で、校正すると3年かかるので、発刊がそれ以後になるというのだ。役所職員というものは、ほぼ3年単位で変わる。すでに職務について何年も経過しているので、そのころも担当である可能性はほぼない。事実上の無期延期の宣言である。私自身が健在である保障もない。そして何よりも、聞き取りに応じてくださった数百人の方々をはじめ市民への責任をどのように果たすのだろうか。

と同時に、担当者が示した校正例は、委員会でも審議決定した既定の方針を大きく逸脱するものだった。いくつかの事例が示されたが、文章がおかしいという事例について、どこがなぜおかしいかについて返答ができなかつた。この方針でやれば、3年かかるだろうと思う。しかし、通例の校正で行けば、長くて半年だろう。

ということで、いつも「穏やかな」私が、何年振りか、10数年ぶりかに大声を出してしまった。これが、私の心のボトム「底抜け」の危険を感じさせるものとなった。

先の「お知らせ」の撤回を含めて、今後の段取りについての善処を課長係長がお約束していただいて、その場は終わった。

既定方針の2021年3月校正完了まで、4か月余りに迫った今、既定の方針に従った校正作業を私自身が再開することにした。担当部署の体制の準備ができるのを待つ時間的余裕はないので、異例のことだが、私自身が校正に着手し、2校3校の過程で担当部署とのやりとりで校正を進めることにした。今は、早期の対応を待ちながら、私の作業を始めた。

事態が順調に進展して、私の心が「底抜け」しないで、ボトムを脱け出したいと思う。とはいえ、私の内側からではなく外側から降ってきたことなので、関係者の善処をお願いするしかない。

2022年03月20日

南城市史「南城の民俗」「大里のちてーばなし」発刊

先月末に完成した。今は関係先への配布にとどまっているが、いずれ一般販売もされるだろう。

「民俗編」の特徴は、集落の歴史を、300名余りの市民からの聞き取りをもとに描いたことにある。論文というよりも、聞き取りを編集して、集落の動きをできるだけリアルに描こうとしたのだ。総論編は私が執筆したが、71の集落は、個性があると同時に、歴史の中で大きな変動を潜り抜けてきたものだ。20世紀入る頃の土地整理、市場化の浸透・移民出稼ぎ、沖縄戦、戦後復興、産業基盤の激変のなかで、住民の暮らしが激変し、集落も激変する。そのなかで、集落の多様化もすすむが、「集落消滅」とさえ言われるこのごろにあって、それに抗するかのように、各集落で取り組んでいる集落おこし（シマ起こし）の姿を、住民たちが語り継ぐ。

お陰様で、この作業を通して、私は南城集落「つう」になってしまったのだが、今後、各集落で、集落の過去・現在だけでなく、未来についても語り合えることを希望している。

当初は全集落の歴史を書き綴る予定であった集落編は8集落（うち4つを私が担当）にとどまってしまった。こうした企画は、沖縄市町村では初めてのようで、難渋を極めたためだ。今後、他集落についての作業が進行することを期待したい。

「大里のちてーばなし」は、出来上がっていた原稿が出版にまでたどり着けないまま30余年にわたって眠っていたのを、刊行にまでたどりつけたものだ。

多くの方がお読みになり、感想・コメントなどをお寄せになることを期待する。



2022年04月19日

『南城市の民俗』の発刊

『南城市の民俗』が発刊された。ここ100年余りの南城市の集落について、これまで発刊された字誌・記念誌に収録されたものを含めて、「市民の語り」にもとに制作されたものである。20名余りの専門委員が、300名を越す各集落の住民からの聞き取りを行った。戦後についての語りが多いが、戦前についての語りも含まれている。その専門委員

会の委員長を務めた私自身も、担当する4つの集落について数十人からの聞き取りをした。そして、他の委員が行った聞き取りのすべてに眼を通した。あわせて、平行して進められた沖縄戦にかかわる市史の調査の際に行われた聞き取り記録にも目を通した。

出版にいたるまでの諸過程、調査執筆を担う専門委員の選定依頼、全体の枠組みの設定、聞き取り調査の段取り、聞き取り対象者の最初の設定と依頼などは、主として市役所の教育委員会文化課市史編纂係がすすめた。予算は、主としていわゆる一括交付金からのもので、その枠組みがあったので、それに合わせるための苦労も大きかったようだ。そして正規の職員だけでなく、非正規職員（後に会計年度職員という素人にはわかりにくいネーミングになる）としての多くの嘱託・非常勤職員の活躍があった。かれらのなかには、民俗学歴史学など大学大学院で学んだ若い職員が含まれ、彼らの知恵と熱意が作業過程を支えた。正規職員は、配置換えで入れ替わることもあり、「何代」にもわたる引継ぎがあった。

就任した専門委員も、多様な分野やキャリアをもつ方々だった。いわゆる民俗学プロパーの人は少なく、南城市内外で、地域に結び付いて多様な活動を行ってきた方々が多い。加えて大学に在籍する研究者も若干おられた。そうした多彩なスタッフ・専門委員に支えられて作業を始めた調査活動は、多くの困難に直面したが、関係者の奮闘努力によって、7年間近くの作業の結果として、出版までこぎつけたのだ。

※ 私自身も民俗学については素人であり、教育史研究者としてかわりを持ってきた。とはいえ、拙著『沖縄県の教育史』（思文閣1991年）は、人々の生活レベルに焦点をあてて教育・子育てを論及しているのだから、民俗研究と遠距離にあるわけではなかった。

そして、何よりも特徴的なことは、対象を〈集落〉に焦点化して調査執筆したことにある。さらに意気込んで、71の全集落を個別に記述する計画をもったことにある。それは市町村史としては、前例の少ない、ないしは存在しないことである。まさにチャレンジングなことであった。

また、民俗学から学ぶことが多いとはいえ、それ以外の諸分野から学びつつすすめることにした。むしろ、それ以外の分野からアプローチすることが多かったといえるかもしれない。

こうした壮大な構想を持ってスタートしたために、作業の道のりは、難題をきりひらく様相を呈して、最終的には71集落のうち8集落の記述にとどまった。聞き取りだけにとどまった集落については、私が執筆した「総論」編で生かすこととなった。いつの日か、残り63集落の記述ができあがることを期待したい。なお私が執筆を担当したのは、次の個所である。

第一章 総論 「市民の語りで描く南城の多彩な集落（シマ）の歴史」（230ページ）

第二章 各論 系数（10ページ） 喜良原（12ページ） 中山（14ページ） 百名団地（12ページ）

2021年02月27日

南城論成立の基盤 行政上の南城市成立からスタートして 南城論へ1

新しいテーマの連載に移る。私は、南城についてこれまでいろいろと書いてきた。そこで、書いてきたことをもとに改めて「南城論」として展開することを可能にするにはどんなが必要になるか、を考えていきたい。それは当然のことながら、南城論が無条件に成立するとは見ないで、成立しうるかどうか、という議論も含むことになるだろう。

連載は、15世紀以前の古い時期のことから始めよう。

南城市は、2006年1月1日にスタートした。2021年1月には15年経つことになる。とても若い自治体なので、現時点で、「南城論」が成立するのか、成立するとしたらどういう点で成立するのだろうか、という問いから始めることになる。

そして、南城をひとまとまりにして叙述対象、研究対象にすることができるのか、できるとすれば、どういう点で可能で、どういう点で不可能かという問題がある。それは、南城ということでの共通性共有物を、この地域がもっているかどうかということでもある。言い方を替えると、「南城的なもの」「南城らしさ」「南城アイデンティティ」がどの程度形成されているか、ということでもある。

「南城論」成立をめぐる状況は、分野ごとに異なる。

南城の出発点は、2006年に行政的に作られたものなので、まず行政分野で南城を論じることができる。それは、選挙で南城が単位となることがあることともつながって、政治分野でも論じることができよう

しかし、今後も南城が継続するかどうかは保障されていない。歴史的に見ると、統治単位としての間切、市町村は、統廃合・境界移動などを繰り返してきた。たとえば、沖縄戦直後、「知念市」が存在したが、そのことを知る人は数少なくなっている。これらの変更は、住民要求に基づいてと言うよりも、統治の都合で、王府・日本政府・米軍などによって、「上」からなされてきた特徴がある。そのこともあって、今後、統治の都合で現在の南城市が変更される可能性は多分に存在する。

では他分野、つまり経済・産業・生活・文化・情報、さらには自然条件・交通などの諸分野ではどうだろうか。そして、これらの諸分野をバックにして、住民意識上ではどうだろうか。それは南城アイデンティティ論として検討されることだろう。南城市スタート10数年を経て、選挙などの政治面、交通・生活・スポーツ競技などを共有するなかで、共有するアイデンティティが徐々に形成されてきたことは確かだろう。シンボルとしての「なんじい」の成立と定着が、その一つの面を示している。

といっても、その共有アイデンティティが長期にわたって保持されると予想されるほどの深さ広がりをもっているかということ、まだ不確かなレベルにあるといえよう。

2021年03月03日

現時点で、南城を歴史的存在として論じることが可能か 南城論へ2

ところで、伊波普猷が比嘉春潮らに語ったとされる「国の風俗習慣は、なる（ビカム）ものであって、作る（メイク）ものではない。郡長などがおこがましく作ろうとするのは笑うべきことだ」という発言は、重要な指摘だ。沖縄の歴史では、統治者たちがメイクしたものを住民に押し付ける歴史が、繰り返されてきた。しかし、住民意識、アイデンティティの形成は、ビカムするものであろう。あえてメイクするとすれば、住民自身が行うものであろう（浅野誠「魅せる沖縄」高文研2018年p20-21参照）。前回書いたことも、この伊波の指摘と響き合う。

さて、南城を歴史的存在として論じることは可能だろうか。スタートして15年なので、歴史論として成立する基盤は弱いとしかいえないだろう。そして、今後、住民自身が歴史的経過のなかでメイクするものが蓄積して、ビカムするものといえよう。

ところで、地域にかかわって住民がもつアイデンティティという場合、市町村単位だけでなく、県単位、集落単位と様々なレベルのものがある。南城市域の住民の場合は、長い間、集落（シマ）単位の生活・思考を軸にしてきた。間切や市町村へのこだわりは、集落単位よりも少なかった時期が長い。時代が下るにつれて、町村、市、県へのこだわりが強まる。そして、今日では沖縄という単位の比重が高くなっている。

また、明治期以降、日本という国へのこだわりが発生し拡大してきたが、それは上からの統治の歴史のなかでメイクされてきたものだろう。

ここで、間切・市町村レベルでの事例をいくつか紹介しておこう。

- ・島尻郡（戦前期）
- ・南部地区行政組合（現在）
- ・佐知城高等小学校 大南高等小学校（明治の一時期）
- ・集落が所属する間切の王府による変更 大里と南風原との間で 佐敷と大里との間で（王府時代）
- ・長期にわたって大里間切・大里村に属していた与那原が大里から独立する（戦後）

統治者主導が圧倒的に多く、住民投票など、住民の意思表示によるものは少ない。そのなかで、与那原の例は、特異な例といえよう。

- ・平成大合併という政府主導による、首長間協議による南城の成立

その際は、与那原とのからみで協議が難航したようだが、そこには歴史的な問題が顔を出していると言えるかもしれない。

ところで、市町村合併の多くの事例は中心地を持つことが多く、平成の合併の際にも、そのことが一つの論議になった。結果的に、既存の中心地がない南城市が生まれた。そして、新市役所周辺を中心地に設定しようとする動きが生まれているが、決定的なものとはいきれない。中心地がないことをプラスにとらえる考え方も存在するのだろうか。

2021年03月07日

南城地域で調べたい考えたいこと 約千年前の大量の移住者たち 南城論へ3

南城地域のことで調べたいこと考えたいことがいくつもある。それらは、私自身のことだが、多くの南城住民からも耳にすることでもある。だが、調べるといっても、可能でないこと、さらに可能かどうかさえも不明のことも多い。と

くに14世紀以前のことはそうだ。

考古学による遺跡調査をもとに考えることができるものもあるが、多くは、言い伝え、民話・歌謡（おもろ）などをもとにした仮説であることが多い。遺跡調査などでわかってきたにしても、わかってきたことをもとに連鎖反応式に、新たな疑問が湧いてくることが多い。

1) 移住者の歴史

「沖縄人はどこから来たのか」という疑問は、書名になるほど、関心が広くもたれていることだ。九州あたりから南下してきた弥生系の人々が優勢であるというのが最近の研究での主な説だろうが、定説までには至っていないだろう。

それ以外の人々の移住も考えられるだろう。また、近年のDNA解析は興味深いことを示唆しているが、解明しえていない驚くべきことも登場している。

近年の研究をまとめてくりかえすと、千年ほど前に、大量の人々が何度も移住してきた。それは、以前からの先住者を圧倒する数だった。その多くは、移住する前の居住地をたどっていくと、九州あたりからやってきた弥生系の人たちであった。交易にかかわる人も多し、稲作などの農業技術をもたらした人たちでもあった。30年ほど前には、縄文系の人達ではないか、という説が有力だったから、様変わりともいえよう。弥生説が定説になるのか、それとも新たな説が有力になるのか、その点も確かなことはいいきれない。

かれらはアマミキヨの一族だったという説もありえよう。アマミキヨは、それ以前に移住してきたという説もありえよう。そのアマミキヨの実体、つまり、どこから、どんな人々が移住してきたか、ということも重要な問いであろう。とくにかれらの到着地点が南城市域であるとするからには、南城史にとっては重要性が増す。

では、百名貝塚ほか、いくつかの地点で見られる千年以上前の遺跡群の人々は、これらとどうかかわっているのか、という問いが生まれてくる。さらには、次元が全く異なるはるかに遠い話だが、サキタリ遺跡の人々についての問いも必要だろう。

これらのかなり以前からの人々の食糧としては、木の実類、獣類、海産物などがあるが、この地域では海産物が重要な位置を占めるだろうが、それらについての探究が必要になるろう。

2021年03月11日

言語 交易 南城論へ4

2) 移住者たちの言語

約千年前の移住者たちは、居住地ごとにいくつかの集団をつくっていたと推察されるが、これらの多様な集団の内外で使われたコミュニケーション手段・言語はどうだったろうか。とくに他集団との間で言語はどうだったろうか。相互に意思疎通できるほどほぼ同一のものを使っていたのか、ある程度の時間をかけ、工夫をすれば通じ合えるほどの違いにとどまる言語の使用だったのか。そういうなかで、「共通語」が形成されたのだろうか。

通じ合えないとしたら、双方の言語が使える通訳的な人が必要だったのか。どれかの言語が支配的な言語としての位置を獲得していったのか。あるいは、双方が使う言語とは異なる広く通用する言語を使用したのか。そういう言語があ

ったとすれば、可能性としてイメージできるものをあげれば、日本本州で流通した言語、九州で流通した言語、中国語、などであるが、それらのいずれかといった問いが生まれる。

当時のそうした言語使用が、「原沖縄語」なのかどうか、いずれにせよ現在のシマクトゥバとどういうつながりをもっているのかが大きな問いになる。

言語に似た問題として、民話の地域間共通性、あるいは差異がどうだったか。羽衣伝説や穀物伝来伝説が、いろいろとあるが、それらの存在と違いは何を意味するのだろうか。

3) 交易

約千年まえの移住者だけでなく、それ以前の居住者についても、海外との交易が重要な意味をもっていたことを、遺跡資料などが示しているが、その交易の実相は調べたいことである。たとえば、ヤブサチの浦原は、オモロにも登場するし、アマミキヨとのかかわりがあるとされる濱川御嶽・ヤハラヅカサと結びついている。現在でも、その水路は鮮明にわかる。では、どんな船がどこから来たか。受け入れている人々は、どこに居住していたか。

かれらが独自に持っていた交易品があったのか、他地域の産物の仲介をしたのか。そうした荷物は、どこからどこへ運んだのか。沖縄各地や沖縄外の交易関連場所で出土するゴホウラ貝は、勾玉などの素材として重要な交易品だといわれるが、南城地域ではどうだったろうか。

14世紀ごろになると、大型グスクは、各々の港をもって交易に参加したと言われる。そのグスクと港との組み合わせはどうだったろうか。たとえば、私が出会った説では、糸数グスクと雄樋川、大里グスクと馬天もしくは与那原がある。では、ヤブサチとタマガスクないしは垣花グスクとの関係はどうだったろうか。知念グスクにとっての港はどこだったのか。

尚巴志一族は、どの港を使ったのだろうか。港使用をめぐる大里グスク勢力とはどういう関係だったのだろうか。また、全くわからないことだが、奥武の港機能はいつから始まったのだろうか。仮にかなり古いとすれば、こうした交易と関係したのだろうか。

2021年03月16日

集落とグスク 南城論へ5

4) 集落とグスク

13世紀から15世紀半ばまでは、グスクから武器などが出土することから見ると、戦国時代的な様相をもっていたようだ。したがって、集落も移動存亡が激しかったことだろう。

では、当時の集落立地はどうだったろうか。グスクのなかにあったのだろうか、あるいはグスクに隣接してだろうか、それともグスクとは距離がある場所だろうか。

また、グスクに拠る勢力者たちと集落住民との関係はどうだったろうか。一体化していたか、支配—被支配の関係か、相対的独立の関係なのか。グスクに拠る一人の支配者は、いくつの集落を配下に治めていることが多かったのだろうか。そうではなく、一つの集落に一人の支配者なのだろうか。となると、支配者というよりも集落リーダーというべきだろう。あるいは、いくつもの集落をまとめて集落連合のような形で、連携して行動するために、「連合政権」のような形をとったのだろうか。

そうした支配者ないしリーダーは、部族を率いる役目をとるといふ、集落住民のなかでの前居住地での地位を継承してきているのだろうか。支配勢力の移動などの変動に、それらの住民のうちどういう部分が同行したのかどうか。住民多数は支配者に密着していたのだろうか、それとも離れていたのだろうか。支配者の移動とはかかわりなしに、土地に継続して居住し、定着している住民はどの程度いたのだろうか。

さらに集落集団の構成には血縁関係がどの程度あったのだろうか。中には血縁集団そのものであった場合もあるだろう。さらに、カップルを集落内居住者同士で形成したのか、それとも、他集落との交流があったのだろうか。それらは、父系制母系制両系制のいずれだったのか、ということともからむ。

近年、遺伝子解析を通して、ルーツを調べる動きが出ているが、なかには、解明が難しい意外な示唆が含まれており、多様なルーツを想定しなくてはならない人々が存在しているといわれるが、そのあたりはどうなのだろうか。それには、近隣集落間の関係だけでなく、多様な海外との関係を視野に入れることを求めるものがある。

こうしたことを考えるうえで、南城市域でいうと、上稲福遺跡は重要な情報を示しているが、その住民は、どこからきて、その後はどこにつながっていく人達だろうか。このあたりも知りたいことだ。地理的に、大里グスクや大城グスクあたりの勢力とつながっているかもしれない。

集落住民の生業としては、統治業務、交易業務、採集狩猟業務、農業業務、石工・鍛冶などの職人などがあろうが、それらを兼業していたのか専業だったのか。

こうしたことのほとんどは未解明だろう。

2021年03月21日

水田稲作と地域差 南城論へ6

5) 水田稲作と地域差

統治権をめぐる「戦国」的争いを経て、統一政権が形成されていく15世紀において、住民も徐々に特定地域に定着していこうが、そのありようはどうだったろうか。

定着化の過程で、農業生産の比重が高まったと推定されようが、食糧のどれくらいをまかなっていたのだろうか。集落外から移入する食糧と集落自給の食糧との比率はどうだったろうか。漁業を中心とする狩猟採集による食糧と稲を含む穀類・野菜類との比率はどうだったろうか。それ以前から続く漁業がなお重要な位置と比重を占めていたと推理されるが、実際はどうだったろうか。

水田稲作は11世紀前後に始まったという説が有力だが、それは海岸低地もしくは丘陵部の谷であり、水を得やすいところだったといわれる。その推定候補地としては、14世紀あたりまで範囲を広げて考えると、受水走水周辺、上江洲口（現在の玉城ゴルフ場内）、志喜屋、知念大川、當山、糸数、稲福あたりが推理される。

その水田での稲生産の拡大には、農具と同時に灌漑が重要なポイントをなすであろうが、具体的にはどうであろうか。また、畑での栽培ができる粟・麦などの穀類の栽培と稲作との関係や比率はどうであったろうか。

14世紀までにすでに水田稲作を展開していた地域は、知念半島南側や丘陵部に多いが、では知念半島北部の佐敷あ

たりの水田稲作のスタートはどうだったろうか。

このことにかかわって、南城市教育委員会編『南城市史総合版（通史）』2010年初版の次の記述は注目される。「先史時代の遺跡が玉城や知念に偏在し大里では僅かな分布状況を示し、佐敷にいたっては皆無である。ところがその後のグスク時代になると分布状況が変わってくる。すなわち大里や佐敷の地域でグスク時代の遺跡が増え、玉城や知念よりも多くなる。」p34～35

では、尚巴志・尚思紹などが移住してきたと推定される14世紀末より以前の佐敷はどんな姿だったろうか。それ以前の水田稲作の有無、あったとすれば、どんな人々だったのだろうか。

2021年03月25日

移住者の出自 南城論へ7

6) 尚巴志一族と佐敷先住者

尚巴志・尚思紹一族は、ある程度まとまった集団・勢力として移住してきただろうと推察される。では、それ以前の佐敷の居住者はどんな人たちであったろうか。それとも人が住んでいなかったらうか。居住者がいたとすれば、かれらの勢力はどんなであったらうか。そして、かれらとタマグスク・知念グスク・大里グスク勢力との関係はいかがだったらうか。

かれらは、尚巴志・尚思紹一族とどういう関係を築いたのか。滅ぼされたのか、追い出されたのか、連携したのか、統治下に入ったのか。

尚巴志が、鉄農具を配り水田耕作を振興したという言い伝えがあるが、受け取った農業者は、尚巴志一族とともに移住してきた人々なのか、佐敷先住者なのか、それとも他の人々か、そして彼らは農業専従者なのか、半農半武だったのか。尚巴志勢力が鉄製農具を供給して、広大な農地を運用して、強大な勢力を確保し、沖縄本島の覇権の基盤にしたといわれる。その通りだとすれば、農業を基盤として勢力権力を獲得するという、集落のありようにとっては、時代画期をなす重要なできごとだろう。

7) 喜界島勢力とのかかわり

近年喜界島の遺跡発掘調査により、10～14世紀ごろの琉球列島史は、大きく塗り替えられつつある。その喜界島やカムイ焼き産地の徳之島の勢力と、南城地域移住者との関係はどうだろうか。喜界島勢力が南下して沖縄に移住してきたという説が有力になりそうだが、どうなることだろうか。尚巴志勢力、さらに尚円勢力は、伊平屋・伊是名から来たと伝えられているが、かれらがさらに北の地域から、伊平屋・伊是名を経由して来たという見方も存在する。とすると喜界島勢力を視野にいれなくてはならない。

また、熊本の佐敷と沖縄の佐敷をつなげる説は、戦前から登場しているが、そのあたりはどうなのだろうか。

8) 少し時代は下るが、尚巴志勢力が北山勢力を支配下に置いた際に、敗北した敵対勢力を皆殺しにしたとさえいわれる当時のありようとは異なって、北山の攀安知の遺児を生かして育て、遺児たちが津波古の元祖になったということが津波古では重要な歴史上の言い伝えになっており、「遺跡」も多い。

それが事実とすれば、その経緯の解明が必要だろう。

この事とかかわって、最近出版された上間篤『中世の今帰仁とその勢力の風貌』ボーダーインク社2018年は、北山勢力は、元王朝の中国支配に重要な役割を果たしたアラン人（イラン系遊牧民）とつながっているという説を提起している。興味深いのが、研究の世界では、受け入れられるまでには至っていないようだ。

2021年03月30日

古村の成立 南城論へ8

9) 第二尚王朝成立による変動

第一尚氏滅亡は、かれらと深いつながりをもっていた佐敷を中心とする人々に、強い衝撃・変動をもたらしたであろうが、具体的なことはほとんどわかっていない。対照的に、第一尚氏の墓の多くが富里・當山にあり、かれらの末裔で富里・當山に住み着いた人たちがおり、今日につながっているといわれる点が注目される。だが、富里・當山がなぜそういう地になったのだろうか、その経緯は不明に近い状況にある。そして、かれらは、第二尚氏との関係をどうしたのだろうか。

第二尚王朝は、集落統治に大きな重点を置く。その背景として、交易国家としての経済運営に陰りが出てきており、集落における農業を中心とする生産に基盤をおくことになったことと関係がある。そのための重要施策を展開していく。その一つは、各地の按司を首里に移住させ、代わりに王府役人を派遣することであった。また、聞得大君一ノロ体系をつくり、各集落の元家とかかわるとされる根神・根人などをそのもとに従属させ整備していく。それを通して、集落と集落住民とを精神的に統率していく。

こうして、それ以降数百年にわたる集落への王府支配を確立していく。集落は、農業生産を基軸に定着することが前提となり、生産力向上（税収上昇）のために、集落の分立・併合・移動・創設などもすすめていく。これらの集落はその成立が16世紀以前にさかのぼるといわれる古村である。南城市域には他に、18～19世紀につくられた屋取村、20世紀後半に作られる新興住宅地がある。

こうした歴史もあってか、古村では、集落の開始を16世紀ないしはそれ以前にさかのぼるとする言い伝えを残している所が多い。

しかし、王府承認の系図をもとに検討できる土族で形成された屋取村と異なって、文献資料がないので、どうしても言い伝えによることになる。言い伝えを字誌などで文章化した所も多い。それにしても、16世紀以前にこだわって、集落の歴史を言い伝える例が目立つ。

ところで、糸数グスクに拠った統治者の子孫は、現在の糸数にはいない。おそらく、他按司との闘いに敗れて、主のいないグスクになったか、主がいたとしても、按司の首里集居施策で首里に移動したのであろう。タマグスクや知念グスクをはじめとする統治者の子孫も同様であるかもしれない。

17世紀後半から18世紀初めの系図作製で、土族と認定されることがなかった人々の先祖の中には、各地域で軍事や統治にかかわっていたが、第二尚氏につながらないために、18世紀以降、土族ではなく農民と扱われてきた人たちがいるようだ。富里・當山・具志堅・佐敷・津波古などには、そうした人々がいると推察できるかもしれない。

2021年06月21日

聞き取りと文献資料 南城集落論への旅A 1

※ 南城集落論を作り上げることは長い旅になりそうなので、「旅」という名前をタイトルに付けた。それはAからはじまってB、C・・・と続く予定だが、どのくらいになるかは見当がつかない。私一人ではできそうもない旅になりそうだ。でも、とにかく旅をはじめよう。

私が執筆を担当した「南城市史 民俗編」のなかの「市民の語りで描く南城の多彩な集落（シマ）の歴史」（仮題）の原稿は、2020年3月には書き終え、現在校正段階にあり、2022年3月までに発刊予定である。20万字を越す膨大なものだが、各字が出している字誌・公民館記念誌、そして約20名の調査員による住民からの数百回にものぼる聞き取りをベースにしたものである。

原稿は、そうした住民からの情報を項目ごとに整理体系づけたものであるが、本格的な南城集落論というよりも、そのための基礎資料整備という段階のものである。今回の聞き取りがそうであるだけでなく、字誌および公民館記念誌の記述の多くが、編集発刊時（1970年代から2010年代まで）に行われた聞き取りを取り込んでいて、生（なま）の資料が豊富であり、それ自体が貴重なものである。そして、それに基づいた研究の発展が期待されるものである。私もその一端を担えることを願って、この連載を始める。

そうした性格のため、今回の原稿は20世紀に入ってから現在に至るまでの情報が中心になった。とくに聞き取りに応じてくださった方々は1930年代以降生れがほとんどであり、情報もその時期以降が中心だ。したがって、それ以前の叙述は、文献資料で補足したものである。その文献資料には、個々の集落を対象にしたものは多くない。とくに19世紀以前についてのものは大変限られている。

集落ごとのものが大変少ないとはいえ、多少なりとも見いだせるのは、19世紀後半の明治政府＝沖縄県庁統治下のものだった。これらの統治者たちが、その後の統治のために集落単位の資料を提出させたのがその一つである。また、この時期の統計資料は必ずしも正確ではないが、残っている。さかのぼると、『球陽』などの近世期の資料は、断片的とはいえ、貴重な資料となることがある。

また、見聞記の類が当時の事情を少しは記録している。また、屋取集落については、家譜が示すこともある。しかし、全体的に見ると、かなり少ないために、集落をめぐる情報には、口伝え資料に頼るものが多い。

それらのなかで、南城市域ではなく、宜野湾市域の新城集落のことであるが、佐喜眞興眞「シマの話」（1925年郷土研究社）は貴重なものであり、その後の関連研究は、これに示唆を受けたものが多い。これもその一つであるが、民俗学といわれる研究分野が、大正期後半に広がり、沖縄についての貴重な資料を提起し始めた。それらは、聞き取りを含む見聞を中心とするもので、19世紀末から20世紀初めの集落の様子を描いていた。

2021年06月26日

ステレオタイプなとらえ方 南城集落論への旅A 2

前回述べた20世紀に入ってからの集落叙述には、同時代の情報を中心に描いている。そして、多少時代をさかのぼるものについては、口伝えに頼るものが多い。

今回の南城市史の執筆にあたって、これらを参照することがかなりあったが、集落での生産や暮らしの記述は、20世紀初頭より前にさかのぼるのは、かなり困難であった。

ここで留意したいのは、さかのぼる際に、ステレオタイプなとらえ方が忍び込むことが結構ありそうなことである。情報量が少ない際には、限られた情報に依拠することが多くなるために似通った叙述が増え、結果的にステレオタイプに陥ってしまうのである。そして、情報空白個所では、貴重な情報を参照するにしても、推理に頼ることになり、「～～であるはずだ」という叙述に陥る危険性をはらみやすい。

個別集落に限らず、人びとの暮らしや意識にかかわっても、そうした傾向が生まれてくる。たとえば、岸政彦・打越正行・上原健太郎・上間陽子『地元を生きる 沖縄的共同性の社会学』ナカニシヤ出版2020年のなかで、岸政彦は、「沖縄的なものとは、その共同性、共同体規範そのものである。私たちはこの、人びとの濃密な、前近代的な、農村社会的な紐帯の強さを通じて、沖縄的なものを発見する。」と書いている。

こうした把握はかなり広く見られるといえよう。こう書く私自身も、それに類似した認識から自由でなかった時期がかなり長い。そこから自由になってとらえられるようになったのには、かなりのステップが必要だった。拙著の「沖縄県の教育史」（1991年思文閣）「魅せる沖縄」（2018年高文研）、そして、今回の南城市史の作業を通して、少しずつ、こうしたとらえ方から卒業していく過程を歩んできた。

では、その卒業のためのいくつかの点を述べていこう。

まず「沖縄的なもの」を「共同性」、「濃密な、前近代的な、農村社会的な紐帯の強さ」に集約して語ることの妥当性についていうと、そう指摘することが妥当する場合もあるが、そうした指摘とは一致しないものも存在する。たとえば、「移動交流」「多様性」「地域差異」「身分階層差異」「ジェンダー差異」をはじめとする他の言葉で語りうるがある。

2021年07月02日

集落激変前の姿を「古き原型」とみなす傾向 南城集落論への旅A3

農村社会とか農村における共同体とかいうものは、「もともとそうであった」という本質主義的存在ではなく、歴史的に形成され変化してきたものである。とくに統治行為によってつくられた性格を色濃くもつものであることに注目する必要がある。そしてそれらは、そうした統治によって「上」から作られた社会・共同体を、住民自身が受け入れ、あるいは反発し、作り替えようとする営みの中で形成されたものである。

農村における集落には過去現在を問わず多様性があり、それらをまとめて「共通性が濃い共同体」と言ってしまってもよいかは微妙である。たとえば都市から移住してきた土族が形成した集落である屋取が、南城市域でも広く存在しているが、それは他の農民たちが形成していた集落とはかなり異なるものがあり、両者を一括して語ることは難しい。

こうした「共同体」像は、大きな変化が生じていくなかで、「失われつつある」従来の形を「保存」しようとする動き

の中で形成されることがしばしばである。いってみれば、「共同体としての集落」がアイデンティティ・クライシスに陥るほど激変する時に、その集落の住民が、「古き原型」的なものを保存しようとする際に登場しやすい。

たとえば、1960~2010年代における字誌作成は、集落をめぐる大変動のなかで、1950年代以前の集落のありようを描こうとしてきた。たとえば、沖縄戦体験の記録、そして稲作やサトウキビ作を軸にした農業生産と集落生活を描こうとした。

同様に、1920~30年代に描かれたものには、民俗学の動向に刺激された人々ないしは研究者たちが、土地整理、「地方改良運動」などによって、当時急激に失われつつあった集落の諸慣習を描き出そうとしたのである。女性の手指の入れ墨であるハジチなどはその典型である。それらが描いたのは、その時期より少し前の19世紀末から20世紀初めの姿であった。そうしたものの多くが、集落民俗についてのそれ以降のステロタイプ的な像を形成することにつながった。

しかし、それらの大半は、変貌する直前の姿を復元しようとしたのである。したがって、それはその100年以上前の姿を復元したわけではないが、そのように、かなり以前のものだと思い込んでしまう危険性をはらんでいる。

2021年07月07日

集落（シマ）アイデンティティ 南城集落論への旅A4

沖縄では、いろいろな場でアイデンティティが築かれるが、そのなかでも集落などの地域単位に、強いアイデンティティが築かれることが注目される。そのなかで沖縄アイデンティティは、沖縄の諸地域を総括するものといえよう。その沖縄アイデンティティには、生産面、生活面、文化言語面、行政面などと多層的であり、沖縄内の地域偏差も大きい。沖縄全体のアイデンティティは、沖縄外から沖縄に向けられたまなざしとのかかわりで、沖縄内に生まれ育ったり、生活したりしている人に生まれてくる。沖縄外への旅行、あるいは沖縄外での居住、沖縄へのUターン、戦争、基地、政治経済、そして言語や文化などが契機となることが多い。

首里王府時代でいうと、そうした海外交流・接触体験をもつのは、士族、そして航海業務従事者に限定されていた。したがって、沖縄アイデンティティを感じる人はそうした人々に限られていた。それが、一般庶民にまで広がるのは、移民・出稼ぎなどが広く見られるようになり、学校教育が一般化する20世紀に入って以降のことである。

一般庶民にとって、沖縄全体についてのアイデンティティ以外のものとして登場しやすいものとして、集落（シマ）アイデンティティがある。沖縄の集落は長い間、シマと表現され、人びとの生活感覚として馴染みのある言葉である。近年使用度合いが減ってきたとはいえ、農村地域では今なお盛んに使われている。

ところで、アイデンティティには、実体面としてのものと意識面としてのものがある。集落（シマ）アイデンティティの形成を促すものとして、実体面では生産面・生活面がある。生産面では、かつてのように住民の大半が農業に従事していた時代と現在とでは大きく異なるが、地域内の草刈清掃のような共同作業に現在でもその形が現れる。生活面では、かつては、共同で炊事をして食事をすることが、しばしば見られた。1970年代はじめまでみられた字立保育園（幼稚園）も一例だろう。

実体面と意識面とが結びついたものとして、祭祀や芸能がある。冠婚葬祭を集落が取り仕切って行う事は、今ではほとんど見られなくなったが、故人宅で行なう葬儀の際に、炊き出しを行う事例は、現在でも残っている所がある。集落

祭祀をめぐる年中行事は、多少は簡略化しているとはいえ、継承している集落が多い。綱引き、エイサーなどの芸能行事は、いまでも活発なところが多く、1970年代以降に生まれた新興住宅地では、新たに祭などの形で芸能行事を生み出すところが多い。集落対抗スポーツ行事なども集落アイデンティティを強める一つだろう。

また、市町村行政を補助する単位として、集落組織が、区・自治会などとして現在なお活用されていることも、存在を強めている。

2021年07月12日

集落の同質性と異質排除 南城集落論への旅 A5

アイデンティティは、閉じられた地域や集団のなかで、それらの内側では同質であるとの認識を促進しやすい。その結果、集団成員に対して同質性を強制し、異質なものを集落外に排除しようとする動きを作り出しやすい。

そうしたありように拘束を感じ、離脱する動きも広がっている。集落内に居住するが、区費を支払わず、共同作業に参加しない例は広く見られるようになってきた。とくにアパート・マンション居住者の場合は、集落活動に参加する例の方が少ないこともある。集落が、住民を一体化して、同調を強制しがちなことから脱却して、個人の自由を追求する動きが徐々に広がってきていることと並行していることだ。都市地区、都市近郊では、住民に同調を強制するようなり方は通用しなくなったのが実情だろうし、それが農村地域でも広がってきている。

他方で、新興住宅地のように、各地から移住してきた人々で構成される「集落」では、集まってきた「個人」が結び合って共同し、新たな「集落」をつくる動きも広く見られる。その場合、以前の居住地の経験・思い出を生かそうとするため、旧来の共同体的要素を見いだすこともあるだろうが、違いの多い集落体験なので、最大公約数的なありよう、あるいは新たに作り出すというありようになる。それは、自発的参加というアソシエーション的要素を多分に持ったコミュニティ作りといえよう。

ところで、18～19世紀に形成された屋取集落は、より長い歴史をもつ近隣の一般的な農業集落とは異なって、移住してきた家単位、あるいは門中単位で活動することが中心であった。それでも、「集落」めいたつながり・結び合いを作り、必要に応じて共同作業や共同祭祀を新規に生み出したりもした。ということで、現代風にいうと、農村における新たなコミュニティづくりという様相を呈した。

こうしてみると、同質性と異質排除を特徴とする閉じたものとして、集落を、さらに沖縄全体を見ることが妥当かどうか、という疑問が存在する。それとは対照的に、移動・交流のなかで作られたものとして、開かれたものとして、集落を、さらに沖縄全体をみることも、欠かせない視点であろう。交易、移民や出稼ぎ、現代ではIターン、Uターンなどがそうしたものを促進しただろう。また、現在の沖縄住民の祖先の多くが沖縄外から移住してきた10～15世紀は、そうした性格を多分に有していた点にも留意しておきたい。

2021年07月18日

「上」からの統治下の集落 原勝負 南城集落論への旅A 6

ところで、集落を内発的な視点に限定して捉える事例を見かけることがある。しかし、集落の歴史の大部分は、集落外存在である「上」からの統治のありように強く影響されてきた。現代でも、南城市という存在自体が、政府の地方自治政策によって作り出された面が強いことに表れている。そして地方自治体の集落施策に支えられて、集落づくりの企画の多くが実施されていることにも、それを見ることができる。

そうした「上」からの統治が弱まった時（それは財政支出がほとんどないことでもあったが）、否応なしに集落が自治的性格を強めることがあった。1945年末から各集落が再スタートしたころ、米兵による暴行が繰り返されることに対して、集落は自ら防備する体制をつくることをはじめ、集落再建運営を自治的に進めるしかなかったこともその例だろう。

19世紀までの「上からの統治」例で、わかりやすいのは原勝負である。農業生産および日常生活などで、田畑の草取り、家屋周辺の清掃といった、たくさんのチェック項目をたてて、その出来具合について、間切のなかの集落を二つに分けて対抗させて競わせたのである。審査は間切役人が担当し、勝負をつける。成績が悪い個所の当事者には罰金を科すなども行われた。審査日が近づくと、住民は懸命に作業を進めたのである。勝敗の結着が付いた後、審査日には馬勝負・角力などの娯楽を行うなど、一大行事でもあった。

原勝負は、20世紀に入って以降も続けられるが、戦後も1960年代まで、名前を変えてそれに類したことが行われた。

こうした「上」からの施策にもとづく取組みのなか、集落の内側では結束が、外側とでは対抗や競争が強化されていく。それが体質化し、20世紀以降も、場合によっては、21世紀まで引き継がれた。学校関連でいうと、明治期後半には就学率競争、戦後では学業成績競争が行われた。戦後盛んに行われてきた集落対抗のスポーツ行事は、一部は今日まで引き継がれている。さらには、納税貯蓄競争まで行われた。

各集落の公民館に掲示されている賞状類は、こうした歴史をよく示している。

また、王府時代には集落単位に「耕作當」というものが置かれたが、現在の区長に相当するものだ。名前の通り、農業生産の「指導管理」を中心職務にした。集落住民と「上」からの統治との間に置かれた役職なのである。

このように、集落は「上」からの統治に従いつつ、それに対応（時に対抗）する「自治」的性格をもつものとして存在してきた。ということだが、多くの場合、「上」の権力に従うが、時に抗うこともあったということである。

2021年07月23日

集落内の階層分化 多様な職業 南城集落論への旅A 7

集落の歴史をめぐって、いくつかの指摘をしておこう。

集落内における同質性を崩す機能を果たしたものとして、階層分化がある。まず地方役人層と一般農民層では大きな違いがあった。

一般農民層のなかでも、イリチーとかヒヨーとか呼ばれ、他家で働いて生計をたてる個人・家族もいた。家族のなか

の誰かがそういう形で働いて、家族の窮地を救うことも多かった。彼らは、通いで、あるいは住み込みで働いた。有力農家は、そうした労働力をもとに、近世期に仕明地と呼ばれる農地開発をすすめ、富農層を形成していく。

この点では、地主と小作という関係での階層分化がみられた本州各地の農村とは異なるありようをしていた。

こうした「農業労働者」的存在の人・家族は、集落内だけでなく、近隣集落からも、さらには沖縄内出稼ぎあるいは沖縄内移住として、南城市域のいくつかの集落に移住してきた。移住者としては、屋取村があるが、それとは全く異なるありようがあったことに注目しておきたい。

さらに、20世紀前半までの南城市域の大半の人々の職種は農業だったが、それ以外にも多様な職種があり、集落内から就業する例もあるが、集落外、なかには遠方からきて従事する人もいた。なかには、そうした移住者が多く、多様な職種で形成されるようになって、都市的様相を呈していく集落もある。20世紀に入って以降の津波古などは、そうした様相を多分に有していた。他にも、主要道路沿いには、交通運搬業などに従事する人が集まって、小さいながらも、町の雰囲気漂わせるところもあった。目取真などはその例だろう。

また、久高が典型だが、海運や漁業に従事する人が多い集落も存在する。また、石材の切り出しで、集落めいたものを形成し、戦後、行政単位としての集落になった堀川がある。

このように農村地域も一様ではなく、多様な色彩を帯びているのである。

多様化していく動向は、「土地整理」が行われ、商品金銭経済の浸透が進み始める20世紀初めから広がっていく。そうしたなかで、起業が零細規模ながら増えていく。さらに戦後になると、基地建設のためなどで農地が狭められ、農業継続が難しくなる人が増え、多様な職業に従事する人が増え、起業も爆発的に増えていく。

南城市域でも「軍作業」に従事する人が多かったが、その退職後も何らかの「勤め人」に移る人が多く、農村地域にあっても、自営業としての農業中心の形から、「勤め人」中心の形へと、大きく移行していく。

2021年07月29日

思い違いの「自然村」イメージ 南城集落論への旅 B1

最近、荒木田岳『村の日本近代史』筑摩書房2020年という書籍に出会った。沖縄を対象にしているわけではなく、本州四国九州を対象にしている本だが、沖縄の集落を考えるうえでも示唆は多い。また、この分野の専門的研究を踏まえているが、その分野での本書の評価がどのようなものであるかも、私にはまだわからない。

それにしても、私が持っていた認識の再検討が必要であることを示唆するものなので、ここで紹介しつつ、沖縄集落史を考えるうえで求められる検討課題について考えていきたい。

まず、次の指摘に注目したい。

「多くの人々の郷愁を喚起するような、自足的で共同性にあふれた前近代の村のイメージもまた、実は、近代化のなかで作られたものではなかったか。近代の村はそれまであった村々を束ねたものではなく、従来とは異なる原理で作り変えられた、まったく別のものを同じ名前と呼んでいるのではないか。」 p 11

「幕藩体制後期の村は、「自然村」という言葉でイメージされるような、自足的・共同的・完結的なものではなかった。また、自然村という言葉は、村人の主体的な意思ないし営為によって形作られたというイメージをとまなうが、現実の村は、支配のために便宜的に作り変えられる対象になっていた。」 p 115

私の前近代の集落イメージにも、自足的・共同的・完結的な「自然村」イメージを多分にはらんできた。ここ数年の作業の中で、多少の修正はすすめてきたが、総体としてみれば、そういえるだろう。

私だけではない。佐喜眞興栄「シマの話」をはじめとして、1920年代から沖縄集落記述にも、そうした傾向を多分にもっていたように見える。民俗学にして歴史学にしても、さらに社会学などでも、そうしたイメージを越えるものには、まだ出会っていない。

そして、「村人の主体的な意思ないし営為によって形作られたというイメージ」に、強く彩られてきたことに検討のメスを入れることが必要だろう。そして、そうしたイメージは、「近代化のなかで作られたものではなかったか」という荒木田の仮説提起を検討する必要があるだろう。

2021年08月03日

思い違いの「自然村」イメージ（続） 支配・統治と集落 南城集落論への旅 B2

前回に続いて荒木田著書の紹介コメントをしていこう。

「村は、その言葉が出現した頃から支配の単位であったと考えられ、もとより、前国家的な存在であったとは考えにくい。（中略）その意味で、前国家的なものとして自然村を措定することには賛同しがたい。むしろ、前国家的な共同体の存在まで否定するつもりはないが、それは「村」とは別の概念でとらえた方がよいだろう（中略）」

「自然村」を媒介として「村の起源」「共同体の起源」を辿っていくというアプローチは多分に錯誤に基づくものであり、問題の立て方としてはおそらく逆であって、村はどのようなものとして作り替えられてきたかを分析しなければならないのではないか」 p 232-3

鋭い指摘だ。「村の起源」「共同体の起源」→「自然村」→「前国家的存在」→、といったとらえかたは無意識になされ、広くみられるものだろう。だが、事実に則しての研究結果のもとづくものとはいえない。むしろ、「逆」だというのが、荒木田説であり、統治とのかかわりで検討把握することが求められるというのだ。

その点は、本連載のA6「[上]からの統治下の集落 原勝負」で私が書いたことと関係する。なお、15～16世紀あたりの沖縄の集落（シマ、ムラ、マキなど）については、仲松弥秀などの研究があり、それらを荒木田論とかみあわせて再論することも有益だろう。これらについては、連載Cで取り上げる予定である。

さらに荒木田著書の紹介コメントを続ける。

「人間の集団を意味したかつての村」 p 16

「人を通じた土地の捕捉」から「土地を通じた人の捕捉」への原理転換 p 20

この指摘が、沖縄にも該当するかどうか、検討が求められるだろう。その前に、こうした視点をもって、沖縄の集落の検討が必要であろうが、私も「土地」と「人」とを未分化なままに、集落についてこれまで考えてきたが、両者を区分しての研究にはまだお目にかかっている。この視点からの改めての研究をしてみたいが、私は年齢的に可能だろうか。

2021年08月09日

「上」からの統治と集落住民の自治とのせめぎあい 南城集落論への旅 B3

荒木田は、近代へと移行する時期に、「土地」と「人」との関係をめぐる重要な施策が展開されたという。それは、1889年市制町村制施行にかかわるもので、「村人の土地はすべて可視化された。人々はどこへ移動しようと、行政区画を通じてどこかの村（市町村）に捕捉されることになった。（中略）「土地を通じた人の捕捉」によって、自身がどこの村の「住民」なのかが自動的かつ一方的に決定され、同時にそれを本人に理解させ納得させることにもなった。しかも「村の担い手として」ではなく、「統治の客体として」である。つまり、人が村に帰属するようになったのである。」 p 23～24

そして、「近代化とは有限性の認識に基づいた「分割」と「囲い込み」に象徴される」 p 32と述べる。

ここに書かれていることは、沖縄ではおおよそ20世紀初頭の町村制実施（1908年）、土地整理（1899～1903年）のなかで展開される。これに戸籍制度が結び合うことはいまでもなかろう。こうして、沖縄でも、行政村（旧間切）のなかに集落や住民を位置づける統治システムが整備されていく。

そして、重要なことは、近代における国家統治のなかで、町村や集落は、荒木田が次のように描くものとして扱われ、自治を展開するところとはされなかったことである。

「近代化によって、地方とは統治し経営する対象ではあっても、自治を体現するための場ではなくなった。「地方経営」のための中間支配者を官僚化するには、地域の自立性が障害となる。それゆえ、地方経営は「いかに地方を自立

させないようにするか」を制度化するものになる。村と国との関係としては、村が府県や国を支えているのではなく、村や府県が国にぶら下がり（依存している）状態をイメージすればわかりやすい。」 p 238

にもかかわらず、集落住民が自治を求め、さらに自治的に振る舞おうとしたことがしばしば見られる。沖縄での著しいものとして、「上」の統治権力が、極限的に弱化する沖縄戦末期と戦争直後の集落動向である。

そして、「上」からの統治と集落住民の自治とのせめぎあいの展開は、集落をめぐる一つの焦点的テーマとなってきた。

2021年08月15日

「集落」イメージをチェックする 南城集落論への旅 B4

ここからは、沖縄における集落をめぐる研究課題を年代順に箇条書き風に描いていくことにしよう。箇条書き風にするのは、集落研究が、私においてはいうまでもなく研究世界全体においても、とくに近世より前については、先駆的研究は例外として、未解明というよりは未着手の課題があまりにも多く、全体像を描きうるほどの段階に至っていない分野が、あまりに多いからである。

そういうなかでは、現代の感覚で、かつての時代のありようを「推理し過ぎている」叙述に出会うことがある。例えば、集落の始祖をめぐることは、文献史料がほとんどないために、口伝えに基づくものが多い。口伝え史料は、なにがしかのことを物語っているといえようが、裏付けとなるものが弱くて、事実であると確定することが困難なものが多い。

たとえばアマミキヨ伝承は、ヤハラヅカサ→濱川御嶽→ミントン→と移り住んだ物語を提供するが、それは単なる「お話」にとどまらないで、何らかの事実とからみあっているかもしれないが、あまりにも「創作」過ぎて、歴史事実にかかわる研究材料にするには、多くの媒介作業が必要だ。その作業が可能かどうかさえ不明だ。むしろ、「お話」のままにしておいた方がいいのかもしれない。場所は特定できるのだが、いつごろの時期のことか、それを行った人間集団はどんなものかなどを事実として特定することは、不可能に近いだろう。

そうした未解明の事が多すぎるために、過去の特定の時期のありようを、現代人の感覚・発想をもとに推理し過ぎて、事実とはかなり異なる姿を描いてしまうことは多い。

何をもって「集落」というのか、ということさえ、現代的感觉で思わず推理してしまっていることがある。集落の人口規模を例にとると、現在の数十人~数百人（時に数千人）のイメージをもって、数百年以上前の集落をとんでもない姿で描いてしまう。

「家族」にも同様なことがある。さらに「集落」と「家族」とを関わらせて考えようとすると、別の難しい問題が登場する。

現代感覚でいうと、一つの家の一つの家族が住み、かなりの数の家族によって集落が構成されるのが通常だろうが、時代が異なると、それと大きく異なってくるだろう。「基本単位としての家族」のいくつかがまとまって集落をつくり、さらに統治単位（現代では自治体）を作るといふしばしば登場するイメージで語りうる時代は、かなり限定される。

現代でも、単身世帯を、集落を構成する家族と見ることができるといふ問題が生じている。そこで新たに出てくる「個人」という概念を検討しなくてはならない。だが、個人もまた複雑だ。「近代個人」という概念で語る場合と一般的に「個人」というものを論じるのとでは、大きく異なる。

また、一對の男女を核として家族をイメージすることが、広く見られるが、その妥当性はどれほどあるだろうか。また、いくつかの家族を構成単位としてつくられた血縁集団あるいは親族集団という性格を集落がもっていたと表現されることがあろうが、そうすると、血縁集団と集落との関係はどうとらえるのか。さらにはいくつかの血縁集団（親族集団）が寄り合って集落をつくっているとなると、事柄はより複雑になる。

2021年08月21日

集落の移動と人間の移動 南城集落論への旅 B5

前回述べたことに、先に紹介した荒木田のいう「土地」と「人」のテーマを絡めると、なお興味深い問題が浮上する。たとえば、南城市前川のように18世紀に移動した集落があるが、移動の際、土地名は移動していないだろうが、土地で展開された営みを担う人間集団の移動に伴い、その集団名を示す名称は移動しただろう。その際に、古島とか元島という名を旧居住区に残すことが多い。

他の時代にも移動例があるが、血縁性が濃い集落であれば、人間集団としての集落が丸ごと移動することは多いだろう。農業など生産と直結した集落であれば、住民は類似の生活生産様式をもっていて、利害関係が強く結びついているからそうなりやすい。

対照的に、多様な出自・職業で構成されるタイプの都市集落の場合、また多様性をもつ人々による植民の場合、そうとは限らない。血縁性が弱いだろうし、移動するとしても、集落立地条件を崩壊させるような戦争や大規模災害でなければ、集落丸ごとの移動にはなりにくい。

そうしたタイプの集落では、住民の生産や生活の共通性は薄く、土地との結びつきも弱い。そのため、住民の類似性ないしは共通性をもとにした結び付きを強めることは生じにくい。集落ないしは集落住民を結びつけるためには、別の原理をもとに、住民相互の合意・約束・ルールを築き、それをもとに結合していく。それはアソシエーション（結社）である。だから、アソシエーション原理をもとにコミュニティを作るということになる。南城市域でも、1970年代以降に作られた新興団地には、そうした性格が色濃い。

そうしたもののさえ弱く、たまたま同じ建物のなかの一区画を取得したことで、「隣人」になったという現代のマンションのような場合は、アソシエーションさえ生じにくい。さらに賃貸住宅の場合、なおのことそうである。しかし、建物の運営をめぐる問題が発生した際、あるいは大規模災害に遭い、対処に共同が必要になる際、アソシエーションをつくり、コミュニティ的なものが生まれる事態もよく見られる。

それらは、現代における集落形成維持の中心原理になりつつある。

だが、それは現代に始まったことではない。こうした「集落もどき」タイプから、生産生活の共同性が強いだけでなく血縁原理で組織されているタイプまで、多種多様な集落が存在してきた。それらの歴史的展開をみていくことが、集落史研究の中心テーマの一面であろう。

たとえば、貝塚時代といわれる時代の早い時期（6000～7000年前）の集落には、定住せずに移動をくりかえすものが見られる。それが時代進行につれて、定住化する集落が見られるようになる。（高宮広土「奇跡の島々の先史学——琉球列島先史・原史時代の島嶼文明」ボーダーインク社2021年p122～123）

このように短期間で移動をくりかえす集団も、集落とはいえよう。

こうしたことに関心をもって集落を考えようとすると、長期にわたるかなり分厚い研究が必要となる。これらの研究に私が継続して従事し、執筆できる可能性は、限りなくゼロに近い。再び私の年齢上の制約があるからという言い方を使わせていただく。

2021年08月26日

貝塚時代の集落 南城集落論への旅 B6

沖縄考古学で貝塚時代と呼ばれる10世紀以前と次のグスク時代への移行期についての研究は、ここ20~30年間で大きく前進したようだ。それらの研究を集約する形で、前出の高宮広土著書は、約7000年前から1000年前までの時期について、次のように描いている。

「前1期から前3期まではおそらく遊動的なバンド社会。前4期からやや定住化の傾向にありますが、おそらくまだ平等な社会。前5期になると、より定住的でやや複雑な社会があったことがデータからうかがえました。しかし、そのやや複雑な社会はさらに進化してグスク時代のような社会にはなりません。そのレベルを維持したか、またバンド的な社会組織に戻ったようです。後1期のなかごろ（「貝の道」のころ）、再びやや複雑な社会が出現したと思われるデータが提供されています。しかし、この社会組織も、さらに複雑なグスク時代のような社会組織へとは変遷せず、このレベルを維持したか、またより単純な社会組織へととなりました。」前掲書 p 302

ここで著者は社会組織について述べているのだが、この時期には社会組織のありようを語ることは、集団規模などから考えて集落のありようを語ることにほぼ等しい。

採集漁労を中心にするこの時期の終わりのころの集落に作られた住居の数は小規模であろう。数戸ないしは十数戸であり、数十戸というのは想像しにくい。そして、住民は相互に血縁関係を持っていることが多かっただろう。何世代にわたって継続して集落を構成していると、自然にそうなる。それでも、生活生殖のためのカップルを見つけ作ることや交易交流のために、集落外の人々との、時には海外から来訪者との接触交流があり、来訪者移住者が集落メンバーになることがあっただろう。だから、集落が閉鎖的であったと決め込むわけにはいかない。

2021年08月31日

大量移住と農業開始のなかでの集落 南城集落論への旅 B7

前回述べた貝塚時代の集落が11世紀前後に大変動に見舞われる。大量の人口の海外からの移住者があったことが変動の引き金になったであろう。その多くは、奄美や九州など北方からの移動者であったろうが、それ以外からの移動者があった可能性も否定できない。

移住者たちは、先住者たちの集落とは別個の集落を形成したかもしれないし、先住者たちとの交流にとどまらず、混住して集落を形成したかもしれない。場合によっては小競り合い、さらには交戦することがあったかもしれない。移住者たちは、異なる出身地域・移住契機をもつ複数の集団である可能性がある。そして移住集団の相互間に緊張関係があった可能性も否定できない。

移住の中には、先住者に対する「征服」的要素もあったのだろうか。あるいは「植民」的性格もあったのだろうか。かれらは、出身地とのつながりを継続していたのだろうか。

新たな移住者たちは農業生産を行っており、それを引き金にして、沖縄社会は狩猟採集社会から農業社会へと変貌を始めるが、農村社会になりきるには数百年以上をかけたようだ。人口増大に伴い、いくつもの集落が集まって、「沖縄社会」を形成するという一方で、「社会」と集落との分化が鮮明になる。そして、集落が大きく変貌していく。

といっても、この11~13世紀の集落については、わかっていることよりも不明のことに溢れている。当時の集落をつかむためには、次のような基本データを鮮明にすることが求められる。

- ・集落規模
- ・集落住民の出自 一つなのか、混成によるか
- ・集落立地場所に長く継続して居住していたのか。沖縄内のどこからか移住してきたのか。あるいは、沖縄外のどこからか移住してきたのか
- ・集落の継続期間はどれほどか。
- ・農地および水の確保整備のための試行錯誤を経て、数年以上の長期にわたる定着にいたったのだろうか、耕作季節ごとの移住とか、年ごとの移住とかということがあったのだろうか。
- ・集落住民の共同作業として稲作が想定されるが、そのリーダー的役割を果たす人物が存在したのだろうか。その人物が集落指導者としての役割も果たしたのだろうか。
- ・人口増のなかでの集落の食糧源は、自給だけでなく、外からの移入も考えられるが、それがあったのだろうか。もしあったとすれば、相手はどこだったろうか。また、この二つの割合はどうだったろうか。

また、近辺集落から食糧を得ることを含めた交換などの可能性があるのだろうか。あったとすれば、両者はどういう関係だったろうか。たとえば、農業を中心とする集落と採集漁労を中心とする集落との関係。海外交易とかかわる集落とそうでない集落との関係。

それらの異なる集落の併存のなかで、集落間関係はどのようなものだったろうか。

2021年09月06日

農業・交易の本格化のなかでの集落 「外」「上」からの集落統治の開始 南城集落論への旅B8

前回少し触れたが、貝塚時代にしろグスク時代にしろ、海外交易を担う集落のありように注目しないわけにはいかない。貝塚時代には、ヤコウガイやゴホウラガイなどの貝類をめぐる交易があり、「貝の道」といわれるものが存在した。そこで、貝収集、加工、貯蔵、交易などの業務が、ある程度分化していたといわれているが、それが集落ごとの分担になっていたとすれば、それらの異なる集落間関係はどうなっていたのだろうか。

グスク時代になると、交易は貝類に限らず、多様なものに広がり、相手も九州をはじめとする日本本土だけでなく、

中国・朝鮮など多様な地域へと広がっていく。

そこで、交易品の収集・生産、あるいは活用消費などの展開に集落がどのようにかかわっていたのかが重要な焦点になる。交易にかかわる多様な業務に携わる人は、集落の中にも、多様に存在しただろう。と同時に、集落ごとの分担があり、それが集落特性をもたせたりもしただろう。特定の交易品の生産・収集に特性をもつ集落、保管輸送や交易交渉に特性を持つ集落、交易には携わらないで食糧調達を専ら担う集落、などと色々な特性が見られるだろう。

そうなると、集落間関係がどうなっているかが問題になる。集落間の協同・連携、あるいは対立抗争がどう展開していただろうか。そうしたことが大きく問題になってくると、集落間を調整し、業務配分を行い、対立を収め、交易から得る物品や収益の配分などを「仕切る」役目を担う人・勢力に焦点があたっていく。集落内に、そうした役目を取る人が必要になるだけでなく、さらに集落の「外」「上」にいて、調整する役目を果たす人・勢力が必要になる。なかには、異なる言語の間で通訳役目を取る人も必要となるし、交易に不可欠な海運従事者、船の建造所有配置などの従事者が強い役目となる。

時代経過とともに、そうした業務を担う人々が集団移住し、集落を形成しはじめ、勢力として他集落への影響力を強めていく。

こうしたことを背景に、集落指導者だけでなく、集落を越えた地域指導者が現れてくる。なかには、沖縄移住の当初からそうした役割を担う人がいたかもしれない。そして、船舶のみならず大型建造物が必要となり、さらにはグスク造営が進み、グスクにはいくつもの集落を配下に置く按司が登場する。グスクは14世紀に入ると大型していき、地域支配者と呼べるような勢力が生まれてくる。

こうして、統治と集落の関係に焦点が当たり始める。12世紀以前は、「外」「上」からの統治が弱い、ないしはない時期だが、それにしてもそれまで大きな力をもっていた喜界島勢力との関係はどうだったろうか。カムイ焼き・石鍋などの沖縄内流通をめぐる動きがかかわる。また、喜界島とは限らないが、海外勢力の、沖縄内での出張・派遣拠点はどうなっていたのであろうか。

さらに13~14世紀になると、集落を支配する按司が登場し、「外」「上」からの統治が開始する。その統治によって、集落のありようは強く統制されていく。そして、按司勢力が各地に散在する状態から少数に絞られていく過程は、按司間の軍事衝突を伴う。その過程で、軍事集団化する集落も登場してきただろう。農業・交易・軍事とのからみのおかげで集落が存立する時代なのである。

2021年09月12日

移住者たちが持ち込んだ穀類 南城集落論への旅 C1

シリーズ第三回目のCをスタートする。グスク時代から首里王府・薩摩藩による統治の時代のなかの、おおよそ18世紀ごろまでを範囲とする。

14世紀から15世紀前半に大型グスク時代になり、軍事的政治的な統一国家が出現する。15世紀後半には第二尚王朝が誕生し、全沖縄を対象にした「集落統治」が具体化しはじめる。そして、17世紀前半には幕府を後ろ盾にした薩摩藩統治が始まり、それらの支配のもとに首里王府は集落統治を押し進める。

この300年余りの期間の集落については、おぼろげな姿ではあるが、ある程度の像を描くことができなくもない。そのあたりについては、現時点では仲松弥秀の先駆的研究が大きな手掛かりになる。そこで、主として仲松の研究が示唆するものをヒントにしつつ、今後の研究課題を提示していくことにしよう。

前回シリーズで述べたように、沖縄外から多くの多様な移住者たちがそれまでにない「文化」を持ち込む。その象徴的存在は穀類である。それにかかわって、仲松は次のように書く。

「そもそも琉球弧の島々の作物たる稲といい、麦・粟といい、そのいずれも元から島々にあったものではなく、外部の海の彼方からもたらされたものである。伝説によれば、神的なアマミキヨ達をもたらしたものの、そのあるものは鶴が持ち運んで来たなどと言われている。」仲松弥秀『うるま島の古層』梶社1993年p108

穀類導入は農業生産スタートとして、その後の沖縄のありように根底的な変化をもたらしたもので、それが生産にかかわる信仰を生み出し、保持されていく。それらを持ち込んだ移住者について、仲松は次のようなイメージで語っている。

「そもそも沖縄において豪族化した人物のそのほとんどは、本土から海を渡り、島々を経て渡来した者たちで、彼らは商業貿易に他に勝った関心と才能を持っていたものと思われる人物たちであった。しかし彼らはごく近親な者を引きつけて来たぐらいで、武力でもって島人を圧伏することは不可能であった。地域住民からの信頼を得ることによって勢力を増し、自己目的の貿易掌握に近づくことができたのである。」同前p100

「本土と琉球間には、人間の往来や居住になんら制限区別がなく、自由に行き来できた。したがって本土から新しくもたらされた文化も自由に伝わったということにあります。」同前p270

これらの推測はかなりの的を射ていると私も思うが、残念ながら確としたデータは見つけにくい。今後の調査研究に期待したい。

2021年09月19日

外来者と集落 南城集落論への旅 C2

前回記事で述べた海外からの移住者たちについて、仲松はつぎのように語る。

「おそらく彼らは本土における海岸沿いの村の出自であったであろうことから、すでに故郷において海の彼方に憧れ、はるかな海の彼方からの幸福に期待し、ニライスク・カナイスクの神に対する信仰を持って渡来してきたものと思われる。このニライスク・カナイスク信仰は沖縄住民のそれと一致していた。按司として尊敬・信頼された海の彼方への憧憬者は、(中略) 彼ら渡来者の中から、もっとも貿易に都合の良い場所に住居を構えた者が、しだいに優位に立つようになった。」同前p 101

渡来者がニライカナイ信仰を持っていたとは、興味津々の指摘であり、その根拠を知りたくなる。「沖縄住民のそれと一致していた」と書かれるが、そのあたりもつっこんだ調査研究が進むことを期待したい。それにかかわって、次のような記述もある。

「新しい文化・文物が、海の彼方からもたらされてくることに対する感謝と尊敬は、おなじく海からわたってくる外来者に対しても払われるであろう。もちろん、このような外来者は、沖縄の村落社会にプラスになる人物でなければならないことは当然である。これら外来者の中には、人格・技能ともに優れた人物もいたであろう。このような人物が多く村落共同体から尊敬され、支持されて、ついには豪族にのし上がったのではないかと考えられる。」同前p 250

外来者と先住者との関係を、このように肯定的に描くことの根拠を知りたいものだ。

関連していうと、14~15世紀の大型グスク時代での戦争状態を生み出した武力はどこからどのように持ち込まれたのだろうか。武装勢力と沖縄外勢力とのつながりはどうなっていたのだろうか。さらに、それ以前には戦争状態はなかったのだろうか。この時期は不明なことが多いだけにより一層関心を持ちたくなることが多い。

また、土地によって区切られ、農業生産を軸に土地との結びつきが決定的である集団というものに、各集落がなったのはいつの時期だろうか。農業生産以外の何らかの共有するものをもって結びつきをなす集落があったのだろうか。たとえば交易集団、あるいは農業外の生業にかかわる集落ないしは集団というものが、どのように存在していたのだろうか。その点では、前シリーズで紹介した荒木田の問いが意味をなす。当該集落を統率する統治者とのかかわりのなかで集落の存否・移動がなされたのだろうか。仲松のいうように、渡来者は少数のままで、先住している集落を従えたのだろうか。

踏み込めば踏み込むほど、知りたい問題が増えてくるのが、この時代の研究の特性なのだろう。

2021年09月25日

太陰暦の前の暦 南城集落論への旅C3

海外からの文化移入にかかわってもう一つ、暦に注目したい。

旧八月十日柴指しの日について、仲松は次のように述べる。

「南島に見られる柴指しの日は、古代南島における正月元日であったとする諸説があるが、筆者も同じく、太陰暦採用以前の南島における年変わり日、すなわち元日であったとおもっている。(中略) 各部落には日取りなる暦専門家がいって吉日を決めていた。そして部落行事は、各村落ともその日取りの判定によって行われたのである。」仲松弥秀『うる

ま島の古暦』梶社1993年p47

このように、太陰暦以前の暦が存在したとすれば、太陰暦が持ち込まれ採用され普及したのはいつだろうか。それについては、次の記述が一つの参考になる。

「『球陽』の尚徳王五年（一四六五年）の項に「慶賀の使臣、閩に在りて始めて（ママ）造暦を学ぶ（本国の造暦此れよりして始まる）」とある。以後、度々、中国に臣を派遣して造暦を学ばせている。」『沖縄県史各論編第九卷民俗』沖縄県教育委員会2020年p202

これは王府としての行為なのであるが、それ以外の形で、それ以前に太陰暦が伝わっていたことが想像できなくもない。王府主導で太陰暦が導入普及されたのかどうかも検討が必要だろう。その際、それ以前の暦はどう扱われたのだろうか。両者の併存ということがあったのだろうか。

とくに農事暦としてはどうなのだろうか。

「農作業の始まりに一年の始まりを合わせ、冬作にとりかかる秋に新年を迎える古い暦は、八重山の節祭などが典型的だが、九州南部以南の各地の祭礼の伝承の中に生きている。」同前p77

その古い暦は、柴指しや節祭などの形で長く継承されてきたといえるのだろうか。また、旧暦が農事暦としての有効性があったとされるが、それ以前の古い暦もそう見られてきただろうか、両者の農事暦として違いはどんなものだろうか。

また、仲松叙述にある集落ごとに存在したという日取りという役割の人はどんなものだったろうか。後の「時、トキ」とつながるかつながらないか、も興味を持たれる。

そして、太陽暦は、19世紀後半に持ち込まれただろうが、太陽暦が浸透し徐々に社会生活の全面を覆っていくなかでも旧正月や盆のように、太陰暦がしっかりと残って、両者併存状況が見られる。太陰暦の行く末は、太陰暦以前の古い暦の行く末もからんで、興味のもたれることである。さらに将来太陽暦はどのような行く末をたどるのだろうか。

集落レベルを含めて人々の生活に密着した暦だけに、興味をもたれる。

2021年10月01日

マキ 南城集落論への旅C4

1500年頃以降の首里王朝統治下における集落について見ていくことにしよう。

集落研究に触れる以前の私は、血縁集団→地縁集団→社会集団という流れで、集落史を捉える先入観をもっていたようだ。その流れを越えて考えるきっかけを与えたのは、これまた仲松諸論である。

「沖縄の古代について考えられることは、血縁、非血縁という意識よりも、むしろ生活集団として仲間意識が優先していたのではないかと思われる。そして、マキなる名称も、たとえその実体が血縁集団をなしていたとしても、それなるが故に名付けられたと考えるよりも、生活共同体集団という仲間意識をとらえての名称であろうと考えられる。」『うるま島の古暦』p175

「マキ名なるものは、血縁集団の当否によるものではなく、別の観点からの名称、それはおそらく生活共同体集落に

対しての名称であると考えないわけにはいかない。」同前p 176

「辺土名の事例を考慮して、ここの、「マキとは、同一御嶽の神の氏子集団並びにその居住生活地」と改めねばなるまい。」同前p 179

なるほどと思わせる記述である。そのマキの成立時期について、仲松は次のように述べる。

「沖縄の村にマキ名が発生したのは太古からではなく、ある時代からではないかと思われることである。おそらく第二尚王統の尚清、とくに尚元（1557年即位）前後に、大和方面から伝来されたものではないかと思われる。というのは、トン（殿）、神アシアゲ、マキヨなどの語が見出されるのがおもしろ第三巻（1623年編）からであることである。」同前p 181

つまり、単一王朝による集落レベルでの統治の展開によって形成された、というのである。

これらの仲松の記述は、先に書いた私の先入観を打ち砕いてしまった。

2021年10月07日

マキとトン（殿）、神アサギ 南城集落論への旅 C5

集落にとって、祭祀は重要な位置を占めるが、マキと祭祀について仲松は次のように述べる。

「マキ名をもっている村落には、必ずといってよいほど、その守護神を祀った御嶽がある。もし、現在その御嶽がないマキ村落があるとするなら、いつのまにかその御嶽を忘却しているのだと言うことができる。忘却の原因は二つほど考えられる。その一は、通常村の祭祀がトン（殿）、神アサギで行われることから、村と御嶽との距離が遠いところ、もしくは近くても険阻な地形の関係上行きにくいところの村は、しだいに御嶽との直接的関係が失われていき、御嶽の所在を忘れてしまったというケースである。その二としては、殿、神アサギが御嶽中に設けられている場合である。先にのべたように、祭祀が殿、神アサギで行なわれるがために、その殿、神アサギなるものだけに心を奪われて、その場所が御嶽であることを忘れてしまったということになる。」『うるま島の古層』p 183

私が住む中山は、トンが今日まで長く引き継がれてきている。対照的に御嶽という名を聴くことは、現在ではほぼない。年配の方に聞くと、トンのあたりが御嶽だという。仲松のいう「その二」そのものに相当すると考えられる。仲松は、トン・神アサギとマキとの関係について、次のように述べる。

「殿、もしくは神アサギとマキとが確実に対応しているということが半明するであろう。すなわち一殿一マキ、一神アサギ一マキということになる。」同前p 185

「殿、神アサギ発生時とマキ発生時とは、ほとんど同時代と考えることができるはずである。」同前p 186

「複合マキ村形成過程において、根人、根神などを一人にしぼりなおしてある。かりに三マキ統合村の場合においては、三人の根神出自家の中から一家にしぼり、根人も同様にする。選にもれたマキ宗家からも重要な神職を出すようにする。その選定方法も、Aマキから根神、Bマキからは根人、Cマキからは海セドと各マキの宗家に割り当てたり、とくに勢力のあったマキから根神、根人も選定したり、村によって相違はあるが、とにかく一人にしぼりなおしてある

ことが各村とも共通している。」同前p 196

「王府は、(中略) 近接している二、三のマキヨやハカは、これを統合して一つの「村」に仕上げた。この時、新しい村共同体を成立させるべく、ノロと根人を一つにし、従来のマキヨノロを根神として、マキヨ祭祀を統合した村ノロによる村落祭祀を行うようにした。

ここにおいて自然発生的に形成された従来のシマ共同体は、外部からの圧力によって大きく変質せざるを得なくなった。村落生活のあらゆる面に影響をおよぼしていた村落神事は、しだいに力を失い、魂を失った形式的、儀礼的なものに傾斜していくようになった。それは、かつての祭政一致が、祭と政とに分割されてしまったからである。」同前p 256

2021年10月13日

拝所と集落祭祀 御嶽 南城集落論への旅 C6

前回の仲松の引用をもとに、私が住む中山について考えてみよう。

中山と隣字の玉城との関係は、兄弟関係のようだと語られるし、一八世紀のある時期以前は、主として統治にかかわる記録上で、中山は玉城に含まれて扱われていた。私の推測では、中山と玉城は別々のマキであり、「複合マキ」を形成した(形成させられた)のだろう。そして、一八世紀のいつかに、おそらく王府の指示ないしは承認を得て、集落としても分離したのであろう。ちなみに玉城ノロは、双方を含む地域を管轄している。

仲松は、ノロについてつぎのように述べる。

「ノロという神官が、その村落自体からおのずから生まれたものではなく、外部の力、ここでは首里王府の政策によって生まれた者であると考えることが可能であろう。」仲松弥秀『神と村』梶社1990年p 33

こうした集落祭祀の由来を考えるうえで、御嶽の由来についての『沖縄県史各論編第九巻民俗』沖縄県教育委員会2020年の以下の記述(伊從勉執筆担当箇所)は有用である。

「嶽・殿・「神アシャゲ」は本来『琉球国由来記』(中略)が定義する祭祀用語である。当時の祭祀種別に応じた儀礼の場の命名であることがしばしば忘れられ、原始社会から永続する祭祀場所として論じられる傾向が否めない。」同書p 375

「御嶽に単一の起源を求めることに無理があったのである。琉球国の統一と共に全土で嶽を選定した時点で、多様な拝所が地方毎にすでにあり、それらを嶽・殿・神アサギ・火神に呼び分け、三段階の祭祀レベルに割り振った。墓所・屋敷跡・グスク拝所など来歴は多様であっておかしくはない。」同書p 388

ともすると、御嶽・グスクを含め拝所は「昔からあり、原始社会から永続する」ものと思込みがちである。だが。この指摘の通り、歴史のある時点につくられたものであり、それらには統治者の関与が深いことが多いのだ。

2021年10月19日

王府の収入 貿易と集落からの収奪 南城集落論への旅 C7

16世紀以前の首里王府の収入面を中心に、仲松は王府と集落との関係を次のように述べる。

「王が発生し、その権力が強くなるにつれて徐々に政治力が頭をもたげてきて、ついには祭政一致社会が政祭一致社会へと傾斜していく。(中略) 豪族の争いは貿易独占を目指してのものであり、これを実現したのが首里王であった。このようなことから王発生後も長い期間にわたって、村落に対して王権を強く侵入させる必要がなかったことから、すくなくとも村落社会においては長期間にわたって祭政一致社会が続いたと思える。」『神と村』p24

「支配階級の人口は案外少なかったと思えるし、彼らの要する高級ゼイタク品も中国、大和との貿易利潤によって確保可能であったと思われることから、マキヨからの収奪は、米、麦その他の日常生活物資に限られ、それも民衆生活を圧迫するほどではなかったであろう。」『うるま島の古層』p253

「琉球政権は本土諸侯と異なり、貿易政権という特異な性格をもってきました。いわば貿易そのものに生命を託していると思います。貿易を順調に行うためには、場合によっては日本から離脱してもよいと琉球政権は考えていたのではないかと思います。一方、尚清後半ごろからの南方貿易の不振、それに日本本土内の動乱による本土貿易の不振も高じてきました。」同前p308

薩摩支配に入ると、首里王府は否応なく、貿易収入よりも集落からの収奪への依存を高めていく。そのために、集落統治の施策を直接的に次々と打ち出すようになる。仲松は次のように述べる。

「散在しているこれらの血縁的小集落に対して、首里王国が島津配下に帰した際に行われた慶長検地において、離れているものはそのままの姿で、各々近接しているものは、その二、三を併合せしめて、従来よりも大きい村落に仕上げる政策を推進させてきたようである。」『神と村』p227

南城市域の集落で、一八世紀に統合・移動・分離などを経験するものが多いが、その多くは、そうした事例とってよいだろう。

2021年10月25日

家と家内(チネー) 南城集落論への旅 C8

ここで、視点を変えて、「家」に焦点を当てて考えよう。集落を構成するものとして、「家」を想定することが多いが、その「家」も、今日のわれわれが推理しがちな「系図に記されるような家」と同様のものと安易には言えない。その点にかかわっても、仲松は、次のように描く。

「火の神の性格は少なくとも「家」ではなく、たんなる個々の「家内(チネー)」の守り神であったと言えるのではなからうか。それが、しだいに「家」の守り神的な性格をもつようにいへはしないだろうか。(中略) 古代沖縄では「家」というものはほとんどなく、たんなる「家内」のみがあったということになりそうである。」『うるま島の古層』p200-1

「葬送後短い期間のうちに祭祀を行わなくなってしまい、墓参もなく、洗骨習俗もなく、位牌もなかったというのは、ひとり津堅、池間島のみでなく、古代沖縄全般にわたっての習俗ではなかつたろうかと想像する。」p201

「前代のもは一応捨てたということ、すなわち一代限りの「家内」はあっても「家」なるものはなかったと考えざるをえない。」同前p 202

「小川徹も沖縄の田舎における「家」なるものの出現は、そう古いとは考えていないようであるが、筆者もこれに賛意を表するものである。」同前p 203

「村の草分者の子孫が代々祭祀の中心となる義務責任を負うようになり、ここにその村の中で最初に、このような村の神事管掌者、とくに根人、根神の出る「家」なるものが産まれ出たと考えられる。ところで、他の村人は「家内」しかなかったことから、首長の「家的」に、もしくは「家」を村の中核として、一つにまとまった「共同体の家」をなしていたと考えられる。」同前p 203

明治民法で定めた家父長制システムは、明治大正期の沖縄で強く浸透した門中システムと結び合っ、て、「家」観念を沖縄の人々の中に浸透させていく。その「家」観念は、近世以前では土族層や富農層を除けば、人々に浸透していたわけではなかったのだ。

2021年10月31日

(続) 家と家内(チネー) 南城集落論への旅C9

前回紹介した仲松のとらえ方は特異なものではなく有力説であることは、それほど知られているわけではない。私も、つい最近までそうだった。これらの仲松の見解を支持するものとして、次のような記述がある。

「祭祀の慣習やそれを実行する条件が整っていなかった時期には、『家内』はあっても『家』なるものは無かったと考えざるをえない。仲松の見解を踏まえて、ここでは、家族のまとまりとしてのヤーとチネーのあり方を、それぞれが形成された歴史的条件を考慮しながら捉えたい。」『沖縄県史各論編第九巻民俗』沖縄県教育委員会2020年p 220
執筆者玉城毅

「小川徹は、一七七五年(乾隆四〇)から一七八八年(乾隆五三)の間に作成されたと推定される民俗資料「こひり引請日帳」を検討し、そこに記された系譜関係が現在とのつながりをほとんど辿れないことから、当時の「家内」が「かなり流動的な非永続的なものであった」と推測している。」同前p 221～2

「赤嶺(政信)によると、戦前の久高島では、「耕作地が家族員数(原則として十六歳以上の男子)に応じて配分され、かつ一定年齢に達するとその用益権がムラに返却された」という。このような制度の下では、「耕作地は家に付随し代々相続されたりあるいは分家に分与されたりする家産の性格を持ちえない」ことになる。

小川や赤嶺が示した状況は、過去において「一代限りのチネー」はあっても「系譜的家」はなかったという仲松の見解と合致している。これと似た状況は、沖縄島北部や久高島以外にも多くの農村にあったとみてよい。なぜならば、近世から近代初期にかけて沖縄県下の農村は地割制が敷かれていたからである。地割制の村が、ヤー=系譜的家ではなくチネー=一代限りの家で構成されていたことは、近世の地方史料に「家」ではなく「家内」の語が頻出することにも表れている。」同前p 222

これらの記述は古いことを扱っているわけではない。さかのぼるとしても、土族の場合一八世紀、一般農民にとっては二〇世紀に入る頃までのことである。家父長制としての家制度、そして門中制度を整備強化しようとする動きは旧土

族層に限定されず、一九世紀後半から二〇世紀には農民も巻き込んでいく。しかし、明治民法が戦後の民法に代わり、家父長色は薄まった。だが、代々長男が継いでいくという「家観念」は、戦前の日本政府の統治が強力であったためか、深く浸透していく。そうした観念を広げるうえで、ユタの「判じ」がしばしば指摘されるが、明治以降の学校教育も大きな役割を果たしたといえないだろうか。その点での検討が必要だろう。

新民法に変わった後も、男尊女卑などの家父長観念が強く残る。夫から妻への暴力などのDVは、その事例であることが圧倒的に多い。

こうした歴史変化は、婚姻対象の選択決定に典型的に見られる。モアシビの場などを活用して若者たち自ら決定することは、大正期まで広く見られたことである。昭和期に入ると、親決め婚、見合い婚などが広がるが、戦後、若者たちによる選択決定が再び広がり、いまではそれがごく普通のことである。

だから、家父長原理にもとづく「家の形成継承」が「普通」であったのは、歴史的に見ると百年間もあったかどうか、微妙なところだ。ところが、人々の多くは、家父長が古くから続く「普通」の形だと思い込まされている。

2021年11月13日

家と墓 ハラ、ヒキ 南城集落論への旅C10

前回まで述べてきた家内から家への変化は、墓によく表れる。仲松は次のように書く。

「村共同体の祭祀、すなわち御嶽祭祀を管掌する者の「家内」から最初の「家」が発生する。祭祀管掌者は当然村の中心的人物となる。後世の地方政治にあずかる者や蓄財者も村の中心的人物となる。これらの者が中心となって後世共同墓が造られ、そしてそれらが共同祭祀の世襲的管掌者となる。そうなれば村の祭祀管掌者は系譜的自己祖先の眠る共同墓の祭祀管掌者も兼ねるようになる。また、他の共同墓をつくった中心人物も彼らの祖先祭祀の義務・栄誉の世襲者として、ここに先祖から引き継ぎ子孫へ引継ぐ「家」が発生する。(中略)

村共同墓から集団共同墓へ、ついで家墓への変化の過程について、その祭祀の主掌者の「家」がしだいに簇生してきた。」
「うるまの島の古層」p204

「古代——場所によって時代の相違があると思うが——村落には、たんに村共同体としての葬所のみがあり、その祭祀も、神事としてその共同体の立場から行われてきた。いわば昇華された祖霊神、御嶽の神としての祭祀であった。(中略) 村の墓は村の大小や事情によって幾組かをつくり、組の有力者を中心として組墓がつくられていった。この墓をムエーバカ(模合墓)あるいはズリバカ(寄墓)、ユレーバカ(寄合墓)といった。組は必ずしも親類だけで構成されたとは言えない。村によって異なるが、地域区分にしたところ、あるいは某有力者を中心としたその親類、知人による区分の仕方もとられた。また数個のマキが併合して形成された村においては、それぞれのマキ集団に区分された場合もあったであろう。そのいずれも区分法にしても、その組別に一つの墓を使用するようになる。そのような集団共有墓に所属した人々がハラ、ヒキと言われるものとなったと考える。このような組墓の祭祀は墓をつくる際の中心人物が主管するようになってきたのであるが、年が経るにつれていつしか先祖を同じくしている集団の観念が生じ、そして祭祀中心人物の家が、この集団のモーターヤー(本家)となってくる。」同前p207

墓との関りが深いハラ、ヒキと門中との関係について、仲松は次のように書く。

「ハラ、ヒキ集団も時代の経過につれて大集団化して来る。それにつれて墓は狭小化してきて、とうてい一つの墓で

は収容しきれなくなる。(中略) 多くの場合は近い親類同士か、親しい知人同士が組をつくって分離墓をつくるようになる。そして、このハラ、ヒキの按司墓から分離した墓集団が、数代経った今日においては、婚姻、養子縁組の過程を経て門中というものになっている。そして「墓門中」の本家と称せられるものも今では実質上の血縁の本家とほとんど一致するようになっている。」同前p 208

(「近々百五十年前後の頃」)「この時期になって「家内」といわれるものから、系譜的「家」なるものが一般化するようになり、祖先探しに留意することからユタが盛行するようになる。」同前p 209

「村の宗家に対しては、その家が村の宗家であるということは知っていても、門中制度の波及している村落では、村の宗家として崇敬されていると見るよりも、むしろ村を構成している有力な門中の宗家としての意で崇敬されているというふうに変化してきている。」『神と村』p 41

今日の農村において門中墓といわれるものが広く見られるが、それは「〇〇腹」という言葉とともに呼ばれる。門中墓となっても、仲松がいうように、いくつかの門中の共用などがあるようである。それは長く続いてきたハラなどを元に、近年になって門中が作られたことを示すものだろう。

2021年11月30日

グスク時代の農業社会化をめぐる問題 安里進『グスク・共同体・村』 南城論への旅D1

連載Dをスタートする。ここからは、タイトル「南城集落論への旅」を縮めて「南城論への旅」とする。当初予定は、連載Cを引き継いで、近世期の集落の展開を考える予定だった。しかし、安里進『グスク・共同体・村』（榕樹書林1998年）に出会い、近世以前の集落についての貴重な研究成果が満載であることに気付いた。また、同書には南城市域の集落に触れるところが多い。

そこで、まずは、同書から本連載のヒントになることを抜き書きし、コメントする作業を進めたい。

☆印以下が、私のコメント

「貝塚時代後期の遺跡（集落）は、漁労に適した珊瑚礁が発達した礁湖を前面に控えた海浜や台地上に立地し、しかも群をなして分布している。これは当時の社会が、漁労を軸に結合していたことを示している。これに対し十三～十五世紀のグスク時代の遺跡（集落）は、水田が展開した谷底低地・海岸低地の水系や畑作が行われた一連の石灰岩台地という農耕地を単位に遺跡群を形成しており、農業生産を軸に結合した社会に転化したことをよく物語っている。

このような農業社会化の波は先島にも及んでおり、十三世紀には、麦・粟畑作+水稲作+牛の飼育という複合農業を基礎にした琉球独自の農業文化が奄美から八重山に成立していたことがわかる。この農業社会化と先島への普及の担い手になったのは、石鍋・亀焼を流通させた商人たちだと考えられるが、かれらが具体的にどのようにして農業技術を普及させていったのか、そもそも彼ら商人たちがどこからやってきたのかはまだわからない。」 p26-7

☆ 漁労中心から農業中心に移るわけだが、グスク時代以降における漁労の位置・担い手はどうだったろうか。歴史書などでは、漁労について描くことは少ない。といっても、漁労があった事は確かであろうが、食糧全体のなかでの比率はどれくらいだったのだろうか。

☆ 谷底低地・海岸低地での水田、石灰岩台地での畑作の並行において、同一集団が双方ともおこなっていたのか、両者を別々の集団が担っていたのか、それともバリエーションがあったのか。別々だとしたら、両者間の関係や両者の交換・連携はどうなっていたのだろうか。

☆ 「農業社会化と先島への普及の担い手」は、「商人」ということだが、彼らが移動を止めて移住者となったことは考えられないだろうか。商人として来沖したが、その一部は移住者になったことも考えられないだろうか。とくに、九州・奄美あたりからの動きに注目したい。また、二〇〇〇年前後から発掘研究が進んだ喜界島勢力との関係はいかがだろうか。

2021年12月05日

グスク時代の集落間つながり 南城論への旅D2

一四～五世紀ころの集落跡である伊佐前原遺跡について 「高倉が集落から離れた場所に建てられていることは、当時の社会が、穀物などの農業生産物を集落ごとに穀倉に保管していたことを示している。このことは、各集落が農業生産の協業の単位であることを意味するとともに、主な農業生産物が集落全体の共有物とみなされ、個人の所有が未発達

な原始的な平等原理の社会だったことをうかがわせる。」 p 3 8

☆ かなり大胆な推理だが、当たっていきそうに感じられる。だが、他の可能性を排除しないだろう。たとえば、集落統率者ないしは支配者が、穀倉を建てさせた可能性はないだろうか。外部からの移住者がいて支配者的かかわりをして、先住者たちにそうさせた可能性はいかがだろうか。

「グスク時代には、農業生産の発展とともに人口が増大し、次々と新たな農業集落が生まれていた。これらの農業集落にとって鉄器は、小型鎌や、木製農具を製作する刀子などの工具、鉄斧など生産を支えるために不可欠であった。」 p 5 1

「十五～十六世紀にかけて集落はジャーガル地帯の海岸低地や谷底低地地帯で急速に増加していったことがうかがえる。グスク時代の開始期に石灰岩台地を中心に集落が激増したのと同じように、十五、六世紀には海岸低地や谷底低地地帯で集落が急増していったのである。第一尚氏は、こうした集落＝人口急増、したがってその背後にある農業生産力の発展を背景に急速に力を蓄えたにちがいない。この佐敷の農業生産力の発展の秘密は、水稻二期作だったと考えられる。」 p 5 8－9

「小規模な労働力で生産力も低いグスク時代の集落が、近世の村のように自給自足で来ていたとは考えられない。」 p 7 4

☆ 近世期集落との違いの指摘は、大いに注目される。流動的・開放的集落にならざるをえないグスク時代集落の特性が理解しやすい。こうした集落間の連携・協同を促進管理する機能の存在が示唆される。

2021年12月10日

(続) グスク時代の集落間のつながり 南城論への旅 D 3

「沖縄の厳しい自然のもとで小さな集落が生きて行くためには、他の集落との相互扶助をとることが不可欠である。田畑の開発にさいしても他の集落からの労働力の提供が当然必要であろうし、日頃の農業経営でも、水利の問題をめぐって近隣の集落との調整が常に必要になる。」 p 7 4

(鉄製農具の取得などのための交易について)「交易は、小集落だけではとうてい不可能で、他の集落との共同事業が前提である。そして、急激に人口が増大して分村につぐ分村を繰り返しているグスク時代では、おのずと集落の間に親集落・子集落・孫集落という集落の系譜関係が生まれる。グスク時代の集落はそうした集落間の系譜関係を軸に、周辺集落間で農業経営や海外交易などの共同体を組織していたと考えられる。」 p 7 4

☆ 以前から住んでいた人々が、農業を受容して集落を形成し、集落の連携のなかで共同体を作り、その上に統治者さらには支配層が生まれてきたという「内発的」ストーリーといえよう。

このほかに、移住者をからめてのストーリーもありうるだろう。農業を持つ移住者集団が、先住者を吸収しつつ、農地開発をしていくなかで、農地との関係で小集落を形成し、集落連合をも作っていく。その過程は、少数の支配者(指導者)の調整指導管理のもとに進行していく。鉄の移入も、交易だけでなく、移住者集団が持ち込んだ点も含んで考え

る必要がある。または、移住者集団と交易商人たちとの結合関係が重要になる。

この二つのストーリーの間には、いくつかのバリエーションが存在する。実際は、これらのバリエーションのうちのどれかだろう。

按司にも、移住者出自と先住者出自があったかもしれない。おそらく移住者がメジャーではなかったろうか。11～12世紀ごろまでの先行移住者と、13～14世紀の後行移住者間の闘いということも考えられよう。

戦闘がどういうグループ間で展開したかが、それを解く鍵になろう。一四、一五世紀における戦闘については大規模で、ときには覇権をめぐるもので、いろいろと書かれ、伝承があるが、それ以前のは少ない。戦闘規模も小さなもので、集落の存否や立地、あるいは農地や水利をめぐるもので、おそらく数十人以下のもので、集落間ないしは集落外部からの攻撃に集落が応戦するというレベルのものだったろう。

2021年12月15日

地域共同体 南城論への旅D4

☆ 本書は、小集落が結び合った「地域共同体」というものの存在を推理する。「地域共同体」というのは、これまでの私にはなじみがなかったが、興味が持たれる言葉だ。大里稲福の上御願遺跡の例を挙げて、次のように書く。

「上御願の起源が十三世紀をさかのぼるとともに、集落と聖域が一体であったことを示している。(中略) 上御願遺跡のような集落内部に聖域を取り込んだグスク時代の集落像は一般化してよいのではないだろうか。」 p 86

「グスク時代の経済的完結体は、上御願集団のような小集落を構成単位として、それらが水田水系などを軸に、地域的に結合したより大きな地域共同体ととらえ、これを農業共同体だと考えている。」 p 87

「この図に限っていえば、階級関係は、十四世紀頃に形成されはじめ、十五世紀頃には飛躍的に進展し、そして十六世紀頃には固定的となったという見通しが得られる。」 p 91

☆ こうしたことにかかわって、新たに進出してきた移住者と先住者との関係を視野に入れると、どうなるだろうか。

「グスク時代にはこうした防御集落や防御施設がひろく存在していた。つまり、それだけ戦争が広域化・恒常化していたことを物語っている。」 p 40

「グスク時代の遺跡の分布をみると、遺跡は水田可耕地である一連の谷底低地や海岸低地を単位に遺跡群を形成していることが指摘できる。」 p 160-1

「グスク時代の遺跡群に反映されたまとまりが、後に間切として行政的に把握された地域の母体となったのである。」 p 161

「沖縄本島南半部では、水系単位に十余りの遺跡が一まとまりの明瞭な遺跡群を形成している。例えば、西原群、南風原群、大里群、知念群、玉城群、具志頭群、喜屋武群、豊見城群、真和志群などがある。(中略)一五世紀以前にはこの間切ごとに按司が城塞的グスクを築いて割拠していたといわれている。そのような間切は、グスク時代十三、四世紀の遺跡群を母胎にして生まれてきた。」 p 76

☆ 集落を越えたつながりが、「地域共同体」を作り、按司などの指導者ないしは支配勢力の形成にかかわり、さらに後の間切などの統治のための組織になっていくことを示している。

2021年12月20日

(続) 地域共同体 南城論への旅 D5

☆ 地域共同体について、さらに、土器の成分分析にもとづく土器胎土圏にかかわって、次のように述べる。

「島尻東部では、土器胎土圏と、これに先行する沖縄貝塚時代後期の遺跡群とはその領域が対応しているので、また年代的連続性から言っても、土器胎土圏とは、貝塚後期の遺跡群の系譜を引きつつ拡大した同祖同族的関係だと考えられる。」 p 162

「土器胎土組成圏とは、水系単位の集落群を中核に、周辺の単独集落をも統合した地域集団として把握することができる。そしてこの統合原理は、水系単位の集落群に反映された地縁的結合を中核にし、また土器胎土の共通性に反映された同祖同族的な原理との二重の原理で結合していたと推測できるのである。

このような地域集団は、水系単位の集落群を形成し、また、土器胎土の組成が類似しているという点において、土器胎土圏の中でもとくに緊密なおそらく日常的な人間交流が行われていた単位であり、このような地域集団こそ近世の村共同体に対比しうる共同体だと考える。そこで、この地域集団を「地域共同体」と呼ぶことにしたい。」 p 162

「沖縄本島南部の地域共同体は、近世の南風原間切、大里・佐敷間切、知念間切、玉城間切、具志頭間切に対応し、南風原・大里・佐敷が胎土B類圏に属し、玉城・具志頭は胎土C類圏に含まれる。このような、地域共同体をいくつか統合したまとまりが、すなわち寨官(世の主)が支配する寨であり、これが、独自の武力を持つ政治的統一体であるとともに、独自に海外交易を行う主体であり、したがって経済的完結体として理解されるものである。」 p 179~180

☆ 胎土B類圏と胎土C類圏とを分け隔てるものは何だろうか。おそらく地形の凹凸に加えて、森林におおわれた丘陵部の連続のように思われる。当時の森林原野と耕地との比率は、現在とは大きく異なり、森林原野が高くて、それが自然境界の役割を果たしたという推理である。水系の中心をなす河川について見ると、雄樋川は玉城と具志頭をつなぐが、上流部では大里をかすめている。大里と南風原では、水系を共通にすることが多いが、佐敷と南風原・大里では水系が全く異なる。

近世期の間切間の集落単位の境界移動が、大里と南風原間に、佐敷と大里間にしばしば行われたことを理解するうえで、同じ胎土B類圏にあったことがヒントになるかもしれない。このあたりについても、興味を持たれる。

☆ こうした古琉球的村の特質について、次の三つをあげ、近世村との違いを述べる。

「近世的村の特徴である単一集落・完結的な村域と耕地分布に対比できる古琉球的村の特徴として、①複数の集落・屋敷から構成された散居的村、②散居的村に対応して村の耕地分布が分散し他村の耕地と複雑に入り組んでいる状況であり、③そこから他村とも農業経営上で緊密にあるいは緩やかに結合して、地域共同体的関係を結んでいたことなどが指摘できる。」 p 193

☆ このあたりについては、糸数字誌編集委員会『糸数字誌』（糸数公民館二〇一二年刊）の糸数集落内のいくつかの集落の併存についての次のような記述が参考になる。

「一三二六年頃、糸数城を中心にして城下村として、サナン、クールク、イチカジ、メーバル、シキナ、アダングチ、ヤカンなどマキョと呼ばれる血縁団体の小集落全体で糸数の部落を形成していた。」 p 9（この後、さらに集落移動や結合などについて示唆に富む記述が続く）

2021年12月25日

按司 海外交易従事者 南城論への旅 D6

☆ 諸集落の統治者となる按司と、当時農業と並んで主要産業であった海外交易とをかかわらせてグスク時代の集落について次のように記述される。

「十三、四世紀に城塞的グスクを築き海外交易を行った各地の按司は、その地域の農業社会の首長である。また、一五、六世紀にアジア諸国と交易を展開し繁栄していた大交易時代の琉球王国の支配下にも多くの農業集落があった。つまり、琉球は農業社会を基礎にしてその上層部が海外交易を展開している社会だったといえる。」 p 28

「十五世紀の大型グスクも、二、三の間切単位に分布しているので、大型グスクの城主は、防御集落や小型グスクを含んだ地域を支配していた上級の支配者といえる。」 p 49

「海外交易を行うには、交換物資が必要だが、その原資は配下の集落から調達した生産物だと考えられる。しかし、これを交換して入手した輸入陶磁器や鉄器をはじめとする舶来の品々は、寨官の独占物ではなく、その大部分が末端の集落にまで分配されていた。」 p 52

☆ 海外交易に従事した集団は、どういう位置にあったか。かれらが生活する集落はどこにあったか。単独で集落を形成したのか。グスク内ないしはグスク近くの集落に住んだか。あるいは、各農業集落のなかに属していたのか。かれらのなかで、中国出自、あるいは日本本土出自の人々はどのくらいの比率を占めていたのだろうか。

また、海外交易ならびに交換物資の生産に従事した人々は、「上層部」限定できるのだろうか。また、従事者は全人口のなかで、どのくらいの比率をしめていたのだろうか。

これらが明らかにされることを期待したい。

2021年12月30日

寨官 王―按司体制 南城論への旅D7

☆ 15～16世紀の統治者（支配者）の概況について、安里進『グスク・共同体・村』は次のように述べる。

「大型グスク築城の移動は、寨官という寨の首長権が特定集団に世襲化されずに、寨を構成する集落首長の間で持ち回りされたことを意味していると思う。」 p 99

「中山・山南両王国では、王権に対抗する権力として寨官らが構成する「寨官会議」が存在したことを指摘して、この寨官会議が王権を承認し、ときには王位篡奪者を倒して王を共立するなど王権に優越した権力を持っていたと考えたのである。」 101

「山南の王権は、山南を構成する二つの寨の間で交替される予定だったと考えるのである。（中略）寨官の地位そのものがまだ世襲化されていないのであれば、その連合政権である小王国の王権も世襲化されないのは当然だろう。」 p 102

☆ 14世紀から15世紀にかけて山南が二つの勢力の競合関係にあったことの説明として興味深い。この時期は、地域間の対立連携連合が進行していく過程であったことを示したものと見えよう。第一尚王朝期は、なおその要素が多分に存在したといえよう。そのために、内戦の敗者たちも、南城市域も含め、各地の集落に残っていったと推察される。

☆ 中央集権化が本格的に進行する15世紀後半の尚真統治の中で構築された王―按司体制について、次のように述べる。

「尚真王によって整えられた、間切制にもとづく新たな政治体制である王―按司体制は、こうした寨の解体・寨官の没落の一方で成長してきた地域共同体を行政単位＝間切として把握し、その首長である按司層を王国の支配体制の中核に組み込んだものと考えられる。

地域共同体は古琉球後期の政治支配体制の基礎として存在したが、その構成単位はグスク時代以来の数世帯から成る世帯共同体であり、これが、個別世帯ごとに分散居住した散居的集落を形成し、あるいは単一で小集落を形成し、あるいはこれらがいっしょに集合して大集落を形成していたようである。（中略）古琉球のこうした集落が、祭祀においてはマキヨとして把握され、その祭祀場（殿＝神アサギ）を持っていたと考えている。」 p 183

☆ こうして16世紀に入ると間切―集落体制が確立していく。それは散居的集落を統合し、一つの集落としてまとめ上げていったことでもある。それが、今日の「古村」の始まりと推定できる事例が多いようだ。

王権による統治という上からのものと、小集落の連携連合併合という下からのものとが交差することで、間切―集落体制がつくられたといえよう。

2022年01月04日

古琉球集落から近世的集落へ 南城論への旅D8

☆ 古琉球集落から近世的集落へ、についても示唆に富む記述が多いが、今回は紹介だけにとどめる。

「古琉球社会から近世的社会への実質的変容は、島津氏の琉球征服から五〇年後の向象賢の改革（一七世紀中葉）から始まり、蔡温の改革（一八世紀中葉）で一応完結したのである。」 p 188

「行政村を設定はしたが、土地所有と農業経営に関しては古琉球的情况のままであり、これらの村を村請性によって年貢負担単位とすると、村間の争いを惹起することになろう。したがって、村請制に適合した近世的村として完成させるためには、古琉球的な水系単位の〈原〉を村の耕地分布の実態に応じて再編して村の領域を設定し、さらに領域内の他村の耕地を整理—排除する「村切り」が必要だったのである。」 p 184

（仲松氏は）「島尻地方では複合マキの村が多いのに対し、国頭地方では単一マキの村が圧倒的主体を占めていたことを指摘している。つまり村の集団構成において、島尻地方の地縁的傾向に対し国頭地方では血縁的傾向が強かったのである。」 p 139

「古琉球においてはマキ単位の村落を形成していたが、近世における王府の政策によってマキが村落統合されて複合マキ村落が成立した。」 p 140

「古琉球的村においては、マキ集団ごとに個別に小集落を形成して分散していた在り方からすれば、分散した耕地とこれを個別的に経営するマキ集落が想定される。しかもこうしたマキ集落の多くが古琉球前期（グスク時代）以来同一場所に定住してきた経過からすると、特定の耕地を排他的に経営する小集落として描かれるのである。してみると、この段階のマキ集団は、個々の小家族相互が農業経営において不可分に結合した世帯共同体的関係にあったのか。あるいは、マキ集団はすでに個別小家族に分解し、マキは祭祀集団としてのみ機能していたのかが問題となるが、そのいずれの形態を取るかで近世村の起源の問題は大きく異なってくる。」 p 145

「『琉球国由来記』の各村の拝所は、全くの政治的規制の産物ではなく、共同体の集団編成と不可分の関係にあった祭祀＝拝所が、王府に公認されたという観点から検討してみる必要があると考えている。」 p 143

☆ 次回から数回にわたって、安里著書のなかで、南城市域にある集落に言及した記述を紹介していく。

2022年01月09日

稲福の上御願遺跡 南城論への旅 D9

☆ 1981年から82年にかけて行われた稲福の上御願遺跡の発掘調査は、貴重な知見を与えた。ここまで紹介してきた記述にも、それが反映している。発掘直後に刊行された大里村史編集委員会編『大里村史』（大里村役場1982年刊）に、すでに記述がなされており、その執筆には安里進が加わっている。

「大里村稲福の上御願遺跡も、三方を崖に囲まれた標高一七〇メートルの小高い丘陵上に立地している。炭化米・麦、小型鎌などの遺物や高倉などの建物の存在から、この集落が農業集落であることはまちがいないが、一方では鉄製矢じりが十数個も出土している。」 p 40

「こうした遺物、遺構から描かれる上御願集落の居住者は、大型建物に居して中国陶磁器や立派な調度を使い、鎧・武器で身を固め武装した稲福集落群の首長的な人物、祭祀を司る司祭者の人物のほかに、小さな建物に居住し、農業・漁

労・鍛冶などの生産労働に従事する労働者などからなる数世帯の住人である。(中略)「おもしろさうし」は、かつて稲福集落が、高倉が群れ建ち富み栄える「国の根」であり、そこには、ただ(太陽の意味)と呼ばれて畏敬されていた人物がいて立派な建物を造営し、周辺の集落からも金鎧をまとい部下を引き連れて、この稲福のどに拝謁したことを伝えている。」 p 100

「上御願集落の集団は、武装し、また舶来の品々を日常的に使用＝消費しているが、自ら労働する農民でもあった。こうした生産集団という観点から見ると、一棟の倉庫と鍛冶場を共有しているという点で、数世帯が生産を共同で行なう経営体であり、これは世帯共同体という概念で把握できると考える。また、多数の勾玉、玉類、石製護符などの出土や祭祀遺跡の存在からは、この世帯共同体において祭祀という営みが重要なウエイトを占めていたこともわかる。」 p 157

☆ 農業だけでなく、祭祀・軍事・交易の機能を持っていたことが注目される。十三～十四世紀には、周辺地域のなかで有力者の拠点として稲福の存在をうかがわせる記述だが、規模は大きくない。それに類した集落が点々と存在したのか否か。周辺での考古学調査が期待される。

「大里村稲福の上御願遺跡は、数百メートルの範囲内にある他の二つの遺跡とともに稲福遺跡群を形成している。この稲福遺跡群は後に集落統合されて、近世の稲福村へと展開していく。」 p 75

「稲福の上御願遺跡では数世帯で人口は最大でも三〇人を越えることはないと推定される。この遺跡は十三～十四世紀頃の集落跡、(中略) 最上位にある首長居宅とみられる大型建物の前面に広場があり、その廻りに住居跡や倉庫、祭祀場、鍛冶場などがある。地形を考慮すると建物は最大五、六棟しか建つ余地がない。住居一棟に五人が居住したと考えると最大三〇人となる。しかし、広場もあるし、建物のなかには倉庫も含まれるので、実際の住居は三、四棟で人口は三〇人前後ではないだろうか。上御願遺跡の面積規模はグスク時代のなかでは普通サイズなので、当時の集落の人口はこの程度だと考えてよいだろう。」 p 72-3

2022年01月13日

稲福集落の歴史変化 南城論への旅 D10

☆ 稲福集落のグスク時代から近世に至る数百年の歴史を推理して、次のように記述されている。

「稲福村は三つの「原初的小集団」が統合された単一マキ村落のケースである。考古学的調査では、十三～十四世紀前半には各御嶽付近に小集落が存在していたことが認められており、これがマキ村落以前の「原初的小集団」に対応する。そして、これらの小集落は十四世紀後半頃に集落統合されたが、その統合集落位置が不井然型地区の範囲とほぼ一致することが認められている。つまり、統合集落がマキヨ集落に対応し、その集落は不井然型であったと考えられるのである。」 p 141-2

「少なくとも十四世紀には三つの遺跡(居住跡)が併存して散居的な集落を構成していたが、十四世紀後半ないし十五世紀に稲福殿遺跡に統合されたと考えるのが妥当であろう。この稲福殿遺跡が近世・近代の稲福村落へと展開していったことは間違いない。」 p 150

「稲福村落の拝所は、稲福殿と上御願（山グスクともいう）・中森御嶽・中村御嶽の一殿・三御嶽である。三つの御嶽に対応して村落創始家モイトカン・イリジョウ（西門）・ウフヤ（大屋）の三家である。この拝所構成から考えると、稲福集落は三つの同祖集団から構成された単一マキ集落ということになる。」 p 201

「各集団は、一四世紀には上御願遺跡・仲村御嶽遺跡・稲福殿遺跡をそれぞれ居住区としていた。これらが、一四世紀後半ないし一五世紀に稲福殿遺跡に集落統合された。その後、稲福殿遺跡は一六世紀に集落再編されて稲福旧集落の中道地区が成立した。その後の展開は、(中略) 近世において東部地区が拡大し、そして明治期以降に南部地区が拡大した。」 p 203-4

「稲福殿遺跡が一六世紀に再編されて旧稲福集落中道地区は成立したと考えたが、これは同時に殿という祭祀場の成立でもある。仲松氏が指摘しているように殿とマキが対応関係にあるのであれば、この殿の出現に特徴づけられる中道地区集落の出現が、新たな秩序によるマキヨ集落の成立といえるのではないだろうか。」 p 207

☆ 一つの集落に焦点化して、グスク時代から近世期までの変化が見事に描かれており、他の集落の歴史を考えるうえでも参考になることが多い。

2022年01月18日

糸数 安座真 船越など 南城論への旅 D11

☆ 同書は、南城市域にあるいくつかの集落にも触れている。糸数、安座真、船越のグスクをめぐって次のように述べる。

「小型グスクは、面積が五〇〇平方メートル前後と小規模で、単純に石積みを一重にめぐらしただけの単郭構成のグスクである。大里村の根石グスク（中略）などは百平方メートルほどで、石積みも簡単である。五〇〇～七〇〇平方メートルほどになると、知念村の安座真グスク、玉城村の船越グスクなどがあるが、これらは石積みもしっかりと高い。」 p 44～45

「立地や石積みの単純さからみて村落の聖域としての機能しか考えられない玉城村の根石グスクもある。このグスクは字糸数の御嶽となっている。」 p 46

「玉城村の船越グスクや知念村の安座真グスクは、グスク内部は平坦な広場となっている。建物も建てられる余地はあるが、そうした遺構や集落跡を思わせるような遺物の出土がなく、築城年代も明確ではないが、野面積みという石積み技法からすると十三～十四世紀のグスクだろう。」 p 46

「十四世紀には二万平方メートルを越える糸数グスクが登場し、十五世紀には首里グスク、大里グスクなどは三万平方メートル近くにもなる。」 p 46

「図14 石積みグスクの変遷 前期 船越 安座真 知念森 志喜屋

中期 垣ノ花 糸数

後期 知念 」 p 47

「グスク時代の遺跡分布を見ると、第一尚氏の本貫地である佐敷は遺跡つまり集落分布の希薄地帯だということがわかる。(中略) 佐敷と同じようなジャーガル土壌の海岸低地・谷底低地では、佐敷にかぎらず遺跡の分布が少ない。」 p 5

☆ 南城市域は、グスク遺跡が多い所で、それらと集落とのかかわりは、集落史を考えるうえで多くの手がかりを与える。

2022年01月23日

糸数 大城 南城論への旅D12

☆ 引き続き紹介している安里著書は、先にも触れた糸数の3集団、グスク、集落の見取り図を次のように描く。

「聞き取り調査では、糸数村落には、糸数グスクヌ殿、根石グスク、ウフヤマ、クニニーなどの拝所がある。糸数村落は、後世の寄留集団をのぞくと、サナン、クールク、イトカズの三つの集団からなるといわれている。サナン集団は根石グスク、クールク集団はウフヤマ、イトカズ集団はクニニーを管理する。クニニーはクサテ森の御嶽ではなく、イトカズ集団は本来は糸数グスク内の糸数グスクヌイビを管理していたものと思われる。糸数グスクヌイビは、糸数グスクヌ殿と一体となっている。この三集団は、元はそれぞれの御嶽付近に居住していたが、後に統合されて糸数村落が形成されたと伝えられている。

つまり、糸数村落は一殿三御嶽、三祭祀集団構成の村落で、各御嶽付近に居住していた三つの御嶽集団が統合されて一つの殿祭祀集団になったと考えられる。」 p 222-3

「糸数村落の形成過程から、糸数グスクの位置を考えてみると、単純に糸数グスク＝支配者の居館、糸数集落＝被支配者の集落と考えることには疑問がある。遺跡の規模から考えると、糸数グスクが根石グスクや糸数集落内遺跡よりも数倍も大きく、支配者集団が被支配者よりも人数が圧倒的に多いということになるからである。おそらく、糸数グスクに居住していた集団は、根石グスクの集団とともに、小共同体を形成し、その中の有力集団が糸数グスク一帯に居住していたのであろう。」 p 225

☆ 大城のグスクと集落については、次のように述べる。

「大城村落は、拝所構成からすると二つの祭祀集団からなる村として成立したと考えられる。その初期居住地として大城グスクとコグスクが考えられるが、コグスクについては不明である。大城グスクは、北側の切り通しの層序から、この遺跡の最後の時期（十四世紀の後半頃か）に、正殿・御庭をともなう大型グスクとして整備されたと考えられる。大城グスクは、当初は大城村落の初期集落であり、その後（十四世紀の後半頃）に大城按司の居館としての大型グスクに整備され、集落は現在の集落地に移動したと考えたい。」 p 226

☆ 今日いうところの東四間切の原型について、次のように述べる。

「南風原一知念のグループが、近世の東四間切の原型なのであろう。近世の東四間切は、大里・佐敷・知念・玉城の四間切だが、その原型は南風原から知念までの四間切だったと考えられる。」 p 211

☆ 以上長くなったが、安里進著書から、グスク時代から近世までの南城市域の集落について受ける示唆は大きい。私の南城をめぐる今後の作業にとっても貴重なものとなろう。

2022年01月28日

近世集落形成以前 南城論への旅 E 1

連載 E をスタートする。対象時期は、近世から明治中期、つまり 17 世紀から 19 世紀末までである。

まず、これまで見てきた近世集落形成以前の流れを振り返っておこう。古村と呼ばれる集落が形成される時期の話である。

15 世紀末～16 世紀の第二尚王朝のもとで、集落統治が進行していく。各地の間切や集落（シマ）を支配統治してきた按司は、首里に集居させられ、集落民との距離が離されていく。それでもなんらかの結びつきは存在しただろう。そのあたりについての変化、つまり 15 世紀末から 17 世紀はじめにかけて、按司と集落民との関係の変化についての検討が期待される。

重要なことは、おそらく薩摩支配下に入って一定期間たつと、間切や村を統治する地頭などが、王府が任命する役職となり、何年かで配置換えになるものになっていったことである。そうになると、按司が領主であることはタテマエとなり、実質的な統治は限りなくゼロに近づいていく。その役職に任じられた期間だけの按司である。それ以前の 16 世紀では、按司などの統治者が首里に集居していたとはいえ、配下のものが、現地において集落統治を担うなどして、現地との結びつきをかなり有していた。

15、16 世紀における集落変動を考える際、シマの生業の変化も視野に入れたい。15 世紀になると、たいていの集落は農業生産にかかわっていただろう。といっても、交易や交易品の生産にかかわる集落もあっただろうから、17 世紀以降のように、農業生産を中心とすることが、すべての集落について言える段階ではなかったろう。また食糧獲得のうえで、農業以外の漁業などもかなりの比率を占めていただろう。

また、そのころは、住民移動が集団的に行われ、多様な集団によって構成される集落が存在し、集落住民構成に変動がしばしばあっただろう。字誌などには、集落住民の出自に多様なありようが描かれることがある。それらを描くには、口承あるいは口承を後世になって文章化したものにもとづいたものが多く、直接的な物的証拠はえづらいが、それらには何らかの移動を伴う変動を反映しているだろう。

ハラ・ヒキといわれるものが、集団としての移動に関わっている可能性があるだろう。それらは血縁集団というイメージで語られることが多いが、血縁のない人を含めた共同生活集団と呼んだ方がいい場合もあろうし、血縁が絶対とはいえないだろう。

それらの過程が、集落住民自体の独立的自主的判断で行われたとは想像しにくい。以前からのリーダー層ないしは支配層が、どのように関与したのだろうか。王府の機関によるどのような判断決定が関与したのだろうか。そのあたりを描くには、かなりの調査が必要であるが、時間をかければ可能であるとは限らない。頼りになる一つは集落の考古学的発掘調査であろう。その例を連載 D では、安里著書によって稲福を中心に見てきた。

2022年02月02日

集落移動 南城論への旅 E 2

前回述べたように、集落が立地する場所へ外部から移動してきたグループと、既住者とがいっしょになり、多様なグループによって集落が構成されただろう。そうした多様さに対して、集落民自身の必要だけでなく、統治者の必要もあって、集落としての安定的なまとまりを作り出す営みが求められるが、それはどのように展開したのだろうか。それには集落祭祀とくにノロを頂点にする根神根人などの祭祀組織形成が深くかかわるであろう。そのあたりについては、仲松が詳しく触れていることだ。

そして、交易の比率が低下し農業の比率が高まったように、生業が変化していく16～17世紀初めには、移動が抑制されはじめ、定住化が進行していく。1654年には首里那覇という町方への田舎からの移住が厳しく止める命令が出される。

こうした近世以前の流れを受けつつ、古村が、その枠を決定づけていくのは、17世紀に入って以降の薩摩・首里王府統治といえよう。

このように集落を、拡大縮小のみならず集落全体の移動あるいは集落の部分的移動などのかかわりで、把握分析していくことは、重要な研究課題といえよう。18世紀以降の、津波などの大災害対応をきっかけにした集落移動は、史料もかなりあり研究も展開されているが、それ以前の15～16世紀における集落移動の本格的な研究がそれほどあるわけではない。なお、その際、人口増減とのかかわりでの研究検討も不可欠であろう。

南城市域でいうと、やはり18世紀以降については、各字誌なども一定の記述をしているが、それ以前のものは、言い伝えが中心となっている。

大きく15世紀以前と16世紀以降に分けて、集落移動をみてみよう。15世紀以前は、集落間の軍事的緊張衝突も含み、按司との関係を強くもち、集落自体が移動的性格を多分に帯びていた。しかし、16世紀以降になると、定住的生活を強め、それまでにあった按司というリーダーないしは支配者によるものに並列して、またはそれに代わって王府が登場し、王府の統治単位となっていく。

15世紀以前と16世紀以降との間に見いだせる違いを、集落を構成する集団を土地との結びつきと人間相互の結びつきとの重点の比で語るなら、後者の比の高さから前者のそれへと徐々に移っていくということだろう。こうした多様なグループで構成された住民たちが、共通の土地に結び付いた集団へと変化していくことが16～17世紀に生まれてきて、今日の古村の当時の形がつけられた。

土地に結び付いた集団を前提にし、多様なグループで構成する集落内の人間相互の結びつきを構築するために、祭祀組織の構築再編成が、この時期にすすめられたともいえよう。

2022年02月07日

薩摩=王府統治体制下での集落 南城論への旅E3

17世紀以降の薩摩=王府統治体制下において、集落は租税納入単位として位置づけられることが強まり、統治もその目的に沿って展開された。

その際、薩摩支配のなかで、江戸幕府は間接統治の形をとるが、どういう点で、幕府統治の特性が見られ、薩摩独自の統治特性がみられるか。さらに、それ等との関係で、王府独自の統治がどのように行われたか行われなかったかを見

ていく必要がある。このあたりは、おそらく歴史学研究の中でかなりの蓄積がある。先に紹介した荒木田著書が示すものは沖縄ではどう展開したのか。関心をもたれることであり、先行研究から学ぶことが多いだろう。

その点で、最新刊の細谷昂『日本の農村』(筑摩書房2021年)は示唆に富む。沖縄の農村、薩摩の農村にも言及しており、本連載にかかわる示唆があるので、後述することにしよう。なお沖縄への言及の際に参照された北原淳、安和守茂『沖縄の家・門中・村落』(第一書房2001年)は、検討参照する価値のあるものだが、私は未読だ。いずれ触れたいと思う。

税収入を高めるための集落統治を貫くためには、集落民を土地に縛り付けることが必要になる。集落を越えた移動の制限とならんで、地割制をそのようなものとして見ていく必要がありそうだ。地割の始まりについては、いくつか説があるようだが、そのなかの有力説には18世紀前半の蔡温治政期とするものがある。

仲松も、その説をとっているようだ。

「沖縄諸島におけるゴバン型村落の発生は、八重山、宮古のそれとは異なっている。その発生は土地の公有に基づく地割制度に端を発していると考えられる。この制度は蔡温執政時に始まったと思われるが、最初は模合持土地制度にしてあったものが結果が思わしくないことから、明治三十六年まで続いた地割制に改めたもので、一七三七年(元文三年)から実施されたと考えられる。」仲松弥秀『うるま島の古層』p212

「ゴバン型村落」の南城市域例でいうと、糸数のなかの南側地域から、現在地に18世紀に移住した前川がある。

関連して、集落は現在の字(大字)に相当することが多いが、それより細かい区分の小字の相当するものが、長く存在してきた。小字は「原」名であり、現在も残っている。ちなみに我が家の住所の「玉城中山」は大字であり、「中山原」が小字である。

地理学研究者は次のように指摘する。

「歴史上、沖縄の「原」名とその領域に大きな変動を与えたのは、近世期初頭の慶長検地、近世中期の元文検地、明治期の土地整理事業の三つである。」『沖縄県史各論編第九卷民俗』沖縄県教育委員会2020年p71執筆町田宗博
この三つの時期は、大きな集落変動時期と重なっている。当然のことだろう。

2022年02月12日

薩摩=王府統治体制下での集落移動 南城論への旅E4

前回述べた前川のように、18世紀に集落ごとに移動した事例は多い。仲松は次のように書く。

「多くの村落が移動の経験をしている。移動の理由としては、村敷地の狭隘、不健康地、交通の不便などという理由があげられている。村民による自主的な移動もあるが、多くの場合は首里王府による貢租増政策からであると考えられる。しかしそれがたとえ王府政策からのものであったにしても、移動については決して強圧的手段をえらばずに、あくまでも村民自体が自然に移動せざるを得ないように仕向けている。その方法として用いられたが中国から伝来した風水地理学である。」『神と村』p259

「丘の中腹やそれよりも上方に位置していた村のなかにも、とくに明治以後になって地氾りの下降をするようになった

村が、各地に見られるようになった。耕地が下方に多かったことと、交通不便だったことが主たる原因のようである。」
仲松弥秀『うるま島の古層』梟社1993年p214

また、集落ごとの移動ではなく、ある程度の人口がまとまって、既存集落のなかへ移動する例もある。おそらくそれも王府が何らかの形でかかわったものだろう。私が住む中山集落でも、二つの「ハラ（腹）」がそれにあたり、かなり離れた所から移動してきたようだ。また、祭祀の中心にかかわる人たちが、知念から移動してきたと伝えられているが、時期は不明である。集落誕生にかかわる人々は、それらとは別の二つの「ハラ（腹）」の人々のようである。このあたりは口伝であり、物的証拠となるものがなく、時期判定も含めて確定的なことを述べるのは難しい。あえていうとすれば、15世紀初頭から18世紀半ばまでのいつの日かであろう。

中山については、仲松は何度か触れている。

「玉城村中山の宗家カンサギ屋の旧屋敷裏に、殿のある御嶽があって、その森中には四つの神墓が見られる。」『うるま島の古層』p193

「不井然的形態の村ではあるが、御嶽が村と離れた高所に位置している場合は、村落が地迤り的に御嶽のところから下降してきたものであると見ることができる。たとえば（中略）玉城村中山のごときである。」『うるま島の古層』p211

「玉城村中山でも分家群は下降していながら旧家群は御嶽側に居残っていた。」p213

この中山の殿のあたりは、私も集落行事の折に訪れる場だ。この殿に隣接してあった「旧家群」は、残念ながら今はない。少し離れたところに新築した方はおられる。

なお、カンサギ（神舎下）は、先に述べた知念から移ってきたと言われる家で、私は、カミアシャギが音変化してカンサギになったと推理している。

2022年02月17日

集落統治のための知恵 マキ用語 細谷昂『日本の農村』 南城論への旅E5

17世紀以降の薩摩=王府による集落統治には、それまでとは異なる施策がいくつも展開されたわけだが、その施策に対応する知恵（「学問」「技術」）が求められた。よく知られているものとして、仲松も言うように集落立地家屋配置などにかかわる風水学がある。また、地方役人および住民統治のためのイデオロギーとしての儒学とくに朱子学がある。さらに農業生産を向上させるための諸技術の構築ないしは導入がある。また、集落運営の技術もあるだろうが、掘り下げられた研究にまだ出会っていないのは残念だ。

14～17世紀ごろの集落を考える際、マキ用語がくりかえし登場する。それは沖縄固有の用語とばかり私は思っていたが、実は、沖縄外でも使用されていた。

細谷昂『日本の農村』（筑摩書房2021年）のなかに、有賀喜左衛門の研究に触れて「他に生活保障の手段のない日本の政治的・経済的・社会的条件の中で、一種の利害共同体としてのマキ（同族団）を結成したことを示すもの」p

29という記述が登場する。

また、「ここで「マキ」といわれているのは、本家を中心とする同族団のことであって（中略）かなり広い呼称と見ることができよう。」p93と述べられている。

こうした用語の共通性と差異の背後にある、集落をめぐっての他府県におけるものと沖縄におけるものとの差異、および統治とのかかわりについて深めていく必要があるようだ。

ここで引用した細谷昂『日本の農村』（筑摩書房2021年）は、近世から近代にかけての農村を考えるうえで、おおいに学ばされる書籍だ。その一つとして、近世の農村について、研究領域によって、肯定的把握と否定的把握とに異なる展開がなされてきた指摘は興味深い。

「柳田の日本民俗学の提唱は、当時の農村社会・文化への肯定的理解の上に立っているとはいえようが、これに対して、かつての経済学の一部などには、戦前・戦中の農村を「半封建制」の支配下にあるものとして否定的に見る立場があった。」細谷昂『日本の農村』（筑摩書房2021年）p43

その後者の例に山田盛太郎を挙げている。私も、否定的把握に近いことを、学生時代に教えられてきた。そして、沖縄史においても、否定的傾向を帯びた書籍を読むことが多かった。しかし、学習をすすめてきて、多様な把握が併存していることに気付いてきた。

2022年02月22日

若者組と青年団、小学校 南城論への旅E6

若者組と青年団、そして小学校をめぐっての、細谷の次のような指摘は注目される。

「青年団などには、「古くより存した若衆組の変容」と見られる事例もあるが、官製的組織は、「明治期以後主として欧州文化に存する制度や思想を原型として模造したもの」であり、「古い、そして地方的な伝統と調和することが少なく、ほとんどそれを無視して成長して来たように思われる」。しかし鈴木がいうように、行政村を単位としながら、「自然村の封鎖性、対外的・敵対的性質をもっとも融解せしめたもの」は、「おそらく小学校」であつたろう。自然村のなかで育った子供たちを相互に交流させ、より広い世界に目を開かせる役割を、複数の自然村をまとめて行政村範囲で解説された新しい小学校が果たしたであろうことは想像するに難くない。」細谷昂『日本の農村』（筑摩書房2021年）p48～9

若者組と青年団とは、所属年齢が類似なだけに、この二つを連続的に捉える発想をよく見かけるが、大きな差異・断絶があることの指摘は注目される。沖縄における近代以前の年齢別組織である二才組織と青年団の関係についても同様である。二才組織の継承発展として青年団が生まれたのではなく、政府＝沖縄県庁の統治のなかでつくられたのであり、しかも、その際に小学校教師たちが決定的に重要な役割を果たした。

その点では、前代からの継続性のある年齢別組織と新規に作られた青年団との対比検討が求められる。また、両者が折り重なって、20世紀に入ってからの集落の若者組織が存在し、二つの顔を持っていた点の検討も必要である。戦後の青年会は、その両者のどういう部分をひきついでいるのだろうか。前近代の年齢別組織を引き継いだ面がかなりあり

そうだ。

住民たちが自然村である集落を越えたつながりを作りだすうえで、小学校の果たした役割が大きいことの細谷の指摘は、注目すべきことだ。その点は、私も、別の所で触れたことだ。

それに対して、戦前の青年団は、集落ごとの対抗性を強く引きずっていたし、それを利用して上からの施策が展開された面があろう。

2022年02月28日

東南アジア集落と沖縄集落 南城論への旅 E7

細谷著書には、沖縄に触れた個所がある。それは、北原淳・安和守茂『沖縄の家・門中・村落』第一書房2001年を参照したものだ。刺激的なヒントが含まれているが、同著そのものに触れていない私にとっては、どうコメントしたらよいかわからないのが実情だ。そこで、引用紹介のみにとどめる。なお細谷書で、著者の一人の北原は、「東南アジアの農村研究に豊かな経験をもつ」と紹介されている。

「その時代の沖縄農村が、ムラのイエを租税単位とする属地支配的な本土の近世的構造とは異なり、租税の単位として人頭割を重んずる点で、東南アジアの前近代にも共通する「属人的支配」の傾向をもっていたのではないか、という仮説を今も放棄していない」という。」 p 140

「東南アジアの過去、現在をみれば容易に想像がつくが、人口が稀少で森林が豊富な状況では、自由に移動する人口が森林を伐採し、開墾する過程（焼畑段階から恒常的耕地化の過程）のなかで耕地がふえてゆく。つまり、条件が変われば簡単に他所に移動するという意味で人口の移動が激しく、集落の興廃が激しい。」 p 140

「住民の移動による森林開墾、森林の耕地化による新集落の形成、そして、しばしば旧集落の消滅、という過程が、王府の統制が弱かった古琉球時代ならば実現していたであろう。」 p 141

「17世紀以来本格化したむらの近世村的再編成、沖積平野開発の進展、それらに併行したとみられる山林管理の転換は、・・・（一八世紀における）模合の村落単位化をすでに準備していたのではないだろうか。「村々模合」とは、原型的な耕地と山林の地目区別のない「諸人模合」から、地目として区分された森林の一村管理での管理（ただし上級管理権がきわめて強い）までの間に存在する、種々のレベルの共同利用・管理形態であるといえよう。」 p 141-2

「自由に移動する人口が森林を伐採し、開墾する過程（焼畑段階から恒常的耕地化の過程）のなかで耕地がふえてゆく」というような生態的条件の中では、関係する「諸人模合」から「村々模合」までの様々な形態の農民の話し合いによる「山林の共同利用・管理形態」が現出したということは理解できる。」 p 142

☆ これらの指摘について、現在の私はコメントする用意がないが、興味深い指摘がいくつも含まれている。

たとえば、

- ・属地支配と属人支配
- ・東南アジアと沖縄の共通性 それがどのようにして形成されたのか。人の移動を伴っていたのか。
- ・焼畑農耕の遺産 集団移動と絡んでいる点がとくに注目される。
- ・「諸人模合」と「村々模合」

2022年03月07日

耕地と位牌 南城論への旅E8

さらに細谷著書（2月17日記事で紹介）には、北原・安和著書によって、薩摩支配以降の集落に対する施策について、次のように書かれている。

「①土農分離による地頭層の多くの王府中央官僚化と農民層的な村役人化への分化、②公的な意味で農村住民の小農身分への一元化と王族地頭層の介在を排した王府による直接支配、③農民の土地緊縛と村内婚奨励化、④農民の行政村（間切り）一村一与（くみ）への帰属義務の徹底化とそれを通じての農民収取の実現、⑤村への人的帰属を明確化した村切の実施、⑥結果としての自然村の行政単位化、等である。」 p 132

家の継承をめぐるのは、近世に限定せず、現代例を含めて、北原・安和書を紹介しながら次のように書く。

「最も重視されるのは位牌を継ぐことであり、財産の相続は二の次であるといわれる。」 p 133

「沖縄の住民にとって、また支配層にとっても、「耕地」が持つ重みは本土のそれとは著しく違うことは否定できないようである。それが、耕地よりも位牌という家産意識に反映しているものと思われる。」 p 133

土地所有をめぐる沖縄集落における特質が、薩摩＝首里施策に伴う変化の過程として、よく描かれているといえよう。それは現代までつながっていると、次のように書く。

「近代になってもムラ内部で、もちろん・・・経済的制約はあったが、自由に分家を出すことに公的制限はなく、消極的ではあれ、新ヤー創設の権利を各ヤーはもっていた。・・・そのため、たとえば、佐敷町中心部新開の公営団地は次三男対策として建設されたのだという。世帯数の増加速度はかなり早い方に属する」。このように、「門中の単位」とされるヤーは「直系家族の理念型としての父系原理的単位」ではなく、むしろ「核家族的な側面」を持つことに注意しなければならない。」 p 136

これまた注目すべき指摘である。とはいえ、私がこれについて評価コメントできるには、時間がまだまだ必要である。

2022年03月12日

近世沖縄集落と薩摩集落 南城論への旅E9

細谷著書には、近世期に沖縄を統治した薩摩の地元における集落統治形態に触れたもので、沖縄統治にもなんらかのかかわりがありそうに思えるものがあるので、紹介しておこう。

内藤莞爾『末子相続の研究』弘文堂1973年によりつつ、「薩摩の門割制」について、次のように述べる。

「農民は単位労働力として掌握される。そして一片の土地の私有も農民には許されない。・・・割り当てが単位労働力である以上、ここでは『家』はおろか世帯さえ分割の可能性をはらんでいる。なるほど名頭世帯・名子世帯は、いずれも家

部として示されている。しかし掌握の仕方からすれば、家族の集団性をそう高く評価することはできない。だいたい土地私有が認められない以上、ここから家産の観念など、生まれる道理がない。」 p 188

こうした薩摩でのありように、近世沖縄施策になんらかの関連をみるのが可能だろう。

「それ自体は林野であるけれども、これは郡奉行の許可を得て、仕明地（開墾地）にすることができた」。そしてこの「仕明と植林とを交互に行ふ旧慣があり、仕明後四、五年作職し、地味衰微すれば、之を放棄して植林し、十七、八年後に伐採し、再び仕明するを有利とした」 p 191

近世沖縄における大量の仕明地には、こうした薩摩でのありようが関連しているのだろう。次の指摘も同様である。

「かつての沖縄の「人口が稀少で森林が豊富な状況では、自由に移動する人口が森林を伐採し、開墾する・・・なかで耕地がふえてゆく」という状況と、鹿児島における「広大な開発フロンティアを擁し、農民層は開発集団としての性格を持ち続けた」という状況とは、きわめて類似していたのではなかろうか。そしてまた、沖縄における「地割制度という土地の私有が許されない小農制」、「実質的な家産の欠如」と、鹿児島における「耕地は藩による公有であり」、それが「家産の形成を阻害」していたという鹿児島とは、まことに類似した農村の状況を示していた面があるように思う。」（引用中の引用文は内藤著書） p 197-8

このように、細谷著書は、本州各地・薩摩・沖縄の共通性と差異を視野に入れた検討となっており、示唆に大いに富んでいる。現在の私には、文意を理解するのに精一杯といったところである。

以上のような近世の村の検討を通して、細谷は概括して次のように述べている。

「近世江戸時代の村は、庄内地方の場合、少なくとも初めは「自然」に形成されたというよりは、支配、行政の立場から、検地と村切によって人為的に作られたものであった。農民経営が相対的に自立化して属人的な支配は不可能になった状況の中で、それを属地的に把握するために「設定」されたのが、近世江戸時代の村だったのである。」 p 231

「村は初めはたしかに作られたものであったが、近世の過程を経る中で、次第に村人の協議、契約、共同の組織として形成されていったのである。それは、村人の生産と生活の必要から次第に形成されて、『自治』的性格をもつようになっていった。（中略）近世の村は、一面では支配の側から設定された「行政村」であるとともに、村人の生産と生活の中で形成された『自然村』でもあった、この両側面が不可分に結びついているのが、社会学的な村というべきであろう。」 p 232

これらが沖縄にあってどうであったかについても、示唆を含んでいるが、私がそれを述べるには、まだ準備不足であるので、保留しておくしかない。

2022年03月18日

近世末期集落における階層分化 南城論への旅 E 10

かなり脱線してきたが、話を近世後半から末期に戻そう。

近世集落は、平等で自治的な農村共同体であるというイメージで語られることが多いが、近世も19世紀になると、集落内の階層分化がかなり明瞭に進行していく。そのことを先駆的に論述したものに、田港朝昭「近世末期の沖縄農村についての一考察」琉球大学教育学部紀要第八集一九六五年）がある。

私はそれに強い刺激を受けた。ところで、私の卒論学生に佐久川紀成さんという琉球大学の民俗クラブの部長も務めた人がある。このクラブは、沖縄各地の集落の民俗調査をしていて、毎年分厚い報告書を出しており、南城市域でもいくつつか出されている。彼の卒論があまりに優れているものだから、私の執筆個所とともに、共著論文として生かした。これが、私の沖縄教育史に関する最初の論稿でもある。浅野誠・佐久川紀成「沖縄における置県直後の小学校設立普及に関する研究—地方役人層の動向を中心に—」琉球大学教育学部紀要第一部第20集一九七六年）

これらの研究は、近世末期以降の集落における階層分化を視野に入れたものであるが、階層分化は一八世紀からすでに見られ始めている。

それを物語るのは、仕明地（開墾地で、個人所有地となる）を作ることに、地方役人層が相当な力をいれていることである。今は、畑となっているが、船越の中央を大城から前川へと流れる雄樋川沿いは一七世紀には湿地帯だった。それを船越の富農層が開墾し水田を作り、島尻でも有数の富農となったとのことである。その際に、本人だけでなく、そこで働く人々の労働によるものが大きかった。そうした人々は、名子と呼ばれる身売り人であった。仲松もそのことに言及している。

「耕地の割替期間が長ければ長いほど、その間において分家した者は、親元の土地が多ければともかくとして、多くの場合は有力者の土地を小作するか、その使用人になるかなどして次の割替時を待つ以外に方法はなかった。しかし、人口増加にともなったこのような者が年々増加する村があった。こういった階層を沖縄では名子と称していたのである。

（中略）凶作に見舞われた時には、貢納どころか、日々の生活さえ維持することができなくなった身売人が続出する。これら身売人に割り当てられた土地は、村が取り上げ、これを他に加重する。こうしたことが原因、結果となつていよいよ身売人が続出するのだった。」仲松「うるま島の古層」p 219

このように階層分化といっても、集落の中で確固として支配被支配関係が作られたわけではなさそうだ。仲松は次のように述べる。

「村に政治的有力者、経済的有力者の富農が現れても、彼らは上位の位置に居住するようなことはなかった。しかし、おそいと腰当によって成り立つ神の村に、権力と金力にもとづく支配と服従の論理が徐々に侵入してきた。それでも神は強かった。ところが、明治の社会となり、西洋文明は沖縄の社会をも浸潤するところとなった。真っ先に西洋的教育と中央崇拜的教育が津波のごとく襲ってきた。おそいと腰当は遠くへ流されていった。」仲松『神と村』p 270

このように、集落変化を、19世紀末から20世紀にかけての学校教育とかかわらせて述べている。このあたりについては後述することになる。

2022年03月24日

近世から明治期にかけての集落における階層分化 南城論への旅 E11

近世における階層分化について「ヤー=系譜的家」の成立とかかわらせて、玉城毅は梅木哲人論を援用しつつ、次の

ように述べる。

「梅木哲人もまた、地割制が「家」の成立を阻んだという見方をとっている。梅木は、土地の私有を認めない地割制の村では、「不動産が成立しないから家産も成立せず、家の制度も出来にくかった」と指摘し、それと関連して「地人の貧富の階層分解も本来的には出てこない構造であった。」と述べている。ところが、近世村落の実態は決して平等なものではなかった。実際は地割配分が不平等に行われ、身売りするほど困窮した地人が現れた一方、開拓地（仕明地）を所有するウェーキ（富農）も存在していた。これに対して、王府は、「家内厚薄に応じ」て「親疎無く」土地を配当するように村に指示を出している。このような階層化された状況こそ、ヤー＝系譜的家が成立した条件であった。

開拓地を所有したウェーキ（富農）は、村や間切の役人を務める地方役人層であった。一般の百姓とは異なり、地方役人層においては、「系譜的家」を形成する条件が整っていた。『沖縄県史各論編第九卷民俗』沖縄県教育委員会2020年p222～3執筆者玉城毅

階層分化は、土地の開拓（仕明地）と「系譜的家」の成立とかかわりが深そうだ。さらに玉城毅論を見ていこう。

「一九〇三年（明治三六年）、地割制は廃止され土地が私有化された。これを契機に土地は相続される対象となり、琉球列島の広い範囲でヤー＝系譜的家が成立する社会的条件ができた。長男相続を強調し、祖先—子孫の連続性を重視するヤー＝系譜的家が普及・一般化したのは、それ以降のことだと考えてよい。

しかし、近現代になって、一代限りの家が系譜的家に完全に变化してしまったわけではない。このことは、前項で触れた沖縄島南部の屋取と糸満のチョーデーが形成した「拡大世帯」がよく示している。『沖縄県史各論編第九卷民俗』沖縄県教育委員会2020年p223～4執筆者玉城毅

農村では、ヤー＝系譜的家の成立が広く見られるようになったのは、20世紀に入ってからのことなのだ。と同時に、仕明地を持てるような富農層ないしは地方役人層は、例外的にそれ以前からヤー＝系譜的家が成立していたのである。

2022年03月30日

親族関係におけるタテとヨコ 南城論への旅 E12

前回紹介した玉城論では、親族関係におけるタテとヨコに触れている。

「ヨコにつながる親族のネットワークが果たした生活実践的な機能と、タテに系譜を遡及しようとする関心、この二つが糸満でみられた親族関係の実践と理念である。

親族のタテの関係は、協力が必要な経済生活の脈絡ではほとんど機能せず、祖先祭祀にみられるような観念的なつながりとして重視されている。これに対して、ヨコの関係は、観念的なものではなく生活の中の実践的な協力関係として実践的に機能している。『沖縄県史各論編第九卷民俗』沖縄県教育委員会2020年p225執筆者玉城毅

そのタテにかかわっては、いわゆる門中化現象と明治民法体制の浸透とを視野に入れる必要がある

「タテの親族関係は文化的なルールと認識されて親族集団の形成につながったこと、ヨコの親族関係はより実践的な目

的のための相互扶助のネットワークを形成したこと、これが本節でのべてきたことの核心である。

タテの関係を軸としたとき、「長男がヤーを継ぎ、次三男は分家すべきであり、娘は結婚してヤーを出るべきである」といった具合に、人と人を「へだてる」ことによって内部の「まとまり」を確保しようとする方向に進む。このような理念的な規範が存在してきたことは確かだが、同時に、ヨコの家族親族関係が実践的に機能したことも事実である。つまり、人と人を「へだてる」契機と「つなぐ」契機が、家族・親族現象において併存しているということが、本節で示したことの要点である。」『沖縄県史各論編第九巻民俗』沖縄県教育委員会2020年p226執筆者玉城毅

ここまで何回かにわたって紹介した玉城毅論は、優れた概括だといえよう。とくに門中化現象の広がり結びついたタテ原理つまりは家父長制構図に対し、ヨコ原理を指摘した点に注目したい。そのヨコ原理を親族集団とかかわらせて述べているが、親族を越えたヨコ関係のなかでのつながりの基盤についての掘り下げを期待したい。それには、集落がつくる共同体関係がまずはイメージされる。そして、20世紀に入って以降には、学校での同級生関係が生み出したヨコ関係にも注目したい。その点は先にも触れたことだ。また、集落を越えた組織、軍隊・青年団・婦人会・産業組織・会社・市民組織・趣味（文化芸能・スポーツ）組織・模合グループなどと、それらはふくらんでいく。それらには、タテ関係も忍び込んでくるが、徐々にヨコ関係を多様な形でつくることにもつながっていく。ヨコ組織は任意性を強めていくが、それらが社会の新しい形成単位ともなっていく。そこに、それまでの集落や家族とがどうかかわるのか、という新しい問いを提出しはじめるのが、20世紀、わけても戦後の大きな特質であろう。

では、親族内におけるヨコ関係にはどんなものがあるだろうか。兄弟姉妹関係、夫婦関係では、タテヨコの関係が入り組んでいるが、時間経過とともにどうなっていくのだろうか。また、兄弟姉妹人数の減少がどう影響してきたのだろうか。

なお、ヨコ関係の現代的実例としては、岸政彦ほか「地元を生きる—沖縄的共同性の社会学」2020 ナカニシヤ出版のなかの上原健太郎の報告がよく描いている。

2022年04月25日

「市民の語りで描く南城の多彩な集落（シマ）の歴史」 南城論への旅 F1

「南城市の民俗」が発刊された。そこで、この新しいシリーズF以降は、同書を足がかりにすることが好都合だろう。つまり、私が執筆した個所をページを追いつつ、書かれた文章に即してコメントをつけていく形で進めていきたい。それは、書かれたもので説明不足な個所を補足し、あるいはさらに掘り下げたいことについて考察を加え、あるいは今後の研究への新たな手掛かりになるような推理・仮説をたてたり、研究課題を提出したりすることになる。コメント書きが中心になるが、必要に応じて、「小論」を加えることもあるだろう。

まず「総論」のタイトルを、「市民の語りで描く南城の多彩な集落（シマ）の歴史」とした理由にかかわって、3点補足しておこう。

一つ目は、「市民の語りで描く」ということには、住民参加型で歴史を書くということである。先にも書いたように、300人を越える市民の語りと、すでに刊行されている字誌などの集落史・集落誌に記載された住民の語りをもとに執筆したのである。

戦後、とくに1970年代以降の沖縄各地の字単位で編集発刊された「字誌」の多くは、住民自身が調査執筆する住民参加型をとっている。南城市域の71の字でも、多くの字誌をもっている。ここで字誌というものには、公民館建築記念誌など、いろいろな名前が出されているが、それら全部をまとめて「字誌」と呼ぶことにする。なお、p238～9にその一覧を並べているが、それは市史編さん室資料室に保管されている24冊を対象としているので、それ以外にも存在しているかもしれない。

それらのほとんどは、字住民が調査編集したもので、字民からの聞き取りを含むことが多いものだ。なお、一部には、郷土史家・専門的研究者が調査執筆を担う例もある。

今回の「南城市の民俗」では、語りをしていただいたのは市民であり、聞き取り執筆した専門委員も、多くは南城市民である。

二つ目は、「多彩な集落（シマ）」についてであるが、このことは「三 集落の多様性」（p61～）で詳述しているので、その章をコメントする際に書こう。

三つ目はp11で書いたように、本格的研究論文の形をとっていないことである。むしろ本格的な研究論文を作成するための基礎資料として記述したものである。そして、このブログ連載での作業は、私なりの研究論文への準備作業に相当するものである。といっても、年齢上の理由で、私が本格的な研究論文に着手することは難しいだろう。だから少しでも前進できればと願い、この作業を進めている。

2022年05月01日

集落史研究 字誌 南城論への旅 F2

では、「一 南城の集落を考える」（p12～32）についてのコメントに入ろう。

まず「集落史研究」(p 13)についてだが、文献史料として紹介したものは、主として仲松弥秀・湧上元雄・比嘉政夫の三氏により1960年代~90年代になされ、発刊されたものである。ちなみに、三氏ともに琉球大学におられ、私が琉球大学在職中にもお会いしたことがあるが、このように研究著書を通してのつきあいになるとは、お会いした1970年代当時には想像できはしなかった。ことに比嘉さんとは、琉球大学教授職員会庶務係で一緒に、その後も何度かお会いし、民俗調査の同行を誘われたこともあった。私が住む中山についても彼による1960年代の貴重な調査報告を、私の執筆作業におおいに役立てさせていただいた。ちなみに、その教授職員会の役員のお一人は、その後EMで著名になった比嘉照夫さんだ。縁というものは不思議なものだ。

その他発刊されたもので注目されるものには、本連載Dで紹介した安里進『グスク・共同体・村落』(榕樹書林1998年)などがあるが、19世紀以前を対象とするものが中心で、20世紀以降を対象にしたものは、現在のところ、見出せない。今後の展開に期待するしかない。その点で、本「南城市の民俗」が役立てられることを期待したい。

※ つい先ごろ、玉城毅『琉球・沖縄寄留民の歴史人類学 移住者たちの生活戦術』(株式会社共和国2022年刊)が発刊された。未読だが、大きな示唆を含んでいそうな予感だ。読了検討後、本連載でもコメントすることになろう。

字誌・記念誌など、集落自身が作成したものは多いが、そのなかで本格的な字誌は、新里(2000年)、船越(2002年)、當山(2008年)、奥武島(2011年)、糸数(2012年)、津波古(2012年)などである。この後に発刊されたものはない。

このような本格的な字誌の作成刊行には、いくつかの条件が必要になる。まず経費捻出である。数百万円の経費を捻出できる字は、財政力が必要である。住民多数の力を結集するにしても、調査編集のためには、それだけの知恵を結集できる指導力をもつリーダーが必要となる。大学教員などの専門的研究者あるいは造詣の深い郷土史家、あるいはその地域において長年にわたってリーダー役割を取ってきた人などの存在は決定的に大きい。

とはいえ、字誌に迫る本格的な作業を積み重ね、過渡的に記念誌を刊行した集落など、次に字誌を編集刊行できそうな集落はいくつもありそうである。

その点で、「南城市の民俗」が今後の集落字誌作成の足がかりになることもありえよう。

2022年05月07日

20世紀後半の生活変化をいかに分析するか 南城論への旅F3

「2. 「勤め人」生活・学校・近代的生活・任意の関係・家族・個人」(p 17~18)で述べたことは、本書だけでなく、現在の「民俗」の研究の大きなテーマだろう。かいつまんで書くと、20世紀に入ってから現れ始めた変化は、当初はわずかな例だったが、戦後わけても1960年代以降は、大多数の人々を包みこみ、新しい様相を見せる。それは、生産の場としての職場、生活の場としての家族が分離し、人々の大多数が「勤め人」となる。消費生活は、金銭・商品の媒介で行われ、金銭が絶対的存在になっていく。子どもが、「勤め人」になっていくためには、学校で競争的に高い位置を占めることが求められる。

それらの過程で、人生・生活が、いわば宿命的な性格が色濃いありようから、選択的性格を強めていく。そこで人々にとって、共同体(シマ)の占める位置が低下し、家族・個人の占める位置が上昇していく。そのため、人々にとっての集落がもつ意味が低下し、「集落なしで生きていく」人が現れ増加していく。集落が存在しても、人々の生活と意識の

うえでは存在していないかのように見える人が増加していく。

この現象は、人々の生活を解明する民俗の研究にとって決定的な変化をもたらす。かつての民俗記述は、20世紀前半までの「集落が強力な存在意味」を持っていたものを対象にしていたが、その記述を消滅させていくのか、新たにどのように記述するのか、という問題を提起する。

それは、20世紀初めから遅くまで、民俗研究者を含めて、多くの沖縄知識人のモチーフとして存在していた、「前近代的なものから近代的なものへの移行」というテーマに対して、どうつきあうかにもつながった。それは、「進んだ」欧米や日本に対して、「遅れた」沖縄をどうするのか、というモチーフと重なっていた。

こうした構図の再検討を求め、新たな構図を構築する必要を迫るものである。

その意味では、これらの変化を、人々の生活レベルでの事実の発見確認を集積していくという性格をもつ、「南城市の民俗」の作業が、どういう役割を果たせるのだろうか。それは、「民俗」を、現時点において、ことさら「集落」レベルで叙述することの意味を問うものでもある。

2022年05月13日

集落の内からの流れと、集落の上からの流れ 南城論への旅F4

市史民俗編p18~20に書いた「住民が作る南城/集落、行政が作る南城/集落」に関わるコメントである。

集落(シマ)の統治については、集落の住民自身による内からの流れと、集落の外から、ないしは集落の上からの流れ、という二つの絡み合い、せめぎ合いのなかで展開してきたことへの着目の重要性に注目したい。今後、そのありように注目した更なる調査分析が求められる。

それに関しては、集落(シマ)の外、上からの統治のありようの歴史変化にかかわる研究が、沖縄全体について進められてきた。住民の内側からの動きについて、とくに上からの流れへの異議申し立てについては、これまでもある程度の研究蓄積がある。南城市域で本文で言及した例でいうと、明治期末に漁船への課税をめぐる異議申し立ての動き、あるいは昭和戦前期および戦後期における小学校の分校設置や統合をめぐる動き、戦後の米軍統治下において、米軍による水使用をめぐる集落(シマ)住民による対抗運動などがある。本文には記述していないが、ごみ焼却施設建設地をめぐる集落(シマ)と市町村行政との緊張関係などもある。

それらの特性として、集落(シマ)の住民のかなりを巻き込んで、ときには「シマぐるみ」いえるほど巻き込んだ活動であった点が注目される。

一九世紀末までは、王府=薩摩による統治、および沖縄県庁統治のもとで、統治勢力→集落への流れが強く、逆の流れを圧倒していた。両者の力関係を示すものとして、集落(シマ)代表者の任命が、外ないし上の勢力によって行われることが通例だったことがある。無論、内側のシマ住民意思を無視することはできないから、それらに配慮を示すこともあったろう。そうした上からの任命が、20世紀に入って以降、集落内での選出に移っていく。

もう一つ注目したいのは、統治制度の中で正規の存在として集落(シマ)が位置づけられていた状態が、二〇世紀に入って以降、補助的機能に「格下げ」されていったことである。統治制度としては、行政としての村が中心になる。集落の代表者(区長)も、行政任命による行政制度の役員ではなく、必要に応じて、行政業務を補助する役目を担いつつも、中心は集落の自治的運営のために、集落自らが、集落運営の必要に基づいて選出するものとなった。

区長の選出の多くは、推薦制などを活用して「話し合い」で選出するが、時には投票による選挙がおこなわれることもある。それらについては、「八、集落の自治組織と集落運営」(p157～)で詳述した。

2022年05月19日

集落役員の選出方法の変化 南城論への旅F5

前回述べたことは、時代進行に伴って変化していく。近世以前についての詳細は不明な点が多い。しかし、首里王府支配から明治政府支配へと移行するなかで、シマの代表者・役員は、地方役人層が占める点で変化はないとしても、上ないしは外からの任命から、地方役人層たちによる互選、ないしは彼らによる推薦に基づいて、上ないしは外から任命する形へと徐々に移行していったであろう。さらに町村制がつくられ、郡役所が廃止されるなかで、地方役人層による互選が強まり、さらに地方役人層以外の住民も参加しての選出へと移行していったであろう。また、地方役人層といったものが存在しない屋取村では、住民のなかでの有力者(たとえば家系上の有力者)たちが選ばれる形がはじまっていただろう。

そして、戦後に入れば、特定の家出身者に限定されることなく、リーダー的役割を果たせそうな人物を選んでいく傾向が強まる。選挙の形を取る所も増えていく。

これらの変化のなかで、旧地方役人層に限定されなくなっていくが、それは土地売買、起業などによって経済的に有力になったもの、役所吏員経験者や議員経験者など、地方行政にかかわる実務能力および発言力のあるもの、読み書き算ができるものなどが、新たなリーダーシップを持つ者になっていったことだろう。そのあたりの調査研究が求められる。幸いなことに、明治末期からの歴代区長の一覧を残している集落が多いので、そのあたりの分析の手がかりとなるであろう。

また、集落の決定機関である評議員には、こうした人物を含んだが、それには集落住民であるかないかを問わず小学校教員を含むこともあった。

かれらには、長年の経験と知恵を生かすことができ、住民の信望が厚い長老型タイプが多い。また、「シマ起こし」機運が高まる時や、戦争直後など集落の危機打開が求められる時には、先頭を切って行動する力統率性に優れたタイプが登場することも多かった。その際に年齢は問われず、30代区長もいた。

このように、長い時間を経て、任命制の色彩が濃いものから住民のなかから住民自身が選ぶものへと転化していく。だが、これらの役員のほとんどが男性によって占められてきた。そうした状況がいつからだったか、確かなことは未解明のことである。とくに、明治民法下で家父長的色彩が濃くなる戦前期では女性役員は、きわめて限定的なことだった。p178～179に書いたが、戦後になってようやく女性役員が登場し、やがて増えていく。だが、こうした集落役員のジェンダー的偏りについては未解明に近い。

2022年05月25日

市町村と集落 南城論への旅F6

20世紀に入って以降の集落は、集落独自の知恵と協力協同によって、集落独自の多くの活動を展開してきたことが注目される。とくに、沖縄戦末期から戦後数年間は、行政単位としての村が機能マヒになる中、集落（シマ）は、否応なしに住民自治としての機能を高める。その時期は、集落および住民の存亡にかかわる危機のなかにあり、それだけに集落と住民の「生命」「生命力」を守り抜く（時には、自死させたこともある）動向が作られる。

内から外への流れで重要なものとして、選挙がある。代表的には、市町村長、市町村議会議員選挙である。とくに議員選挙は、集落と深い関係が作られた。

集落が選挙区となることはないにしても、選挙活動の母体になりやすかったし、議員は、町村全体にかかわると同等、ないしは同等以上に集落のために活動した。

合併以前の4町村時期には、議員定数が集落数に近いこともあって、各集落代表が出馬し、当選する例が多かった。集落人数が少ない集落は、いくつかの集落と連携して、選挙戦を行った。多い所は、複数立候補者を出した。多くの場合、集落の基礎票で、当選するようにはからい、議員は集落代表的な性格を帯びた。

そこで、集落の議決機関でもある評議員会の正式メンバーとして、議員が位置付けられる集落が多かった。評議員には、集落役員のほかに、議員、教育関係者、知識人などが任命された。

こうした事態に大きな変更が生まれたのは、四町村合併によって生まれた南城市議会の議員定数が20名になって以降のことだ。71の集落があるので、集落代表として議員を送り出すことが難しくなった集落が多い。それでも100人以上の人口を擁する集落は送り出すことができたが、いくつかの集落に限られた。そこで、旧町村単位の枠内でいくつかの集落が連携して議員を送り出す例も生まれる。他方で、集落や旧町村を越えて横断的に集票する候補者が増えていく。市全体のありようにかかわる政策を前面に出す候補者、女性票青年表など特定層から集票する候補者が登場してくる。

こうして、集落代表的性格を帯びる議員の存在は例外的になってくる。それができる集落でも、政策が対照的な複数の候補者でしのぎを削り合う例が出てくる。

こうして、全体として、都市的色彩が濃い選挙となってくる。選挙に限定して述べてきたが、それは政治のありよう、政治に対する住民意識の変化と並行している。政治を集落単位にイメージしていたものが、より広範な視野からの選択として捉える人が増えていく。

以上、戦後、とくに近年の動向について述べたが、それ以前からのことを含めて、政治構図のなかで、集落がどう位置づいてきたかについては、さらなる調査探究が求められる。

2022年05月31日

集落と市町村行政 南城論への旅 F7

諸分野の近年の研究では、市町村など自治体のなかでの集落（シマ）の存在の強さが、沖縄とくに農村地域の特性であることが指摘される。その象徴として、集落単位の公民館の存在があり、集落自治の中心場であるとともに、市町村行政の補助機能を果たしてきたことがある。現在においても、その特性は、ほとんどの集落において維持されている。

それらは、集落独自の諸事業としてあらわれる。祭などの長い歴史をもつものだけでなく、新規に多様な事業・イベントを展開する集落も多い。それに市町村行政が補助金を出すことも続いてきた。

市町村などの自治体が主催する行事にも、集落単位で行われる例があり、時に集落間対抗・競争の様相を呈することもある。19世紀から形を変えつつ戦後のある時期まで続いてきた「原勝負」が象徴的存在である。現在では、宇対抗体育協会行事ぐらいに限られてきたとはいえ、集落が重要な位置を占めている点に注目しなくてはならない。

集落単位の活動に比べて、市レベルでの取り組み、市民全体を対照にした取り組みは、発足後それほどの年数が経過していない南城市は、いまま「発展途上」段階にあるとあってよいだろう。その発展を促すものの一つとして、「ゆるきゃら」のナンジィの活用があり、「ハートのまち南城」というキャッチフレーズもそうであろう。さらに『こどものまち』宣言（2021年）もその一つと言えよう。

また、住民自治において「下から上へ」の流れを作る点で、近年では市民参加型ワークショップによって、諸施策の立案のための基礎作業を行う活動も注目される。

こうした変化と並行して、集落にこだわりのない住民、いってみれば流動性の高い都市型住民が増加している。そうした流動性のある住民が、集落を越えた市町村が主催する活動に参加するなかで、自治体あるいは任意団体主催の活動やイベントが増えている。よく行われる海岸清掃なども、以前なら地域活動として集落がかかわってもたれた行事等も、集落とは関係なしにボランティア団体主催で行われる例が増えている。

また、人々が、市外、さらには県外に出かけ、出身地を自己紹介する際に、集落名を使うことが減多にないどころか、市町村名さえ出さずに、「沖縄です」とどめる例が増えている。そうした点では、集落にこだわることは大幅に低くなっている。いいかえると、集落存在が拡散し希薄になってきているといえるかもしれない。それだけに逆に、そうした状況への危機感を持ち、集落への関心・こだわりを強め、集落としての活動を考える動きも広がっているのが、近年の特質だともいえよう。ムラヤー（宇公民館）活動をバックアップする取り組みを南城市が展開しているのも、そのことにかかわっているだろう。

2022年06月06日

自然災害についての調査研究と叙述（前） 南城論への旅F8

市史の次の節、「(三) 自然と集落」(p20～26)にかかわって、人々の暮らしに大きな影響を与えた自然変化には、歴史的に見てどのようなものがあつたらうか、に注目し補足したい。

※ ここで述べることは、十 集落の活動 (六) 災害対応・秩序維持 (p230～232) の記述も関連する。自然変化を列挙してみよう。

・水田開発。古くは一〇、一一世紀からだが、大規模には近世における湿地などの水田化がある。本文に書いた船越での雄樋川沿いの低地が典型例だろう。

・津波への対応 「有史以来」といえそうな約1000年間に、どれだけのものがあつたらうか。この点の調査研究の蓄積は少ない。多くが埋もれたままになっていそうだ。

・地すべり とくに中城湾沿いの地域は、地すべり多発地帯で古くから知られており、くりかえし大災害に襲われている。とくに1959年の新里周辺のものは大災害で、詳しい記録が残されている。

・台風による災害。戦後復興の時期に台風災害で苦勞した記録記述をみかける、台風関連の歴史記述は、被害の大きさに比べれば少ないといえるかもしれない。

同様に、地震と地震災害の記述は多くない。

火災についてのいくつかの記述があるが、十分な調査研究が蓄積されているとはいいがたい。

- ・戦争。艦砲射撃を含む戦争による自然破壊。住民の燃料確保のための山林の過剰伐採。
- ・道路をはじめとする公共工事に伴う自然変化。
- ・新開をはじめとする海面の埋め立て。
- ・住宅地開発。近年話題になっている盛り土などを誘因とする地すべりの調査研究が求められる。
- ・海岸汚染。下水の排水、農薬使用に起因する汚染。海岸線の大量ゴミ・漂着物対処。観光にも、そうした配慮が求められる。
- ・地下水 湧水。1970年代まで多くは集落ごとに簡易水道が設置されていた。北部ダムを主水源とする全県的な上水道網の整備にもとない、使用されなくなった。多くの集落にいくつもあるカー（井戸）は、現在「拝み」の対象になってはいるが、水使用の用途にはほぼ使われていない。

除草剤など農薬散布による地下水汚染も視野に入れた調査検討が求められよう。

2022年06月12日

自然災害についての調査研究と叙述（後） 南城論への旅F9

前回並べたものを見ると、ここ100年余り、わけても戦後におけるものが多い。それは比較的新しくて人々の記憶にまだ残っているためもあるだろうが、この間、人間による開発（自然改造）の急激な進行がかかわっているともいえよう。

それに対して、自治体は防災部局を整備し、防災計画をたて、諸対策を行い始めた。それに対応して、集落ごとに、防災対策の準備を進めている。ことに東日本大震災以降、進んでいる。その点では、集落単位の防災システムの確立強化の歴史の研究が必要であろう。

もう一つ、自然にかかわってというと、人間による開発が自然環境・人工環境のいずれにおいても、景観としてどうであろうか、と言う問いが広がってきている。観光を「魅力」あるものとする点でも重要なことである。海岸線が防波堤工事などにより、自然海岸と言えるものが、現在では百名ビーチ周辺など極めて限定されていることも、その一例だろう。また、電線網の進展に伴う景観の変更をはじめとする建造物による自然改造は大きい。最近、地域限定の景観維持協定のようなもの締結や電線地中化工事が進んでいる点は、新たな動向である。

自然豊かな環境を守り、自然とつながり、楽しみ、癒しを得るといった動向の広がり注目した調査研究が求められる。その一つとして、今述べた景観保全・景観形成の活動を位置づけた調査研究も必要であろう。

1972年の「復帰」後、とくに1970~1990年代において、公共工事によるインフラ整備のなかで、大規模開発工事がすすめられ、自然環境の改変が進行した。そのことが、工事区域のある集落と住民の意向とどうかかわっていたのだろうか。残念ながら、それにかかわる歴史研究は、それほど行われていず、今後の課題として残されている。たとえば、次のような件ではどうだったのだろうか。

- ・玉城・中山海岸に設置する案があったといわれる火力発電所
- ・新開のような埋め立て計画が他にあったかどうか。それをめぐる動き
- ・ヤハラヅカサ周辺に観光宿泊施設類を建築する計画の経緯と結末
- ・護岸工事および河川の三面貼り工事と自然環境保持・景観との絡み合い
- ・ゴルフ場設置計画 スクナムイの景観変化

これらについての記録や研究は未着手に近いだけでなく、字誌などに登場することも少ない。今回の調査の聞き取りにもほとんど登場しない。今後の調査研究が必要だろう。

※ 市史「民俗編」の私の執筆担当箇所（p 353）について、貴重な指摘をいただいた。字中山の姓が戦前はすべて「當山」であったという記述は不正確で、現「中山」姓の方々は、戦前「知念」姓を名乗っていたとのこと。調査不十分で、訂正が必要になったことを報告するとともに、ご指摘に感謝する。

2022年06月18日

時代区分 南城論への旅 F10

『南城の民俗』で私が執筆した箇所のなかの「(四) 集落の激変期」(p 26～32)の節では、執筆作業当初、時代区分ないしは時期区分について書いていたが、時代区分ないしは時期区分をするほどには、情報収集、研究蓄積がすすんではいけないことに気付き、激変期の概況を示すことにとどめることにした。

制度史や政治史なら、特定の事件・制度変更などを指標にして時代を区分し、それ以降を〇〇時代などと表現することが可能だろうが、人々の暮らし(民俗)、そして集落の歴史では、それはなかなか難しい。かなりの研究蓄積と工夫をもとに可能になるものだろう。そしてその際にも有力な指標が必要となる。

たとえば、沖縄戦の終了と米軍統治の開始、日本「復帰」などはわかりやすい。だが、その類が、暮らし(民俗)、集落の歴史に直結することは多くない。

加えて言うと、歴史関連書には年表が付随することが多いが、民俗関連書では少ない。個々の集落に関連する書では可能であり、字誌に付随することが結構ある。だが、71もの集落の全体を通しての年表を作るには難しさがある。

それにしても、不可能ではないし、その年表めいたものをもとに時期区分時代区分することも、いつかはできるだろう。

その作業の一例として、南城市域の集落史年表で使えるような事項をいくつか、参考例として、おおよそ時期順にあげておこう。

現集落地への移動 現集落地への最初のメンバーの移住 甘蔗作付け制限の撤廃
 第一回徴兵検査の実施と集落出身の最初の軍人 小学校就学率が九〇%を超える
 集落自身による区長の選任 共同売店の設立 〇〇～◇□区間のバスの開通
 小学校分校の集落内設置 ガマへの避難のなか戦争による集落住居の大半の焼失
 住民収容所からの元の集落への帰還 集落名称の〇〇への変更
 旧公民館が台風で倒壊 大半の住民が洋服を着始める 親子ラジオの設置

簡易水道設置 字老人会結成 さつまいも主食が米主食にかわる
 瓦屋根からコンクリート屋根への変化 火葬場の設置にともなう葬儀の変化 龕の廃止
 現公民館の建築 女性区長の誕生 青年会の長期休業
 集落内商店の消滅

こうした事件とは別に、集落住民の動向にかかわる統計的指標があればよいが、データ取得作成はなかなか難しい。それでも可能ならば有力な指標になる例をあげてみよう。

通婚範囲の集落外への拡大 (集落内結婚よりも集落を越えた結婚の一般化)
 専業農業率が50%を下回る (または、第二次第三次産業就業率が、50%を超える)
 区費納入率が、80%を下回る

2022年06月24日

「近代化」というテーマ 「外」ないしは「上」から統治する側からの眼 南城論への旅F11

時期区分ができたとするなら、その時代の命名が必要になる。その際に、その時代の底流にあるテーマを浮き彫りにして命名する必要がある。その一例は、19世紀末に浮上し始め、20世紀末近くまで、統治者の施策、そして人々の生活および意識に強く深い影響をもたらしたものとして、「近代化」という用語を使うことだ。

「近代化」というテーマには、どういう視点からとらえるか、という点でいくつかのものがある。

まず、「外」ないしは「上」から統治する側からの眼がある。

そこには、「近代化していないもの」=「遅れたもの」ないしは「未開のもの」を「開発する」「引き上げる」あるいは「旧慣を脱する」といったといった視点が強く見られる。同じことは、欧米と日本との関係でも使われた。「遅れた日本を近代化し、欧化する」というものである。そして、そうした「近代化」構図には、「欧米→日本→国内外の未開地域・アジア諸地域」というタテ型構図にもとづく見方が含まれている。

「近代化」と似た言葉として「同化」という言葉も使われる。「日本を欧米に同化する」「沖縄を日本に同化する」「アジアを日本に同化する」、さらに「外国人を日本に同化する」といった具合に、である。それを巧みに表現した言葉として「脱亜入欧」がある。コミカルめいた表現として「(現代言葉にアレンジすると)クシャミまで日本風に」がある。こうしたありようでは、「同化程度」が「近代化程度」と同じことを意味するようになる。なお、日本やアジア諸地域を「近代化」「同化」する際に、時期によっては「皇民化」という言葉も使用されたことに留意する必要がある。

これらは、「近代化程度」をはかる基準として、「欧米」や「日本」を上位に位置付けて設定する点に特質がある。

こうしたことを推進するのは、統治機関・統治者たちが中心となるが、知識人にもそれに加勢する振る舞い・発言の例が多い。未開の人(「蒙」者)の眼を開く(「啓く」という意味の「啓蒙」という言葉にふさわしい振る舞い・発言である。沖縄でも、20世紀の初めから末まで、こうした眼をもって語る知識人は多かった。とくに行政機関、教育機関で働く人は、そうした啓蒙者的役割を担うよう躰けられてきた。「遅れた沖縄を進んだ本土(日本)並みに引き上げよう」というのである。そうした視点の名残は21世紀まで見られる。全国学力テストの成績を「本土並みに引き上げる」と

いうスローガンは、その象徴的なものであった。

なお、これらの主張は、整備設置が遅れたインフラを「本土並み」にするという発想とは区別する必要がある。同じく基地を「本土並み」に縮小するという主張もまた別の次元のものである。

2022年06月30日

「近代化」というテーマ 内側からの眼、住民自身の眼 南城論への旅 F12

上からの眼と対照的なものとして、集落の内側からの眼、住民自身の眼がある。それを端的に言うと、「住民自身の知恵と努力の積み上げてつくる内発的な動きを大切にしよう」ということだろう。学術上は、「内発的」「自律的」という言葉がよく使われる。それは、集落の内側と言うだけでなく、諸集落を集約した存在である「沖縄」を、「欧米」「日本」と対比して語る際にも、同様なものがあらわれてくる。

そうした眼を持った振る舞い・発言には、多様なものがある。並べてみよう。

- A シマクトゥバを禁止して日本語を使うようにするのではなく、日本語など諸言語とからみ合わせて、シマクトゥバを生活言語として豊かにするだけでなく、論理言語としてもより洗練されたものにしたい。なお、集落ごとの特性があるシマクトゥバを「超えて」統一的な言語として首里語の使用をすすめる動向も強かったことに留意したい。
- B 西洋中心、ないしは日本本土の応用としての歴史理解ではなく、沖縄独自の歴史展開を解明する。
- C 沖縄のなかで長年にわたって作られてきた文化をもとに、さらにそれを発展させるものとして、「近代化」を位置づけよう。
- D 和装洋装におされて、消滅危機にある琉装を再興し、あるいは芭蕉布や芋麻による上布など地元産による衣類製作を盛り上げていく。その一つとして、かりゆしウェアを一層洗練させるとともに多様な形で普及していく。
- E 洗濯機などを共同購入して、手による洗濯ではなく、機械化をすすめ、家事の合理化をはかる。それを含む新生活運動をおすすめよう。
- F 集落内に（共同）売店ができて便利になった歴史体験を振り返り、スーパーやコンビニに過剰依存せず、地元商店を活性化させよう。
- G 農業への機械の導入で生産力を飛躍的に上昇させる。沖縄の風土に適合した農業を活性化させる。地産地消を活性化し流通をつくり上げる。

これらには、Aのように、従来は「近代化」とは呼ばれなかったものも含まれている。また、前回述べた「上」からの取組みを、住民が受けとめ取り組むものもある。Eなどはその典型だろう。

また、これらの動きを集約して、「沖縄独自」の追求といたり、さらに「沖縄独自」にとどめずに「沖縄独立」を追求する志向のなかで考える眼も見られる。しかし、それらの多くは、「沖縄独立」というよりも、沖縄自立自律を追求するものであろう。なかには、日本全体の動きを沖縄という地域において具体化するものだというとらえ方もある。Gなどはその例だろう。それは、沖縄をはじめとする全国の地域からの動きを結集して、日本というものを、ボトムアップで作り出すという発想をもつものでもある。A B C D F Gなどには、そうした事例が多い。

これらは沖縄全体のなかで一定の勢いをもってきたが、しかしながら、集落レベルでの自立的自律的な展開を具体化して見せることに至らないものが多い。

2022年07月07日

「近代化」をめぐる多様な論点 合理化 科学 門中化 南城論への旅 F13

これまで述べてきたように、「近代化」には多様なイメージがある。そのなかで、「同化」「自立」「自律」といった類似のカテゴリーではなく、「近代化」というカテゴリーを使うことによって生じる多様な論点を並べておこう。

1) まず、近代化を、合理化、便利、効率化といったものに引き寄せるとらえ方がある。生産や生活場面でよく使われる。

2) 近代化を科学化と捉える見方がある。論理的実証的実験的に証明できる正しさ、真理を追究するなかで語られることである。それはユタ・三世相などの「判じ」を含めて、迷信等非科学的なものを排除する。また、科学を応用して技術発展を追求することで、1)の合理化効率化につながっていく。1) 2)の多くは、西欧に起源をもつ「近代」規定にもとづくものである。

3) 西洋起源でないものと言うと、インド起源とかイスラム起源などがあるが、沖縄にかかわっている、東洋起源のものがある。それは、沖縄でも18世紀以降に主として中国から盛んに紹介導入されたものである。

たとえば蔡温が主導した儒教型「合理化」とでもいえるもので、風水学などを含んだ、自然把握にかかわる「合理的」思考がある、当時においては、今日いわれる「科学」に類似したもので、風水学などは、現代の地理学に相当すると捉える人もいる。また、鍼灸を利用した施術や、薬草を活用する「本草学」なども、そうした類といえよう。

4) 人間関係における「近代化」があり、しばしば封建的な身分秩序を抜け出すという意味合いをもって使われることがある。その際、家父長制度と、その性格を多分にもつ門中化が、19世紀末から20世紀にかけて広がってきたことを、「近代化」との関係でいかにとらえるか、と言う問題が浮上する。

「門中化」は、一般庶民においては、19世紀末から広がりを見せたものであり、家父長的色彩が濃く儒教的要素をもつ明治民法が、それを促進してきた。戦後の民法は建前としては家父長と縁が薄いとはいいながらも、現代に至るまで家父長の様相が強く残るジョンダー秩序が確固として存在している。

「門中化」は、士族習慣にならおうとするものだろうが、20世紀には一般庶民が階層上昇をはかる意味合いで受け入れていった経緯がある。一般庶民の意識として、それが「近代化」「合理化」にあたるものとして受け取られたのかもしれない。なお「門中化」過程で、ユタの「判じ」に頼ることも広く行われたが、その「判じ」は、家父長的色彩の濃いものが多く、近世士族で広まり、明治政府下での儒教イデオロギー活用とも響き合っていた。

このように、これらの問題は複雑である。「近代化」「反近代化」と一律に裁断できるものではなからう。したがって、以上述べてきたことを「近代化」とのからみで、どう捉えたらよいか、難問の一つといえよう。

2022年07月12日

風俗改良運動 資本主義の浸透 個人化と共同体の弱まり 学校 南城論への旅 F14

5) 「近代化」の視野の中で行なわれたものとして、20世紀初頭の風俗改良運動や1960年ごろの生活合理化運動

(新生活運動)がある。断髪・ハジチ禁止、方言禁止共通語強制、衛生改善、衣食住の洋風化等が行われた。連載12回で述べたE洗濯機の共同購入などもその一例である。

それらは、迷信などから離脱し、科学的に行動するという意味での合理化でもあった。しかし、方言禁止・琉装排除などは、「近代化」というよりも、日本への「同化」である。その際、それらを「遅れている」と判断して推進したことにも、一つの特徴がある。

6) 市場対応 金銭・商品対応

資本主義の浸透を「近代化」と捉える見方である。沖縄では、20世紀に入る頃から急激に進行するが、とくに1960年代以降、日本本土の高度経済成長と並行して大量生産大量消費の波がおとずれ、また「復帰」以降、大規模な公共工事のなかで、資本主義経済は人々の日常生活レベルに深く浸透した。そして、近年ではITや観光を軸にして展開している。だが、平均県民所得は低く、「遅れた沖縄」を象徴するものとなっている。だが、資本主義の浸透の遅れを「遅れ」とみなすことには異論もあろう。

7) 個人化 共同性の弱化

資本主義の浸透は、個人単位の広がりでもある。個人は市場の単位であり、市場での行動主体は個人である。また、個人とみなされる法人、その多くを占める会社組織の広がりでもある。そのため、職業・居住地の移動の自由を承認しつつ、個人としての自立を求めるものである。

だが、それは、個人単位での弱肉強食を生み出し、競争が日常化し、共同的关系を阻害する。そのなかで、地域の共同体は弱まっていき、人々の生活に占める共同体の役割を希薄にしていく。そして、金銭や物を「信仰」するありようを広げる。それらは、結果として個人間格差を広げていき、リスクになっていく。

8) 学校と近代化

以上述べてきたことは、学校をめぐる追求されるとともに、学校は近代化の中心的推進主体とされてきた。そこにおける近代化の多くは「同化」的性格(欧米への同化、日本への同化)を色濃く帯びるものであった。そして、沖縄では、5)で述べたことと同様に、「同化」的要素を濃厚に帯び、「遅れた沖縄」を『日本に追いつく』ようにする役目の中心的役割を学校が果たしてきた。その体質は、21世紀に入ってもなお、『学力テスト』に象徴的に見られるように、継続している。

2022年07月18日

西洋医学 沖縄アイデンティティ 南城論への旅 F15

9) 西洋医学への対応

19世紀末に導入された西洋医学は、それまでの東洋医学や民間医療を押しよせ、医療の中心位置を占めていく。それは「近代化」そのものと見られてきた。

そして、行政と結んで、医療のみならず衛生を推進していく。それはたとえば感染症による死者を激減させ、平均寿命を引き上げていく。と同時に、人々の西洋医学への過剰依存を生み出す。産や死にかかわるのは病院であるというのが、その象徴的事態といえよう。とともに、人々の自己の身体への主体的かかわりを弱めていく。そして、東洋医学や民間医療は、古くて非科学的非近代的なもののみなされてきたが、それでもなお、人々の一定の支持をえて、また一部は西洋医学のなかでも認められて、継続している。

10) 沖縄アイデンティティ

20～21世紀は、それ以前と比べると、人の移動が激しくなる。集落（シマ）を越えた移動が日常化していく。加えて、沖縄地域を越えた移動が急拡大していく。一生沖縄外に出たことがない人がほとんどであった状況が激変した。移民・出稼ぎ・進学就職に伴うものに加えて、結婚などによる生活地の移動も増えていく。沖縄外への移住とまでではなく、沖縄内への移住も増えてきた。小学校で、どちらかの親の生育地が沖縄外である子どもの比率は、1～2割を超えることがごく普通になってきた。

こうしたことが、沖縄アイデンティティを意識することを日常化させる。加えて、グローバル化の進展が、沖縄アイデンティティへの問いを加重していく。その背景には、19世紀ごろより広がる〈国民国家〉を鍵概念にして、世界を捉える動向が、沖縄をもおおってきたことがある。19世紀における、中国・日本とのからみあい、戦後における、アメリカと日本とのからみあいが、沖縄および住民のアイデンティティ問題を、〈国民国家〉を鍵概念として捉えることを一般化していく。そのなかで、いずれかの国に限定してかかわるのではなく、「沖縄独自」を追求する動きが作られていく。それを国民国家レベルで志向するものの一つとして、「沖縄独立論」がある。これらを「近代」特有の現象として捉える見方が広く存在している。

こうしたことが、沖縄にかかわりをもつ人々に、自己アイデンティティを沖縄とかかわらせて考えることを求めてきた。それが、個人レベルにおける「近代化」とからんでくるのが、一つの特徴をなしている。

また、しばしば登場する「海外雄飛」の発想は、地域や国を越えたタテ型秩序のなかでの上昇志向を潜ませることがある。それは、多文化共同の追求とは微妙に異なる。

ところで、「琉球王国」「琉球の時代」が強調され始めたのは1980年代であるが、それは、〈国民国家〉的な世界観時代観が、沖縄でも広がってきたことを反映するものである。〈国民国家〉状況に沖縄が追い込まれたのは、1870年代以降であるが、一般の人々が、この問題に強い関心をもつのは、1950年代の「復帰」運動以降である。それが、沖縄のアイデンティティ、沖縄住民のアイデンティティへの関心を強め、1980年代には、「琉球王国」「琉球の時代」への関心が広がり、首里城を沖縄アイデンティティの象徴とみなす人を増やしてきた。

だが、〈国民国家〉的発想で沖縄アイデンティティをとらえることは、中国か日本か、アメリカか日本か、それとも沖縄独立か、という〈国民国家〉的枠組を強めることにつながる。

2022年07月24日

近代化の後 南城論への旅 F16

11) 脱近代という見方

1) から10) まで述べた「近代化」そのものを問い直す動きが、世界的には1980年代以降、活発になってきている。それらは、ポストモダン、脱近代、後期近代、再帰的近代、第二の近代などと、色々な用語を使って展開されている。これまでの「近代化」へのオールタナティブを探求する動きといってもよいだろう。

これまで述べてきた「近代化」は、「遅れた」とみられた沖縄においては、「進んだ」欧米や日本に「追いつく」ことを求める「発展途上」の過程にあったとされていた。それは、右上がり経済成長を追求して大量生産大量消費の実現をはかる画一的競争型の色彩を色濃く持っていた。そうしたありように対して疑問が広がり、オールタナティブなものを探求する動きが、1980年代ころより、少しずつ芽生え、21世紀に入るところから盛んになっていく。

大量消費から生まれ問題性をこえるために、持続可能性が強調され、生活レベルでのスローライフやロハスを求める動きが広がってくる。また、誰かに任せるというのではなく、住民参加型で進んでいく。また、住民移動が活発化し、多様な住民が生まれる中で、多文化共同型での追求となっていく。メディアの世界でいうと、大量メディアの氾濫状況から、メディアリテラシーを追求し、マスメディアに任せないで、個々人が発信することが広がり始めた。

当初は、こうした問題に関心をもつ意識的な人々の動きだったが、それが広汎な動きとなっていく。地域でいうと、住民運動が広がり、従来の集落の在り方が問われ始め、最近では「集落消滅」を含む激変が、広く関心がもたれるようになり、集落の存在価値と再生を求める動きが広がっていく。その際、右上がり経済の文脈ではなく、コミュニティのつながりを、かつての共同体的なありようとは異なる住民の自発的参加にもとづいて展開する動きが広がり始める。

こうした動きは、沖縄と沖縄集落の今後を捉えるうえで、重要な示唆を与えるものであり、私の関心事でもあるが、現時点では、これ以上の論述を進める用意が、私にはまだない。他日を期したい

連載11からはじまった本題に戻って言うと、このように多様な意味合いをもつ「近代化」ないしはそれに代わる用語を使用して、時代を表す適切なタイトルを命名する作業が進んでいこう。いずれ、私なりの用語使用を始められることを期したい。

2022年07月30日

玉城毅著書 屋取集落には農民層も多い 親慶原 新川 南城論への旅 F17

さて、この連載の流れにもどって、『南城市の民俗』編の「二. 集落の成立・統合・分立・消滅・変容」(p 33~60)に入ろう。その中の「屋取村」(p 39~41)をめぐる、すでに紹介した玉城毅「琉球・沖縄寄留民の歴史人類学」(共和国2022年刊)を、ようやく一読したので、それから示唆を受けた点を紹介コメントしておこう。

まず、屋取村は、土族層がつくった集落であるという通念の修正を求める記述に注目したい。南城市域の事例も登場する。

『琉球新報』1898年10月19日記事に、現在隣接する親慶原に多くの人々が居住している旧新川(ミーガー)屋取についての記述があり、それに著者は触れて、旧土族ではない寄留人の存在について語っている。まず、同書が引用している琉球新報記事を紹介しておこう。

「島尻郡玉城間切垣花、仲村渠村の百姓地の内には荒蕪地多く、此が為め移住者を募りたれど、元来荒蕪地付近に飲料水なきに依り募集に応ずるものなかりしより、四、五十年前下知役検者間切吏員等の協議を以て、間切費にて一の井戸を作りたれば、移住者続々現はれ今日に至りては「新川ヤードイ」を称する一部落をなすに至れり。」 p 196

実は、私の旧知の方の一人が、この「新川ヤードイ」出身の方であり、お話を聞く機会があった。何代か前の人が勝連半島あたりから、この地に移住してきて暮らしていたが、戦争と戦後のCGS建設で追い出され、親慶原の現在地に生活をはじめ、CGSに勤務していたという。その「新川ヤードイ」出身者で会をつくり、いまなお、定期的に「御願」を行っているということだ。

この例は、土族層ではなく、他地域の農村からの移住として注目される。ここ新川のように、一つの集落を形成するほどではなく、他地域からきて富農の家で住み込みで働く(イリチリー)例は、いくつもの集落でみられたようであり、

農村地域での農民層の移住は、珍しい例ではなさそうだ。それにしても、このあたりの調査研究は多くないので、今後の課題となっている。

次の引用は、玉城書が主要な調査研究対象にしている、南城市域に隣接する K 屋取の事例である。

「K 屋取は約半数が旧百姓層で占められており、百姓層の K 屋取への移住は近世に遡るケースも少なくなかった。このことは、人口が流動的なのは土族層だけでなく、百姓層もまた移動していたことをいみしている。近世の百姓層が移住したのは、「家内倒れ」した人びとだった可能性がある。」 p 243

なお、ここで、「家内倒れ」というのは、負担すべき貢納が収めきれずに、その集落から離れる事例を指している。

2022年08月05日

屋取集落 富農の生成 南城論への旅 F18

古村にしても屋取村にしても、富農層が生まれてくる。「南城の民俗」(p 39)には、古村である船越(富名腰)の事例を紹介したが、地方役人を中心とする農民層ではなく、首里から移住してきた土族層にも出現してくる。玉城書は湧稲国の例を『球陽』掲載事例をもとに、次のように紹介している。

「首里から移住してきた3名は、近隣の屋取層や一般農民層に農業方法を教えたり、種苗の援助を行ったり、病人を出した家族に援助したりしたので、1806年に王府が表彰したという記事である。かれらは、その後も戦前昭和期に至るまで、富農として、近隣地域の有力者を形成していく。」 p 207-208

私は、これまで地方役人層の富農化については述べてきたが、屋取村の旧土族層の富農化については述べてこなかったので、補足する必要があるようだ。その際、以下の玉城書のいくつかの指摘に留意したい。

「大多数の居住人は、村の「浮掛地」を借りて小作をしており、このような状況は、一八九九(明治三十二)年から一九〇三(明治三十六)年にかけて行われた土地整理(地割制廃止)まで続いた。そして、地割制廃止により村の共有地が私有化されると、それまで小作をしていた居住人が私有地を獲得するケースが出てきた。」 p 208-9

「地割制は、村を範囲に地人が土地を共同利用する慣行であり、地割制下の村では、外部からの移住者である寄留民が入りこむ余地が、少なくとも制度的にはなかった。しかし実態としては、共有地である百姓地が売買されたり、百姓地の一部を浮掛地として小作に出したりする流動的な状況があった。地割制の実態は、間切、村によって異なり、それが寄留民のヴァリエーションと関連していた。(中略) 富裕な寄留民は、屋取形成の中心的な担い手となった。近世と近代移行期の村の流動性こそが、寄留民たちの経済的な展開を可能する重要な条件であった。」 p 212-3

「土地整理(地割制廃止)は、屋取の形成を促した制度改変であった。それによって、寄留民の土地へのアクセスが自由になり、土地集積が促進された。」 p 213

K 屋取 「明治期に K 屋取と A ムラはすでに村落として並立していた。これは、一九〇八(明治四十一)年の島嶼町村制の施行と共に設定された部落の「区長」が K 屋取からも選出されていることに表われている。近代の新しい地方制度が敷かれた当初から K 屋取は A ムラに従属してはいなかった。」 p 220

南城市域でも、『南城の民俗』 p 40で紹介したように、同じような経過をたどった「屋取村」は多い。

2022年08月11日

<きょうだい> 玉城論 南城論への旅 F19

玉城著書で新しい問題提起として注目されるのは、<きょうだい>にかかわる記述である。それは、タテ型の門中に象徴される父系親族集団だけでなく、<きょうだい>（チョーデー、チュチョーデー）というヨコ関係が、農村地域、わけても屋取集落で重要な役割を担ったという指摘である。玉城著書からいくつか紹介しておこう。

「移住者の社会文化的特徴は、従来の研究では十分捉えられてこなかった。門中が祖先と子孫というタテの関係を基点として展開した文化的観念あるいは集団であるのに対して、<きょうだい>を基点とする関係は、ヨコに展開するネットワークである。従来の沖縄研究では、タテの関係が重視される一方、ヨコの関係はあまり注目されなかった。」 p 290

糸満やK屋取のような移住村落 「移動する人びとにとって、集団としての<門中>や<家>よりも、個人と個人の間を基点に広がる伸縮自在な親族のネットワークが生活戦術上有効だと考えられるのである。しかし、ここで留意したいことは、糸満漁民もK屋取の百姓系寄留民も、土族の子孫ではなかったということである。つまり、移動性や流動性は百姓層でもみられ、彼らは決して「閉じた小宇宙」の中で生きてきたわけではなかった。」 p 293-4

「<きょうだい>は、移住者の経済的展開と移住村落の展開において実践的に機能したというのが本章の結論である。」 p 291

「近世国家の政治経済的秩序は、<父系出自>と<家>の二つの親族規範によって整序された。それは、上位階層の人びとの地位を再生産する戦略として用いることができた。これに対し、居住人の生活を支えた経済的な展開を可能にしたのは、二者関係としての<きょうだい>による生活実践であった。<きょうだい>の協力的な行動が成果を生むと、「きょうだい集団（チュチョーデー）」を形成した。<きょうだい>によって開拓が促進され、その成果は屋取の形成につながっていった。」 p 299

「<きょうだい>によって形成された親族集団は、タテとヨコの二種類のことばで表現された。具体的には、「チュチョーデー」と「門中」である。前者は、主体的で能動的な個人がヨコにつながって形成した集団を指し、後者は、ヨコの間をタテに読み替えて再表象された集団を指す。」 p 301

門中などの父系集団に重点を置くこれまでに多い民俗記述に対して、新たな視点を提供した点で注目されるものである。南城集落の今後の調査研究にとっても、有効な視点になりえよう。

2022年08月17日

集落の多様性 民俗学以外の多様なアプローチ 南城論への旅 F20

『南城市の民俗』総論の「三. 集落の多様性」(p 61～72)に移る。この章では、まず集落の分類について述べた

が、民俗学研究も含めて従来の集落研究にこだわらない記述をした。本書は、住民の民俗、つまり暮らしについて、広く調査叙述しているが、それは、民俗学研究にこだわっているわけではない。無論、民俗学研究者が参加しているが、調査委員の中の多数を占めたわけではない。むしろ、その他の諸分野の方々が多いし、研究者ではなく、集落に関心を持ち、いろいろと調査経験のある地元住民も多い。私自身も、民俗学研究者では全くない。もともとは、教育学教育史からスタートし、地域調査なども経験してきた。そうした多様な体験のなかで、地方自治論(政治学 行政学)、地理学、産業経済史などのアプローチに接する機会があり、それらを生かしつつ歴史的視点をもってアプローチしてきたのである。

今回のように、全集落を対象にして調査研究する場合、なおのこと、民俗学のカテゴリーに囚われず、多様なアプローチから学び取りながら、進めていくことが求められる。

これまで沖縄の集落にかかわる民俗と言うと、p 12～15に書いたように、二〇世紀に入って以降なされた調査研究では、一九世紀後半から二〇世紀前半の、農村におけるシマ(農村共同体)が基点にあった。しかし、その後、それは大きく変貌し、とくに一九六〇年代以降の経済成長の中で、民俗そのものの変貌も著しい。

従来からあった集落の多様性がさらに広がり、それらをとらえるためには、多様なアプローチが必要となる。そこで、p 61～62にいくつもの視点を提示した。

集落内の住宅配置(p 62～64)や集落立地(p 64～67)は、歴史的には、統治側の施策とシマの意思とのからみ合いの中で形成されてきた。しかし、ここ数十年に大きく変化した。統治側は、農地宅地といった土地利用指定やがけ崩れなどの危険地区指定という広い網をかぶせる形が中心になってきた。住民側では、シマによる協議や指示といったことがまれになってきた。

土地売買(p 66～67)については、シマ内の土地をシマ外の人に売買することを強く規制する例が近年まで残っていたが、近年では稀になってきている。また、「復帰」前後より、デベロッパーが景観地を買い占める動きがみられたが、近年ではどうであろうか。

こうして、不動産売買を個人に委ね、市場取引型が圧倒的になってきた。それにしても、こうした問題についての調査研究は、未着手に近い状態にあるといえるかもしれない。

集落アイデンティティ(p 66～67)は興味深いものであるが、生産と生活のいずれにしても、アイデンティティを築く基盤が弱くなり、集落単位の活動が少なくなっている。最近の新型コロナ禍は、それに拍車をかけた。それらのなかにあっても、集落の活性化と集落アイデンティティの再創造に挑もうとするところが多い。そのあたりの調査研究は、過去の歴史ではなく、「未来の歴史」となるが、『南城市の民俗』がその足掛かりになればと、願っている。

2022年08月23日

人の移動と人口増減 南城論への旅 F2 1

「四. 人の移動と人口増減」(p 73～92)の章に移る。

最初に、印刷段階で脱落した個所について、訂正しておく。p 73下段の表のなかの、一九一三年の人口が、七〇三となっているが、正しくは、七〇三二である。

当然のことながら、人口史についての南城市としてのデータがないので、旧町村が残したデータをもとに、可能な限り集落ごとの一九世紀末から二一世紀初めの数値を示した。これらを見ると、二〇世紀全体をとおして大きな変化があり、いずれの集落にあっても、人口だけでなく、集落のありよう全体が大きな変貌をくぐりぬけてきたことを示している。

そして、南城市成立の二〇〇六年以降も大きな変化がみられるが、それは今回の記述にほとんど反映していないので、今後の調査研究に委ねることになる。そのなかではあるが、南城市成立直前を含めて、現在までの変化で特筆されるのは、南城市への市外県外からの移住者の多さであろう。

たとえば、工芸に携わる方々の多さは、「半島芸術祭」を毎年開催し、数十の工房が参加するほどの大きなイベントになったことに示されている。

移住者は、移住当初賃貸アパートマンション居住が多いが、時間経過とともに一戸建て居住者が増えていく。なかには、移住者の住宅がまとまって建てられる事例もでている。たとえば、古村と屋取村が合わさって形成されてきた玉城集落には、ここ二〇年余りの間に建築して市外県外から移住してきた人が住む住宅が10戸以上になる。

こうした移住者には、南城市の諸分野で活躍する人をたくさん生み出すだけでなく、各集落でも活躍する人を生み出している。

全国的傾向として、19世紀末から20世紀初めにかけて、多産多死から少産少死への大変化があり、その過程での人口増がみられるが、沖縄でもおおよそそういうであろう。とはいえ、さらに踏み込んだ分析が求められ、南城市域についても求められる。それらの過程の中で、とくに戦後については、農村から都市への人口移動が激しく、過疎過密問題が登場するが、南城市域でもそれがみられる。だが、詳細な分析は今後の課題として残されている。

そして、全国的には、1980年代ごろから今日に至るまで「少子高齢化」が本格的に大きな話題になってくる。とくにその中であって合計特殊出生率が、人口維持に必要な数（人口置換水準 日本では2.07とされている）を大幅に下回ってきたことが注目されてきた。

沖縄では、長期傾向として、減少してきたが、全国平均よりかなり高い数字であることが注目されてきた。それにしても減少傾向がみられ始めている。

2022年08月29日

少子高齢化 社会移動 移住者 南城論への旅 F22

ところで、2021年に出された南城市こどものまち宣言のための調査資料によると、次のようなデータが示されている。（南城市こどものまち宣言ニーズ調査 中間報告 2019年）

小学生をもつ保護者の出身地 2019年調査

	南城市	南城市以外の県内(本島)	南城市以外の県内(離島)	県外	外国	無回答
父親	53.1%	32.5%	2.4%	11.2%	0.5%	0.3%
母親	40.0%	41.5%	2.7%	14.9%	0.4%	0.6%

市外県外からの移住者が、保護者全体の半数近くを占めていることは、変化の大きさを示している。そして、p 80～83で述べた通婚域のさらなる広がりをも示しているといえよう。

関連して、少子化傾向のなか、関心が高まっている合計特殊出生率について、南城市全体のデータを紹介しておこう。

2007年 1.61 以後一年ごとの数字 1.40 1.57 1.55 1.60 1.58 1.69
1.66 2.02 1.95 2.01 2.02 2019年 1.99

近年では、全国平均だけでなく、沖縄県平均よりも高い数値を南城市は示している。

当初は低かったものの、2015年の2.02以降、ほぼ2になっている点が注目される。それは自然増自然減にかかわるのだが、それに加えて、社会増の多さがあり、近年の南城市の人口増を作り出している。

社会増社会減には、通勤通学などからでの交通の利便性、そして住宅建設がかかわり、南城市内でも、集落ごとの違いが著しい。

2022年09月04日

集落と生産 南城論への旅 F23

『南城市の民俗』総論の「五. 集落と生産」(p 93～115)の章に移ろう。

一九世紀までの農業生産は、シマの共同生産という性格が濃厚にみられ、各集落は農業共同体的性格をもっていた。しかし、明治政府＝沖縄県庁による統治下に入ると、とくに土地整理以降、共同生産的性格が徐々に薄れていき、農業共同体的性格が弱まっていく。それは、p 95～97に示したように、砂糖・野菜・畜産・養蚕などでの商品作物の生産の増大とつながっている。その生産単位は、シマというよりも農家ごとという形に移っていく。

また、p 94に書いたように、土地整理によって土地は集落共有的性格を失うが、それは農業における金銭経済的性格の高まりとなっていく。そして、金銭経済的性格の高まりは、集落内の階層分化をさらに進行させ、p 95で示したヒヨー、イリチリーといったあり方を増大させていく。

戦後になるとますます商品経済化傾向はさらに高まり、農業共同体としての性格が希薄になっていく。そして一九六〇年代を境にして、ほとんどの集落(シマ)は農業共同体と呼ぶことがむずかしくなっていく。

大正期および1960年代以降におけるサトウキビ価格の上下は、世界的要因によるものが大きい。それらが、戦前から集落における農業生産に強い影響をもたらした点に注目する必要がある。別の言い方をすると、世界の市場経済の動向が集落における農業生産に強い決定力をもつようになったのである。1960年代以降になると、サトウキビだけでなく多くの品目が、農産物の国際価格の影響を受け、何を生産するか判断決定にかかわるようになった。

さらに、JAをとおしての流通がほとんどであった時代は過ぎ去り、多様な流通経路が併存競争するようになり、それが農業生産にかかわり、集落単位の生産といったことを「遠い昔の話」にしつつある。

農業の金銭商品経済化の進行が集落の農業共同体的性格を弱めていくが、そのなかにあつて、p 97-98で示した原山勝負は、緩み始めた集落単位の活動を再強化する役割を果たした。だが、1960年代に入ると、商品経済化が決定的になることに加えて、離農が進行し、農業外への移行が主流になるにつれて、集落の農業共同体的性格は、薄れるどころか、喪失していく。そのなかで原山勝負ないしは形を変えたそうした類は、縮小消滅への道を歩む。

※農業以外の産業で、集落としての生産活動の性格を持つ例としては、奥武や久高での漁業がある以外に目立つものはない。都市および都市郊外においては、市場などの商店街や、工業団地などの生産拠点が考えられるが、南城市域では、萌芽的なものがあるにしても、本格的なものは見当たらない。

このあたりの調査検討も今後の課題といえよう。

2022年09月10日

農業と集落との分離と再結合 商工業の模索 南城論への旅 F24

こうして集落は、農業と切り離されるどころか、農業外の産業との結びつきももたず、産業（生産）そのものから切り離されていく。集落行事は、農業生産暦と深い結びつきを持ったものが過半を占めてきたため、農業生産との結びつきが希薄になるにつれ、集落行事も変容していき、農業生産に結びついた行事は、「過去の記憶」としての存在になっていく。その記憶がない人、薄い人は集落行事に参加しないどころか、集落そのものからも「離れる」傾向を示し始める。

そして、農業を軸にした生産（産業）と集落との結びつきが、薄れるないしは消えていく中で、シマ（集落）がコミュニティとして、維持再生できるかどうか問われ始める。そのシンボリックなものとして集落行事があるが、その集落行事を中心に、コミュニティとして維持再生できる鍵として、農業的性格の有無は別にして、多様なシマ起こしの取組みが、2000年代に入って試みられるようになった。

また、取り組みの多くは、集落単位よりも、集落とのかかわりなしに、集落を越えた多様な人々の結びつきで推進されるものが多い。

それにしても、近年、集落の新しいありようの創造が追求されるようになった。その追求がなければ、すでに進んできた人々の意識の上での「集落消滅」が一層進行していくことになるだろう。

そうした動向のなかで、農業の継承ないしは復活の試みが広がっているのも、近年の一つの特徴である。その一つは、勤め人をしてきた人が退職にともない、かつての家業であった農業を復活させることがある（定年後帰農）。もう一つは、若い世代や移住者のなかに、農業を自ら興していく動きがある。いってみれば、農業での起業である。

このあたりの調査分析と提案が、本書の次の課題となるだろう。

p103~106の商工業については、20世紀に入り金銭商品経済の浸透の中で、多様な業種、とくに生活必需品を扱う業種での起業が目される。そのひとつに集落による共同売店の設立運営（p112）があるが、と同時に個人による起業が目される。資金調達ができる人は、まさに起業するが、できない人は、運送業など「身体一つ」に近い形で従事するか、雇われて従事する形を取る。勤め人の類の始まりであろう。

こうしたことの調査検討も今後の課題といえよう。

2022年09月16日

産業・雇用と集落 起業体験の蓄積 南城論への旅 F25

P106～107に記した米軍作業は、1960年代以降に一般化する「勤め人」的ありようへの過渡期ないしは、初期の形態であった。

そして、p108～110に記したことであるが、「食べる、生きる」ことに必死になるなかで、多様な形で仕事づくりが展開するが、今日いうところの起業であろう。こうした営みが、沖縄の人々のなかに体質化し、今日なお、開業率の高さを維持しているといえるだろうか。南城市域でも、多様な起業体験が蓄積しており、現在もなお継続しているもの、新たな起業の追求がある。だが、それらの多くは集落との結びつきは弱い。

これらの点でも、今後の調査検討が求められる。

経済研究者がよく指摘することだが、第二次産業わけても製造業の比率の低さが、戦後沖縄経済の特徴をなしている。南城市域でもそうであり、あえて第二次産業というと、土木建築業であり、その多くを「公共工事」が占めてきた。1950年代～1990年代に、土木建築業に従事する人の比率の高さがそれを示している。一時は、農業に次いで従事者が多い業種であり、集落の中で、そうした事業所がいくつか見られるところもあった。しかし、近年の「公共工事」の減少の中、その比率は低下してきている。

集落にとって、比率を下げた農業に代わるものが見いだせないまま、産業との結びつきを低下させてきたともいえよう。そして、自家用車使用を含め交通手段の充実が、いくつもの集落において、都市地域への通勤者のベッドタウンの様相を、少しずつ高める方向に作用してきた。

p113～115の記述にかかわることだが、那覇などの都市の拡大のなかで、与那原を含めて南城市域外での商品購入の広がりに加えて、自動車利用によるスーパー、コンビニ利用の広がりが、対照的に集落内の商店の縮小消滅傾向をつくりだしてきた。

ところで、人口的に多い1940年代後半から50年代前半に生まれたベビーブーム前後の人たちの多くは、現在自家用車で商品購入をしているが、かれらが2020年代半ば以降、それができなくなったときに「買い物難民」の大量出現が予想される。コープのような移動販売や共同購入の形が、一般スーパーでも始まっているが、それらが大規模化し、新たな形を生むことが予想される。あるいは、近隣つきあいや集落単位の生活の共同性が復活する可能性を見ることがありえよう。

p114～115に書いた「新しい取り組み」は、今後ますます増大していくのだろうか。そのなかでとくに福祉関連分野の動向が、人々の共同性と大きくかかわってくる。そのなかで、集落の果たす役割はどうなっていくのだろうか。

p115上段8～9行目の「脱皮模索期」というのは、90年代以降、前後の記述で書いたように、生産と集落との関係が切れる方向で進んできた動向を切替え、生産と集落を結びつけるよう新たな「脱皮模索」を展開するという意味である。

2022年09月22日

都市化 共同体とコミュニティ 南城論への旅 F26

ここまで述べてきたことと関係して浮かび上がってくるいくつかの論点について述べよう。まず、農村型と都市型ということについて。

ここまでの記述は、農村型集落の視点にもとづくものが大半であった。確かに現在でも南城市の集落は、農村型といえよう。だが、農業生産と集落が直接結びついた農業共同体的性格はきわめて薄くなっている。もはや農業共同体ではないと言い切る人もいるだろう。

では、それと対照的な都市型集落かという、部分的にそうした性格をもつ集落が生まれ増えつつある。そして、生産面でいうと、農村型の激減、都市型の増加がすすんでいくであろう。といっても、都市型共同体かいうと、そういう集落はないだろう。共同体を農業型にしる都市型にしる、集落のような地域単位で語る事例は、もはや存在しないとさえいえそう。

次に、共同体という形ではないにしる、なんらかのつながりをどのように築いていくか、という問題である。近年、共同体とはいえなくとも、地縁でなんらかの結びつきを作り、「コミュニティ」といえるほどのものを築きたいと考える人は多くなっている。その集落に住む人は、住民間において、移住者を含めて、コミュニティ・メンバー、集落メンバーと自称他称するような関係になりたい、と思うのである。

近年いわれる「シマおこし」とか「コミュニティづくり」とかには、生産の共同ではなく、こうした人間関係構築を目指すものが多い。それらのつながりには、1960年代までは血縁的なものが濃いタイプのものがかなり多かった。それには、先に紹介した玉城毅論を使っていうと、門中型のタテ型とチョーデー型のヨコ型とがあるが、後者の比重が高まってきているようだ。

だが、それらは集落単位でのつながりなど地縁的なものを越えるものが増えていくため、それが集落とどういう関係になるのかについての今後は不明である。また、それらが沖縄的特性をことさらにもつものであるとすれば、どういう点にみられるのだろうか。

そして、血縁のないつながり、たとえば学校における同級生つながりのようなものが、20世紀に入ってから増加し、1960年代以降は、さらに増加していくが、それに加えて、「勤め人」として働くことをとおしての職場つながりが劇的に増えていく。それには、金銭商品経済の浸透をきっかけにするものが多い。加えて、「復帰」運動、平和運動、住民運動、青年組織、女性組織などをきっかけにした市民的性格をもったつながりが急増してくる。スポーツや文化関連活動など趣味的なつながりがそれに加わる。

2022年09月28日

集落の変容 集落起こし 人口変化と将来計画 南城論への旅 F27

前回述べたことと並行して、人々の居住地移動が、それまでのつながりを薄めたり断ち切ったりする一方で、新たなつながりを生み出していく。19世紀までのように、出生からずっと同一集落で生活してきた人は、限りなくゼロに近づいている。誰もが、たとえ一時期であっても、集落外生活を体験するのがごく普通になっている。そうであるにしても、何世代にもわたって、その集落に生活してきた人たちが一定数まとまって、集落の中核に存在している例が、まだ多く、彼らを中心にして、集落が動いていく例が多い。そうした人々を、集落の「中核集団」とも呼ぶことができよう。

しかし、都市化の進行の中で、そうした中核集団の存在が希薄になり、新興団地のように、各所から集まった人で、

集落が改めて発足運営される事例が増えていきそうである。その象徴的存在として、集落外出身者の区長などの区役員が増えてきていることに見られる。中核集団がまとまり「過ぎて」、集落外出身者の活動参加に「遠慮」が生まれ、そのうちに区費支払いをしない人が増えてくる例も見られる。

そうしたなかで、人々のつながりにおける血縁的な要素は比重を落としていく。そして、多様で流動的なつながりが増加していくが、それらを全体としていうと、市場的關係ないしは市民的關係の増大と表現することができる。

また、集落から出っぱなしではなく、あるいは入りっぱなしではない人も増えてくる。U ターン、I ターンの人が増える一方で、なかには再び集落外に出る例もある。

こうしたつながり変化のなかで、集落がどう変容していくのか、集落起こしがどう展開していくのだろうか。こうした問題の調査研究は、まさに今後の重大な課題となっている。南城のみならず沖縄全体として他府県の地方都市ないしは、地方農村とはかなり異なる構図を描いていると推察されるが、そのあたりの調査研究が求められる。

これまで、沖縄の人口は、右肩上がりです昇してきたが、2020年代に入って、これまで東京と並んで人口増がある沖縄にあっても、自然増減で見ると少子化傾向がみられはじめ、いよいよ人口停滞減少傾向へと移り変わりそうな気配である。他方で、社会増減は、県外からの移住者が多く、依然として増加傾向が続きそうだ。これらは、集落によって大きな違いがあり、増加が著しい集落、減少に歯止めがかからない集落と対照的でさえある。

そんななか、市町村は、今後の人口目標の設定を含んで、将来計画を策定することがあるが、個々の集落はどうしていくのだろうか。人口目標は、どちらかというところ、これまで経済指標的な扱いでイメージされることが多かったが、人々のつながりのありようでイメージすると、どうなるのであろうか。

人口の増減だけでなく、人口構成の変化に注目する必要がある。子ども人口の減少、若者人口の流出、子育て人口の減少などは、継続的なテーマになっているが、近年では、施設生活に移る高齢者の増大にも注目する必要がある。

このあたりを織り込んだ集落の将来計画を議論する需要が高まっている。その点では、市町村のキャッチフレーズの変化が注目点の一つになろう。これまで多かった「反核平和のまち」「文教のまち」「学園都市」などに加えて、近年、「こどものまち」「福祉のまち」などがみられるが、さらには、「お年寄りに寄り添う街」「移住者歓迎のまち」「安心安全のまち」など、新しい傾向が出始めそうだ。こうしたものを集落単位で設定するとしたら、どんなものになるだろうか。その点では、p69~72で述べた集落アイデンティティが足がかりになろう。

2022年10月04日

生活 衣食 南城論への旅 G1

発刊された「南城市の民俗」の記述に沿って綴っているこの連載は、今回から p 116～139 の「生活」にかかわる章である。

この100年ほどの趨勢を述べるとすると、各集落では、集落の共同で行なわれる要素が多分にあった生産だけでなく、生活もその共同性が次第に希薄になってきたということである。一言でいうと、「生活の共同性の希薄化」である。それは、集落単位で営まれる面から、世帯・家族単位で営まれる面が大きくなったことを意味する。加えて個人単位で営まれることが増えてきたのが、近年の傾向である。

それは、スーパー・コンビニでの商品購入に象徴される、金銭商品化に依存した生活の展開ということである。無論、それとは異なり、新たな共同を追求する動きがないではない。とはいえ、その単位に集落がなることは滅多にない。戦後70数年についていうと、生活再建から生活向上への変化であり、その単位が、集落から世帯・家族への移行、さらに部分的には個人への移行ということである。

p 118、p 126の衣の変化の特徴として、次の三つをあげることができる。

一つは、自給自足から購入への変化である。二つ目に、普段着における沖縄式から和式もしくは洋式への変化であるが、和式は限定的で、和式を経由せず一挙に洋式になった例が多い。三つめは、これらの変化を促したものとして、学校、日本軍と沖縄戦、米軍統治、市場化の浸透がある。いわば外圧への対応である。そのなかで沖縄戦直後は衣類そのものが不足するなか、住民の工夫のなかで多様な追求がなされたことに注目しておきたい。

p 119～の食の変化については、4つのことを指摘しておきたい。

一つ目は、自給自足から購入物への変化である。その過程で、自給自足する条件と力量の維持が困難になってきたことがある。二つ目に、住民の大半を占めた農家における1日5食から1日3食への変化がある。三つ目に、食糧自給率の低下である。つまり沖縄外から移入された食糧への依存が高まったことである。農家が収穫したコメは、高級食糧であり、自家用にならないことが多かった。戦後さつまいも主食から米主食へ徐々に移っていくが、その米は、長く移入物であった。四つ目に、集落単位での共同生産・共同生活と言う性格の低下である。集落経営による共同売店の消滅が象徴的できごとである。

※共同生活という点では、沖縄戦直後、食にしても（p 120～121）、住宅建設にしても（122～123）、集落の共同生活（ユイマール）が多くなった点に注目しておきたい。

2022年10月10日

水道 生活支援 南城論への旅 G2

生活にかかわる集落単位の共同事業として注目されるのは、簡易水道である。それ以前から、あえていうと、集落始まって以来、カーが集落にとって不可欠な存在であった。だから、今なお集落祭祀の重要なものとして、カーをめぐる行事が位置づいているのだ。そして、不可欠の作業であった水くみ水運びを女性または子どもが担ってきた点にも注目

したい。それが、早い所では戦前から、遅い所でも戦後に、集落単位の簡易水道に代わった点は、集落生活史上、重要な出来事であった。

さらにそれが、1960～1970年代にかけて、上水道設備に切り替わっていくが、それは集落単位ではないため、住民生活における集落の位置が下がっていく一要因となった。

道について (p 132～133) いうと、1960年代までの集落付近の生活道路の大部分は、集落住民の共同作業によって建設維持されてきた。そのことを誇りとして集落で語り継いでいる所も多い(糸数の例 p 243)。現在では、集落の草刈作業にその一端が残っているといえようか。

医療・衛生・生活支援 (p 135～139) については、20世紀に入って以降、医療機関や行政機関が担当するものとなり、集落との直接のかかわりは薄れていくが、住民の健康や生活にかかわる機能は、依然として集落が重要な役割を果たす必要が継続していく。そのあたりの今後の調査検討が求められる。それらが、集落住民の生活と渾然一体化した状態から、独自の機関の担当と移されていく中で、集落のそうした機能を改めて位置づけなおす作業がもたれらる。民生委員や保健師の役割と、集落との関係についての検討は、一つのアプローチになろう。

21世紀に入って、格差と貧困が大きく話題になることが増えてきた。格差と貧困に類するものは、各集落においてもかなり以前から存在していた。無論、現在とは大きく形を異にしていた。たとえば、貢納することができずに「与倒れ」「家倒れ」になって、場合によっては、シマから離れざるをえない危機にあったものに対して、シマはどうしたのであろうか。そうした人々のなかには、屋取集落に移った例があることを先に紹介した玉城著書は示唆している。

あるいは、イリチリーやヒヨーとして生活していた人に対してシマはどうしたのであろうか。とくに、金銭経済がシマに強力に浸透し始めた20世紀初め以降、こうした例は少なくないようである。

こうした問題についての調査探究も今後の課題といえよう。

2022年10月16日

家族 産育 南城論への旅 G3

次の章に移る前に、家族について触れておこう。

集落に焦点をあてた本書では、家族や世帯について記述することは少なく、それらについて章節や項目を設けて記述することはなかった。しかし、家族・世帯と集落との関係、さらにはそれらと個人との関係について、改めて掘り下げた検討の必要性が、時代進行に連れて増加していく。

収集できる統計データも、家族・世帯単位のものが増えていく。その家族、世帯も、年々小規模化し、近年では、単身世帯が増加し、対照的に個人単位が増えていく。

そのなかで、家族・世帯、そして個人が、集落とのつながりを薄めていく。とくに子育てについては、「シマの子ども」の性格が薄まり、「家族の子ども」になっていく。

こうしたことをどうとらえていくか、これらについての今後の調査研究が求められている。

「子育て 教育」の章 (p 140～156) に移る。出産と子育ての民俗をまとめて、産育習俗というが、それには時

代と身分階層の違いが著しい。しかし、それらを明示しないまま、一緒くたにして記述する例によく出会う。たとえば、「古くからある習俗」例として「タンカーユエー」の記述を民俗書歴史書などで見かけるが、それは、時代的にかなり限定的であった。また、p142冒頭の引用にあるように、土族村に多かったし、一般農民がそれを行う例は、職業移動が広くすすみ始めて以降である。また、小学校に大半の子どもが就学する前と後では、諸習俗には大きな違いがある。そこで、p140～142では、そうした時代差、身分階層差による違いに留意しながら記述した。

項目を特立して述べたムーチユレー（p142～143）は、集落行事、わけても子ども集団の行事として、きわめて興味深い。それがいつごろどのようにして始まったのかはわからない。昭和10年ごろ禁止されたことはわかるが、その経緯の詳細は不明だ。そしてその後の動き——再興の動きの有無、形を変えての継承の動きの有無——も不明で、さらに今後の調査分析が望まれる。また、他府県における子ども組若者組とどのような関連があるのかについても掘り下げた検討が求められよう。

遊び（p143～144）については、さらなる調査も必要ではあるが、すでに集積された記録をもとに、時期変化、そしてそこにおける遊具の特性や子ども集団の特性などの分析研究が期待される。

仕事（p144～145）については、家業従事としての仕事から、「手伝い」への変化、さらに「手伝い」も縮小消滅してきた、という変化の調査分析が求められよう。

2022年10月22日

保育園 幼稚園 小学校 南城論への旅G4

保育園・幼稚園・小学校について、集落とのかかわりでは、集落保育園（幼稚園）の存在がきわだって注目されよう。大半の集落が単独で、もしくは合同で設置したもので、まさに「シマの子ども」というものを象徴するものであった。それだけに、「復帰」後に集落保育園を公立・認可保育園へ転換したことの意味は大きい。だが、その転換にあたって、どのような検討がおこなわれたか、についての調査研究資料をみることは、これまでのところない。本土法制に合わせる以外に根拠は乏しい。それにしても、「集落」が直接タッチしなくなったことは、何をもたらしたのだろうか。

集落にとって、公的共同的な部分が大きかった子育てが、世帯・家族の問題、そして行政の問題へと移ったことは大変化であるが、その意味を問うことに会うことは、これまでのところない。2010年代後半に市立保育園が、民間化された過程で、大きな論議が巻き起こったが、こうした一連の問題についての検討研究が必要であろう。

また、小学校は、戦前においては、国家統治の末端をになう役割を取り、シマの子どもたち、さらに住民たちが、国家につながるための媒介物として学校が置かれた。そして、時間が経つにつれて、学校を地域のモノにしていく動きが膨らんでいく。そして学校や分校の設置統廃合が集落にとって大きな 이슈になっていく。それには、集落間の対抗という面を含むが、それにしても、自分たちの学校という意識が膨らんできたことを反映しているともいえよう。

また、戦前期においては、学校を卒業しても、いずれは「シマ」に戻るものが通例であった。しかし、徐々にそうではなく、卒業後、都市（県内、県外）に出ていくことが増えていく。そのこととかわって、共通語習熟が、学校の目標の一つとして、住民自身にも認知されていく。

戦後になると、学校を経由して集落外に出ることが広がり、それだけに、学校が地域（シマ）にどういう意味を持つのか問われ始める。上級学校を出れば出るほど、シマには戻ってこなくなるということが問われ始める。「村を育てる

学力「村を捨てる学力」(東井義雄)が、1960年頃問われ始めるが、沖縄でも、その問題が徐々に前面に出てくる。また、学校教師にしても、かつては、地域出身者が多かったし、そうでなくても、地域に住む人が多かった、しかし、いまでは、地域との結びつきはかつてとは比較にならないほど薄い。

2022年10月28日

集落の自治組織と集落運営 南城論への旅 G5

八、集落の自治組織と集落運営 (p157~177) に移る。

集落内の自治組織は画一的なものではなく、集落事情に応じて多種多様である。首里王府時代は、集落は統治の末端組織であり、王府が定める統一的な形があったが、沖縄県庁時代となると、郡役所や間切(のち村)による統制は残ったものの、徐々に画一的なものではなくなっていく。そこで、各集落は、他集落の例を参照しつつも、集落自体の事情により、改訂を積み重ね、徐々に集落独自のものを生み出していく。

また、農業生産と密着していた集落組織も、生産との結びつきを徐々に弱めていくだけでなく、住民の共同生活とのかかわりも、徐々に弱めていく。そうしたなかで、二〇世紀に入って以降の百年の余りで、集落の「軽量化」が進んでいく。

それでも集落(シマ)を精神的なよりどころと感じる住民がなお多い所では、集落活動を維持させようとし、さらに再活性化させる営みが展開されている。

だが、集落の自治組織そのものが機能していない集落も、一部ではあるが、新興団地などに見られ始めている。そして、活発な集落にあっても、集落組織に加入していない住民が増えているところも多い。那覇浦添などの都市地域では、自治組織への加入者が半数に満たない所が目立っている中では、南城の集落は「健闘」していると言えるかもしれない。だが、そうした課題が大きくなりそうな集落が増えていく気配である。

そこで、とくにアパートマンション住民などに多い未加入住民への働きかけを強め、また多様な参加形態組織形態を工夫している集落が増えている。

また、これまでは、集落組織の基礎単位は、家族・世帯であったが、単身者世帯の増加のなか、個人単位での対応も必要になり始めている。

また、企業組織の増加のなかで、協力金(p169)、協賛金(p177)を集める集落も出てきている。住民以外の集落への出入りが増える傾向は、観光業の増加のなかで、ますます増えていくだろうから、いろいろな工夫が生まれてくることだろう。

集落の「軽量化」が、年々強まっていく中で、集落起こし・再活性化への試みも広がっている。p177で示した小谷・仲伊保・福原などはその例だが、他にもたくさんあり、それらを掘り出して、交流活性化する必要があるだろう。市も行政として、そうした動きを応援する施策を展開している。

そうした動きが、集落の消長に新たな画期を作り出すことが期待されている。

2022年11月03日

年齢別組織 南城論への旅 G6

「九. 年齢別組織」(p 178～199)に移る。

市町村組織は、行政秩序のなかにあるため、男尊女卑のジェンダー秩序を、タテマエとしては否定している。しかし、行政秩序の性格が薄い集落秩序にあっては、いまだ男性優先秩序が色濃く残っているのが現実だ。それでも生活レベルでのジェンダー秩序の問題性が、徐々に焦点になり始めている。男尊女卑ではない形での女性の活躍が拡大している。

また、成人男性中心の集落運営は、少子高齢化の進行とともに、揺るいできている。そこで、集落運営に変化が始まっている。たとえば七〇代区長は珍しい例ではなくなりつつある。

このように従来の慣習的な男女秩序年齢秩序ではやっていけないことが広がっている。著しいこととして、かなりの集落の女性会青年会老人会組織が開店休業状態になっていることがある。閉店になったところもあろう。それらを再建するのか、新しい形を試みるのか、悩ましい問題を抱えている集落は多い。

男性優先秩序は、「昔から」そうであって、時代とともに「緩やか」になってきたという捉え方に会うことがある。だが、「昔から」そうであるというのは思い込みに近いだろう。それとは異なって、沖縄では女性が男性よりも「強かった」という捉え方も広く存在している。「うない神」とか「婿入り婚」などが、その説明に使われたりもする。

いずれにせよ、男尊女卑のジェンダー秩序が、二〇世紀に入って、政府の施策、旧民法などによって、強力に確立されたことは見ておいた方がよいだろう。加えて、首里王府時代に士族層に広がった儒教秩序、そしてそれがかかわる門中秩序が、男尊女卑秩序を強く支えたことも見て置く必要がある。

ところで、二〇世紀はじめに、婦人会青年会などが、行政主導で作られた。それ以前からあった類似組織とのつながりについての検討研究はそれほどなされていない。そして、行政主導のこれらの組織では、在郷軍人、行政職員、教員がリードする面が強かったことに注目しておく必要がある。住民の該当者が自主的にボトムアップでつくったというより、トップダウンで作られた性格が濃厚なのだ。

戦後の集落再建の中で、それらの組織が再興され始め、ボトムアップの性格が、戦前よりはるかに強くなった点に注目したい。それでもなお、戦前のトップダウンとはかなり異なるが、婦人会は、当初教員たちのリーダーシップで組織運営された点は注目しておいていだろう。教員たちのリーダーシップが弱まっていく中で、代わりに全沖縄的組織による「ややトップダウン」的なかわりが、集落婦人会を支えていたことは確かであろう。しかし、時間経過とともに、そうした支えが弱くなっていく中で、また時代変化にともなう社会変化のなかで、集落単位での年齢別組織のありようが大きく変化し、従来型では組織を維持できなくなっていく。

2022年11月09日

年齢別組織の苦難と今後 (1) サークル活動 南城論への旅 G7

婦人会・青年会・老人会は、集落単位の組織・活動だけでなく、各集落組織をつなぐ上部組織(市町村単位と県単位の組織)とつながって、他地域とつながり・交流をもつことで、視野を広げるとともに、多様な協力共同関係を築いて

きた。そのことで、集落を越えた人々のつながり・共同を築いた点に注目したい。その点では、若者たちがかかわったモアシビが、それ以前から、集落の壁を越えて、行われていたことにも注目しておきたい。また、芸能の伝授を通しての集落外とのつながりも注目される。戦後、全県レベル市町村レベルで行われてきたエイサー大会などは、集落史にとっても関心をもたれることである。

高齢者人口の増加にともない、1960年代~1990年代と、老人会組織が大きく活性化してきたことも注目される。

その老人会組織を含め、婦人会(女性会)、青年会組織が、近年休業状態にある例が増えている。居住地・職業などの移動が恒常的なものとなり、人々の地域つながりが薄れてきたことが一因だろう。と同時に、地域の同世代がほぼ全員集うような組織を避けて、任意に結成参加するサークル組織に関わる人が増えてきたことも、もう一つの要因だろう。スポーツなどは、以前なら、集落青年会組織と一体化したチームでの活動が多かったが、いまでは、集落とかかわりなく、地域を越えて集まる例が多くなっている。

だが、集落組織が、公民館を使用しての練習・活動など、そうしたサークル組織を育て、サークルの成果発表を祭など集落活動の場に活かしていくなどの工夫をして、集落を盛り上げている例も多いことが注目される。

こうした変化の中で、年齢別組織が直面する課題と今後にかかわって、いくつか指摘しておこう。

一つは、老人がかかわるものとして、グループホームや老人ホームなどを含めて、老人に対応する諸施設が増加し、多くの老人が、家族や集落を離れて、そこで生活していることがある。無論、家族や集落とはつながりを維持している例が多いにしても、日常生活は、同じ境遇にある人と職員との共同生活となる。そして、中には数年以上にわたる長期生活となる人もいる。さらに、多くの場合、本人の希望や決断によるよりは、「こうなってしまった」という受け身的なものである。

こうした老人たちを集落との関係で、どう把握すればよいのだろうか。なお、デイサービスの場合は、生活の本拠地として、それまでの家族や集落が存在しているし、集落が運営にかかわることもある。そこで、こうした形態を、集落とのかかわりでいかにとらえるか、ということがある。

関連して述べると、障害者対応の組織施設と集落の関係に焦点を当てる必要があるが、その調査研究は全く未開拓状況に近い。

2022年11月15日

年齢別組織の苦難と今後(2) 南城論への旅G8

前回に続いて、年齢別組織の苦難と今後について書くが、その二つ目に、別の章で記述した子ども対象の組織を、年齢別組織としてどうとらえるか、という問題がある。この年齢時期の子ども若者にとって、ここ100年余りにわたり、学校が占める位置が徐々に高まり、集落が占める位置よりも高くなっていく。そして、全体として見ると、集落とのつながりよりも、集落を越えたつながり、あるいは集落外へとつながりを広げ、結果的に、集落とのつながりを弱めてきたことをどう評価するか、ということがある。

同様に、集落内、あるいは近隣集落に存在する、塾・教室・道場・クラブなどで、学習・スポーツ・音楽芸能・お稽

古事に通う子どもの増加が注目される。とくに1970年代以降激増する。なかには、集落公民館で開催されるものがあったり、通う子どもが、集落内にいるものが大半を占め、集落とのつながりが密である例もあるが、全体傾向としてそれらも集落組織とのかかわりは強くない。

三つ目に、年齢別組織とはかかわりなく、多様な組織が生まれ、その多くが、任意加入制を取っている。スポーツサークル、芸能・趣味グループ、さらには模合グループなどがその例である。個々人にとっては、全員加入型組織よりも、こうした組織とのかかわりの比重を高めているのである。

こうした組織への参加は、多くの場合、長くても数年であり、なかには、一回きりという例も見られる。十年以上になるのは希少例だろう。集落内にある組織が長期的継続を一般的にしているのとは、対照的である。

また、集落組織が、住民全員を対象として組織されるのに対して（場合によっては世帯単位の参加）、これらの組織が個人単位である点も注目される。

多様な組織の形成という点では、新興団地が先駆的事例を多く出している点に注目したい。それは、住民のつながり形成にあって、慣習的なものに依拠できず、試行錯誤せざるをえないからでもある。対照的に、歴史の長い集落にあっては、慣習的なものに依拠できることが多いこともあって、逆に社会変化に対応することに遅れが生じやすいともいえよう。新興団地にあっては、住民の転出転入の比率が高いところでは、都市型アパートマンションのように、つながりをつくるうえでの困難を抱えている例も見られる。

余談になるが、4町村合併以前は、集落と自治体とをつなぐ役割を市議会議員が果たすことが多かった。しかし、合併後、議員定数の関係で、各集落から議員を送り出すことは、大集落でない限り難しくなった。そして、議員は集落代表的性格を弱め、住民は集落を介さずに市政につながることを多くなった。場合によっては、市政から距離を感じるようになったのかもしれない。そこで、かつて議員が担っていた集落と行政とをつなぐ役割は、どうなっていくのだろうか。

こうした変化は、年齢別組織をめぐる述べる際のカテゴリー設定も変化させていくことになる。何年後になるかわからないが、次回の市史では、章節構成が変化することだろう。

2022年11月21日

集落の福祉機能 集落祭祀 南城論への旅 G9

今回から、『南城市の民俗』の「十 集落の活動」(p200～234)に入る。

まず、集落による福祉機能について。100年以上前までは、集落は、ほぼすべての社会的機能に対応していた。いってみれば、「万能」であった。むしろ「万能」にさせられてきたと言った方がよいだろう。たとえば飢えに苦しむ人がいれば、集落の相互扶助機能を生かしてきた。

100年ほど前からは、集落外からのかかわりが増えて、集落の機能の一部をそれらに任せることが増えてきた。葬儀のための龕がなければ、隣の集落から借りる、学校という教育機能の登場により、集落内にはない学校に、子どもたちを通わせた（通わさせられた）。

保護・援助が必要な人、たとえば働けない高齢者・病者・障がい者に、援助の手を差し伸べたのは、親戚縁者であり、

集落であった時代が長く続いてきた。これらの分野においても、徐々に集落外からのかかわりが増えてきた。現代においては、これらの機能を「福祉」に含めることが多いが、行政組織・社会組織（社会福祉協議会など）・ボランティアなどによるかかわりが増えてきた。集落がかかわることは随分減ってきたが、現在でも、集落の場で住民が保護・援助の手を差し伸べる必要性が、広く存在している。たとえば、都市地域でよく聞かれる、一人生活をしている高齢者への「見守り」などは、農村地域でも必要である。

このあたりの現状と課題についても、集落の今後を語るうえで欠かせないことであろう。

祭祀・年中行事（p 205~211）は、本文で書いたように、古村、屋取村、新興団地による違いが大きい。それが今後どうなっていくのだろうか。古村のものをモデルにして見ていくことが多いが、その古村でも徐々に祭祀・年中行事の存在が弱くなってきている現実がある。古村でも、新興団地のようになっていくのだろうか。今後のありようを予想するのは難しい。確かに集落レベルでの祭祀・年中行事は縮小してきたが、家族や個人レベルではどうなのだろうか。家族・個人レベルでは、地域的特性はどうなっていくのだろうか。

また、ニライカナイ・竜宮信仰などと、家族・門中で行なう祖先崇拜との関係は、どうなのだろうか。

2022年11月27日

集落祭祀と統治者とのかかわり 南城論への旅 G10

集落祭祀は、王府や政府などの統治者による施策とどのような関係があるのだろうか。その点に注目して集落祭祀を考える必要があるが、次の指摘は示唆的である。

「沖縄の祖先祭祀は近世期の首里王府の政策によって成立していく側面がある」『沖縄県史各論編第九卷民俗』沖縄県教育委員会2020年p453執筆者赤嶺政信

「十五世紀の朝鮮漂着民の記述などから、古琉球の盆行事は、亡霊の鎮魂や施餓鬼的なものを目的としたものであり、また、今日のように家単位ではなく寺院で行われていたことをうかがうことができた。それが、近世になると、儒教的観念の受容等によって亡霊の鎮魂あるいは施餓鬼的な盆から今日のような祖先崇拜的な盆へと行事の意味内容が変容し、その変容した祖先崇拜的な盆行事が、儒教を根幹に据えた王府の政策によって、中央から地方へ伝播していったものと思われる。」『沖縄県史各論編第九卷民俗』沖縄県教育委員会2020年p457執筆者赤嶺政信

「神女就任儀式としてのイザイホー」の本質とは、王国時代の久高島の女性たちが聞得大君に仕える役目に就くにあたり、国王が神女としての認証を与える辞令書交付式の性格を帯びた国家的祭祀であったということである。イザイホーの歌謡においてニライカナイから来訪した神々が首里に向かうこと、観客を意識した見世物的要素の存在などは、イザイホーをそのように把握することによってはじめて理解することができるだろう。」『沖縄県史各論編第九卷民俗』沖縄県教育委員会2020年p569執筆者赤嶺政信

現代では、祭祀は宗教と結びつくものとして、政治と宗教の分離の原則にもとづいて、行政が祭祀に関与しないことになっているが、それが現実には、いかに受け止められているのだろうか。

また、祭祀とのつながりもうかがわれることの多い民話、ちて一話（伝え話）などは、地域住民たちの関心と呼ぶことが多い。それを時には発掘しながら、いかに継承するかが話題になる。その際、行政ないしは学校がどのようにかか

わっていくのだろうか。これらは、沖縄戦について体験談などを継承していく課題とつながる問題でもある。

関連して、沖縄戦以外での死者の慰霊と集落あるいは行政との関係のありようについても、検討が必要になっていくだろう。その点で、次の引用も、参考事例になろう。

「漁港には海難死した人達を慰霊する「竜宮神」の拝所が各地に見られる。」『沖縄県史各論編第九卷民俗』沖縄県教育委員会2020年p301-2執筆者崎原恒新

奥武・馬天には、そうした事例がありそうだ。

2022年12月03日

集落行事の減少傾向と今後 南城論への旅G11

かつては集落行事でもあった結婚にかかわる諸行事は大きく変化し、集落との結びつきは、近年ではほとんどなくなっている。私が、1970年代半ばに生活していた南風原の新川（当時、人口200人足らず）では、結婚式は集落行事で、それまで顔も見たことのない新郎新婦の結婚式に出席したことがあるが、そんな例は、今ではないだろう。近年では、結婚式（披露宴）そのものをしない例が広がっている。今後どうなっていくのだろうか。

このように、人生儀礼は、今では告別式を除けば集落との関係はほとんどない。あるとすれば、カジマヤーぐらいだろうか。しばらくまで盛んだった合同生年祝いも、集落行事ではなく、還暦を迎えた同級生会が開かれるぐらいだろうか。親戚縁者が集まる会としては、今でも盛んに行われているようだが。

本文で書いたように、集落祭祀は、一般的にいつて衰退してきているといえよう。家族としての祭祀は継続している例は多いが、それも縮小傾向がみられる。今後、どうなっていくのだろうか。対照的に、個人レベルでは、祈り・癒しなどを求めることが増えているといえるかもしれない。それは、つながりそのものの減少のなかで、不安などが増えていることの反映なのだろうか。

そうしたものの受け皿として、「ユタ買い」や新興宗教などが注目を浴びたこともあるが、近年ではどうだろうか。

集落祭祀の衰退が進むだけに、集落祭祀に関心を持つ若い研究者が調査に取り組む例が散見されることを、どう受け止めればよいのだろうか。研究調査や保存の対象になったときは、民俗習慣が消滅危機に近づいていることを示すといわれるが、その点はどうだろうか。

2022年12月09日

集落芸能 南城論への旅G12

集落芸能・娯楽に移ろう（p213~227）。沖縄では、歴史的にそうであったということはもちろんのこと、現在においても、専門的職業としてかかわる芸能家音楽家ではない一般の人々が大量に芸能音楽の継承創造にかかわっている特質があるとの指摘は広く行われている。マスメディアを介しての享受が圧倒している現在においても、沖縄の人々は、マスメディアを通しての芸能音楽を受け身的に享受しているのではなく、自ら主体的に表現し創造している。それ

は、世界的にも注目されている。有名な歌手、タレントに沖縄関係者が多いことは、地域でのそうした音楽芸能が豊かに息づいていることを基盤にして生まれていることを示しているだろう。

そして、メディアを通しての音楽芸能だけでなく、地域に展開する音楽芸能が、現代においても盛んに創造活動をしていることに注目したい。音楽芸能が過去の遺物ではなく、現代に生きるものとなっていることを反映しているのだろう。

では、そうした沖縄特性に、集落がどのようにかかわっているのだろうか。マスメディアを介しての芸能音楽を娯楽として享受することが広がるのは、1960年代以降である。それ以前の沖縄での芸能音楽の中心舞台は、各集落であったことに注目したい。本文でも、その事例のオンパレードになっている。

そして、音楽芸能がマスメディアを通してのものと、地域におけるものとが交差しあって展開している点にも注目したい。

現在の南城市では、カイサレー大会、琉歌コンクールなどが継続的に開かれている。南城市でとりわけ注目されるのは、シュガーホールが、地域芸能を取り上げて公演する機会をしばしば持ったり、出前公演ということで、各集落で公演企画をもっていることである。わけても、数回以上にわたって、地域に素材を取った創作ミュージカルを、地域住民の出演で公演している事である。洋楽を基本とするホールではあるが、地域の音楽芸能を積極的にとりあげ、地域の音楽芸能に分厚い蓄積を生み出す要因の一つになっている。

2022年12月15日

スポーツ・運動会 災害対応・秩序維持 南城論への旅 G13

スポーツ・運動会 (p 227～230) に移る。戦前からスポーツは存在するが、戦後の爆発的な展開が注目される。戦前における闘牛・馬競争など地域特性のあるものは戦後も継続するが、戦後のスポーツの多くは外来のもので、世界共通の種目が圧倒的に多い。沖縄では、そのスポーツの主舞台として集落が位置づけることが大きな特徴をなす。市町村主催の字対抗大会、さらに市町村対抗の県民体育大会での優秀な成果を得るために、集落での日常的な練習が展開された。集落内に運動できる場所をつくる話は、本文にいくつも登場する。

しかし、集落を単位とするスポーツ活動の展開は、徐々に学校における部活動、また市町村自身が運営する諸活動、また、道場・スポーツクラブなど民間団体による活動へと移行していく。

集落におけるスポーツ活動を担っていた青年会が弱まってきたことも大きい。逆に、老人会が高齢者スポーツを支えるようになってきたが、近年では思うに任せない例が増えている。

スポーツ人口が減っているというより、増加傾向にある現在、スポーツ活動における集落の果たす役割は、このまま、減衰していくのであろうか。

災害対応・秩序維持 (p 230～236) に移る。

これらの機能の多くが、1960年代を境にして、市町村行政・警察組織・消防組織に移されていき、集落が担うことが減少していく。それでもなお、緊急時に集落が担う役割は残っている。集落公民館が、災害時の一時避難所に指定されていることが、それを示している。また、災害対応についての訓練も随時行われている。

なお、p 232に、間切・村内法について記述したが、それは明治政府統治下の旧慣温行期に集約されたものである。

近世期のものとみなされてきたが、明治期に集約されたものである点を抑えておく必要がある。その点で、次の指摘を参照しておきたい。

「調査届けをさせて沖縄における罰則を把握しようとしたのが間切・村内法であったと言えるのではないか。これらは土地整理後に様々な分野で新しい法律が沖縄にも適用されるようになり、あるいは廃止、除外されていったと考えられるのである。」『沖縄県史各論編第九巻民俗』沖縄県教育委員会2020年p275執筆 田里修

2022年12月21日

移住者の増大と集落 南城論への旅 G14

ここで、一つだけ補足しておきたい。

近年、メディア報道により、移住者の増大が話題になることが多い。だが、今に始まったことではない。1970年代の新興団地形成が、先駆的存在である。当時は、団地（賃貸・土地販売・建売）としてのものが圧倒的に多く、それらは、小規模のものは除いて、多くが新しい集落としてスタートする。他に、1990年前後に始まるが、工芸作家が工房を建てて移住する例もあり、南城地域に新風を吹き込んだ点は、注目に値する。

その後、既存の集落内にアパートマンションが多数建てられ、そこに賃貸で移住する人が、かなりの数を占めるようになる。南城市内出身者が住む例もあるが、市外・県外からの移住者が多い。

こうして、近年の南城市の人口増は、自然増よりもこうした人々による社会増が圧倒的に多い事態に至る。そのなかで、集落の「作り方」にも変化があらわれる。生産活動の共同がなくなり、生活活動の共同も薄れる中で、新旧の住民のつながりをどのように形成するのか。集落と言う単位でまとめることができない事例も増えてくるし、従来にはないかたちでのまとめ方もでてくる。集落内のつながりが薄くても、市規模の広がりの中でつながりを深める人も多い。イベント・サークルやSNSでのつながりが高い比重を占める人も多い。

他方で、人口減で集落を単独で維持することが難しくなる集落が生まれてくる可能性がある。あるいは、集落単位でまとめるには巨大化している集落もでてこよう。

こうした集落をめぐる変化を生み出す一つの要因として、移住者の増大がある。それは、18世紀から19世紀にかけて増大した、当時の都市である首里那覇からの移住者が屋取を形成して、既存集落の中に、あるいは単独で集落を形成するに至る事例に匹敵すると言うよりも、それ以上に大きな変化を生み出し始めている。

そこで、既存集落内に移住した人々が、既存集落とのつながりをどうしていくのか、に関心が集まる。それには、多様なありようがある。

古村と屋取村の合同の形を取っている玉城集落を例にとると、1990年代末から、県内県外からの移住者が、住宅をたてて住み始め、かなりの世帯数となり、集落のなかでも存在感を持ち始めている。

既存集落の中に、小規模の建売住宅、或いは宅地分譲でできた住宅群の人々が、既存集落とのつながりを作っている例も多い。あるいは、つながりを模索している段階の人も多い。

結婚により、配偶者の出身集落の住民になる形の移住の場合も、1960年代から増えてきた。

移住者のなかには、移住前から、現移住先の集落とつながりを持つ例もあれば、全くつながりがなく移住してくる例

もある。そこで、移住先集落の慣習にならって暮らす例もあれば、集落に新風をもたらす例もある。それがうまくできず、「つかず離れず」の関係、「無関係」状態のままの例も見られる。

1980年代までは、集落の存在が前提となり、移住者は、集落の「慣習になじんで当たり前」という状況であったが、それ以後、徐々に変化し、住民と移住者との新たな関係の創造へと向かう例も出始める。

2022年12月26日

個別集落史の執筆は大変だった 各論編 南城論への旅H1

p241からは、集落ごとに記述する各論編だ。8集落が掲載されているが、このなかの4つの集落について、私が担当した。今回の「南城市の民俗」の調査活動の中心は、集落ごとの調査活動であり、全作業の多くは、この作業が占めた。71もある集落のすべてにわたって、住民インタビューを中心とする調査を行い、それらをもとにして、集落ごとに執筆するというのが、調査委員が就任する前から設定されていた計画であった。当初計画では、各集落10ページにわたるもので、全集落が執筆されれば、710ページを越す大部になるものだった。総論編は、それらにめどが立った段階で議論することになっていたが、各論編の大部分のめどが立たない地点で、それまで調査委員が各集落で行なった聞き取りをもとに、総論編を私一人で執筆することになったものである。

71の全集落を執筆するというのは、前例のない大胆な計画であった。なにしろ、それだけの調査執筆をする人材を集められるかどうかという問題が存在したようだ。20名の調査委員が出そろった段階で、委員会がスタートした。20名は、数名足らずの民俗研究者を除けば、この分野では初めての仕事であり、また、こうしたやや学術的要素をはらんだ文章を執筆する事には初挑戦の方々が多かった。そして、委員就任期間が長くなる中で、多様な事情で辞退される方が増え、最初から最後の執筆まで付き合いくださった委員は、数人にとどまった。

今から思えば、大変な計画、大変過ぎる計画だったといえるかもしれない。

活字になった集落は8つであるが、執筆のかかなりの部分ができあがったものを含めて、執筆にとりかかっていたが、結果として間に合わなかったものは、10以上になるだろうか。それらを含めて、完成できなかった63集落について、いつかは活字になることを期待したい。

ところで、大きな集落で、調査執筆できる人材および財政力のある集落では、すでに本格的な『字誌』が発刊されている。本格的な字誌とまでいえないとしても、字誌に準じる記念誌などを発刊している集落もある。私が眼を通したものは、総計24にのぼる。(総論の文献史料一覧参照 p237～239)

字誌にしても記念誌にしても、人的財政的にかなりのものが必要だ。それを支える行政的措置が講じられれば、そうしたものの発刊を願う集落にとっては、心強いだらう。

2023年01月01日

沖縄戦と集落 南城論への旅H2

個別集落史にしても、集落全体史にしても、戦前、戦中および戦争直後、戦後、この三つの時期をどのようにかわらせて記述するかが、一つの重要問題となる。

それは、まず、戦前のものが戦後につながった部分、戦後につながらなかった部分をどのように分けて分析するか。戦中、とりわけ戦時色が強まる日本軍の集落駐屯および10・10空襲以降、また米軍上陸後の地上戦に集落が巻き込まれて以降、集落組織の課題が軍事体制への対応となる中での展開。集落居住地を離れて避難壕などでの生活と、その間の移動、さらに米軍統治下の住民収容地に入ってからからの生活、さらに元の居住地にもどって、集落再建の進行のなかで、その前後の時期にはない集落生活・住民の安全確保といった課題に、上部行政組織の指示などが弱まる、ないしは

無くなる時期において、集落運営をどのようにしたか、といった問題。

この時期は、前代未聞の時期で、いやおうなしに集落が自分たちの判断で行動するしかなかった。区長などの機能が維持され、残った例、それらさえ喪失し、住民グループ自身の判断で行動する例、こうした「非常事態」下で、集落機能がどう展開したか、しなかったのか。

戦後数年間は、集落再建が課題となるが、人材不足もある一方で、海外からの帰還者も多く、生活基盤そのものが確保されない中で、いかに生命・生活を守り支えるか、という課題に挑戦せざるを得なかった。

この時期の体験が、やや落ち着きを見せ始めた以降の集落運営にどのようにかかわっていったのか。

大きな問いとしては、沖縄戦がもたらしたものは何だったのか、がある。沖縄戦に関する調査研究は、この間、大きく前進している。しかし、沖縄戦がもたらしたものについての考察研究は、調査研究と比べれば、むしろ今後本格化するものだろう。集落と沖縄戦というテーマの考察は、ことにほぼ未着手と言う段階にある。生活生産および人間関係の基礎単位的性格を帯びた集落が、沖縄戦という激震のなかで果たした機能、そしてその中で生じた変化は、どのような歴史的意味をもつのだろうか。私自身も考えていきたいが、研究の世界にあっても、そこに住む住民にあっても、その考察はいまなお未着手段階におかれてはいないだろうか。

2023年01月07日

集落変化の歴史的ポイント 集落による違い 南城論への旅 H3

前回記事で述べた沖縄戦前後の時期と同様に、もう一つの重要な歴史的ポイントは、1960年代にある。被雇用者となることが、職業の中心位置を占めるようになり、金銭商品経済が、それまでとは比べ物にならないほど比重を高めるなかで、集落が生産単位生活単位としての役割を低めていく。

そして、集落境界を越えての集落外との交流・移動が日常化するなかで、集落境界のもつ意味は低下し、集落単位で考えることの意味も低下していく。対照的に集落内での人間関係の濃密度が低下していく。集落内住民は、お互いに顔見知りであるのが当たり前という状況がなくなり始める。

さらにもう一つの重要な歴史的ポイントは、2000年前後にありそうだが、時期を確定するには、もうしばらく時間経過が必要だろう。その時期以降、各集落は求心力が弱くなる傾向を見せてきた。それだけに、集落起こしに挑戦する集落も増えてきている。それは、集落の中のどのような側面について求心力を弱め、集落起こしを追求するのか、という焦点設定の問題ともなっている。たとえば、公民館増改築・公民館事業計画、芸能事業、観光対応事業などは、よく目にするが、祭祀、スポーツ、生産生活、子育て面での進展ははかばかしくない。そのなかで、集落内外で広がっている任意グループの活動を、集落とどうかかわらせるのかといった課題追求が、一部の集落で進行していく。

以上述べてきた問題は、古村・屋取村・新興団地といった集落タイプの違いで、大きな違いが生じている。それらには、人口要因、経済要因、人間関係要因など、多様な要素がからんでくる。

たとえば、血縁性が濃い集落と、無い、もしくは薄い集落との違いである。たとえば、新興団地にあつては、血縁性は低い、もしくはゼロに近い。こうした集落では、集落としての結合はどのようになされるのだろうか。長い歴史をも

つ集落では、生産生活の共同を通しての集落結合があり、それは血縁性地縁性の蓄積ともなっているが、新興団地ではそれらは、ゼロに等しい。あるという、近隣で生活することが生み出す共通性であろう。それでも、お互いに出身地が遠くない、同じ沖縄県内出身者であるといった共通性、と同時に、共同生活を新たに作りだすことを通して、職業的文化的類似性、加えて、10年以上ともなると、子どもを通しての付き合いの広がりを始め、何かと共通性が広がり深まっていく。

ところが、賃貸のアパートマンションの住民たちとなると、移動性が他集落住民と比べて激しく、こうした共通性もそれほど蓄積しない。それだけに、すでに共通性の長い歴史的蓄積をもつ住民たちとの距離をなかなか縮めにくい。

こうした集落の変化と今後についての、全集落をまたがっての一般的検討考察だけでなく、個別集落の検討も必要になっていくだろう。

2023年01月12日

集落内の共通性共有性 南城論への旅H4

集落は、住民の間に、他集落とは異なる何らかの共通性共有性が存在することで誕生する。それにかかわるものを並べてみよう

- ・生産、生活の共同については、これまでに多くのことを書いてきた。
- ・地理的近さ、隣接性
- ・自然上の共通性 水路やカーの共有 丘で囲まれている
- ・住民の出自などでの共通性 祖先を共有することが典型 他には、出稼ぎや移民などのように、出身地の共通性もある
- ・血縁 血縁関係が薄くなっても、同じ門中ないしはハラに属することでつながることも多い。共同墓、つまり墓の共有もある。
- ・集落創設物語の共有。共同祭祀の存在。
- ・住民間のつながりの強さ・利害関係の共通性。 災害への共同対処で共有感覚が深まる例も多い。

これらが重なることで、住民間に集落意識が強化深化されていく。そこで、集落スタート（「創設」）時点に立ち返って、集落意識を再確認し強めようとする願いを生み出すことが多い。「南城市の民俗」掲載の糸数・小谷・中山・嶺井といった古村では、その願いが強い。だが、残念なことに、創設時点の正確な情報、とくに文字情報は、ほとんどないのが実情である。そこで、言い伝えられてきた創設にかかわる物語に頼ることが多い。その際、集落祭祀と結びつくことが多い。それらが、不鮮明な場合に、ユタなどの口寄せに頼ることも見られ、混乱をもたらすこともでてくる。

そうしたものを集めて「字誌」などに収録することもある。あるいは、住民の家系図をすべて集約し、歴史的な関係性を再確認しようとするものもある。

「南城市の民俗」掲載の喜良原、吉富などの屋取村では、多くが士族出身なので、家譜という文字情報に頼ることが多い。しかし、それは家のレベルのことで、集落レベルのことではない。屋取村は多くの場合、家々が離れて立地する散村なので、集落として結合が最初からあるわけではなく、長い時間をかけて形成されていく。

そこで、集落創設について語る際には、早期移住家の家譜をいくつかを並列することをきっかけにすることが多い。

「南城市の民俗」掲載の新開、百名団地などの新興団地では、団地建設をした行政やデベロッパーの資料に基づいて調べることが可能だろう。そして、そこに住み始めた住民の有志達の自主的な営みをもって、集落創設時の情報とすることが多い。それにしても、10年20年経つと、集落の歴史を語り始める。経済上生活上文化上の共通性をお互いに発見確認するなかで、住民のなかに心理的共通性が生まれ、集落意識が高まり蓄積していく。

2023年01月17日

集落史制作 南城論への旅H5

近年、これまでのように維持することに困難をもつ集落が増えている。それだけに、住民参加型で字誌などを編集発刊して、集落の存在意義を確認しようとする動きが強まりそうである。しばらく前には、沖縄戦を記録することを一つの主眼にする字誌が多かったが、それは、証言を語れる人の高齢化への対応でもあった。今後は、戦前戦中だけでなく、戦争で破壊されつくされた集落の再建、そして米軍統治下の労苦のなかで集落住民の協力によって打開してきた経験などの語りを集約し、集落の現在の「危機」を乗り越えようとする意図での字誌などの編集発刊も期待される。

ところで、地域史叙述には、トップダウン型とボトムアップ型がありそうである。トップダウンは、県レベル、市町村レベルでの調査研究執筆編集を起点にし、その「各論編」的な位置づけで、市町村史や字史を作成するものだ。県レベル市町村レベルでの記述を前提にして、字レベルのものは、それらの「応用編」と考えると、作成がたやすくなるかもしれない。だが、集落には集落の論理があり、そうした外枠に頼り過ぎるわけにはいかない。

だが、史料的事情がある。県レベル市町村レベルには、文献史料などが多く存在するが、集落レベルでは、物的資料や人的資料は豊富だが、文献史料は多くない。したがって、年代をさかのぼっての調査執筆は難しい。

それにしても、集落史は、住民参加で作成できるという強みがある。また、個々の集落史を集約したものを土台にして、市町村史や県史を書くというスタイル、つまりボトムアップのものが追求されてよいだろう。

集落史を追求しようとする際、物的資料や人々の語りや口述記録などが中心となり、文字資料が乏しいことがハードルをつくっている。文字資料としては、たとえば、明治期後半の新聞記事集成のなかには、個別集落に触れたものに有用なものが散在している。だが、それ以前のもの、たとえば、明治政府＝沖縄県庁が作成させた統計資料や「村内法」史料などがあるが、それらが事実をどれだけ正確に反映しているかについて、慎重にならざるを得ない。

その中であって、屋取村の士族家譜には、一定の有用さがある。

したがって、19世紀以前の集落史叙述には、なかなか得にくいものであるが、物的資料や口述記録などに頼ることになろう。

そこで、推理推測に頼ることが、過剰に多くなってしまふのが現実だろう。

2023年01月23日

19世紀以前の生活レベルでの集落史叙述 南城論への旅H6 最終回

前回記事で、「推理推測に頼る」ことに触れた。となると、「推理推測」する人の時代性特性を問題にしなくてはならない。それは、時代性特性が、記述に投影する可能性が高くなるからである。

例を夕食にとろう。夕食を、一人でしていたのか、何人かでしていたのか。何人かでしていたとすれば、どういう集団だったのか。家単位だったとすれば、その構成はどんなだったのか、使用人を含んでいたのか、血縁関係のある親族には、親・子以外の兄弟がいたのか。集団でしていたとすれば、誰が食事準備を担当していたのか。分業していたとすれば、どのようにしていたのか。こうしたことを、20世紀後半の執筆者が「家族で夕食を取り、準備は女性がしていた」と記述したとしよう。証拠物件が得にくいために、執筆者の時代性特性を投影して、20世紀後半によく見られる事例を前提に、そう思い込んで記述してしまい、実際にどれだけ示しているか心もとないことになる。

もう一つ例をあげよう。明治民法下の家父長制的な集団、あるいは、儒教イデオロギー下にあった18世紀以降の士族であれば、標準とされた姿があり、それでもって、推理推測することは、多少は可能だろう。しかし、一般農民をそれでもって推理推測することは、限界を超え過ぎる。

これに類したことは、日常生活レベルにおいて、男の「仕事」、女の「仕事」の問題として、多く存在するだろう。農業労働を、誰が担っていたのか。分業していたとすれば、どんな形だったのか。近年まで久高島などでは、農業は女性、漁業は男性と言う形の分業がみられるが、他の集落ではどうだろうか。

また、集落運営については、現在でも世帯主一人が中心にかかわるタテマエが多いが、そのために、集落の常会・総会などでは、圧倒的に男性参加者が多い。18～19世紀における集落運営はどうだったのか。男女に関わり方の違いがあったのかどうか。

男は政治、女は祭祀と区分する記述をよく見かけるが、祭祀に携わる男性神職は多いし、ユタが話題になる時、男性のユタ（トキ、サンジンソウ）の存在にも留意する必要がある。

沖縄全体にかかわる資料にもとづいてなされる記述が、個々の集落における実態にどの程度適用できるのだろうか、慎重になる必要がある。

こういったことを明らかにする文献史料が皆無というわけではない。「犯科帳」や民話など、有用なものも存在する。私が「沖縄県の教育史」を執筆した頃（1980年代後半）、「犯科帳」も参照したが、活用しきれなかった。

このあたりのさらにつっこんだ検討を、今後、集落史に関わる人に期待したいことである。

ここまで「南城論への旅」をかなり長く続けてきたが、今回で、ひとまず区切りにしたい。今後の私の「旅」のこの先の計画は、まだできていない。関心を持つ人たちとユンタクしながら考えていきたい。読者の皆さんのアドバイスもいただきたい。お待ちしております。